

な反対運動が起つたことである、日光の反対理由は當時としてはまだ観光地の生命線である華嚴の瀧の水量に影響するとか何とかいふはつきりした理由があつたわけではなく「中禪寺湖を群馬縣へ持つていくとはけしからん」とたゞもう遮二無二反対したらしい。

日光の反対も相當苛烈なもので實地測量に行つてゐる連中を地元民が襲撃したこともあり、測量隊は暴力團を護衛につけて襲撃に備へながら測量して歸つたこともあつたといふ、かうした生命がけの測量にもかゝはらず官廳の許可が幾年待つても下りず、計畫以來十九年、久平の病歿するまでとうとう工事着手にならなかつた、このために久平はあの手、この手の側面運動をかなり深刻に續けた、運動のためには有るに任せて金もバラ撒いたが撒いた金の反響は少しもなかつた、一説には間に入つて奔走を誓つた筈の連中が悪者揃ひで運動を口實に金を擱んで行つては私腹をこやしてゐたと傳へられてゐる、事業失敗の原因はほかにあつたらうがこの連中で寄つてたかつて久平の「畢生の大事業」を食ものにしてゐた傾向は多分にあつたらしいのである、商才に長けてゐた半面に人好しな善良さがあつたのであらう、もつともこれあるがために吝嗇家にならず貪欲な金錢の餓鬼ともならず、郷黨の信望をあつめつゝ生涯を終つたともいへやう。

中禪寺湖の引水計畫は失敗に終り恨みをのんで最後の息を引取つたが、郷土の産業開發に私財を傾けつくしたその熱意は後代のわれ等に學ぶべき多くの示唆を残してゐないだらうか、同村國瑞寺墓地に眠る墓石の前に佇むとき、未完成に終つた郷土の先覺者を偲んで波瀾多い生涯に感慨を禁じ得ない。

義人 天笠治郎右衛門

「じろゑんばし」の由来

時局工業都市として目ざましい躍進を續けてゐる太田と大間々を結ぶ東武電鐵沿線に「じろゑんばし」と呼ぶ驛がある。地名にしては随分變つてゐるなと誰でも一度は小首を傾げるのだが、これは今から三百二十餘年前の元和中に天笠治郎右衛門（註一）といふこの邊切つての豪農が洪水時の庶民の難澁を見かねて村の眞ん中を流れる蛇川に「石橋」を架けてやつた、それを徳として後世治郎右衛門の橋、約めて「じろゑんばし」と呼ぶやうになつたそれがいつの頃からか地名となり、驛名となつてしまつたものなのである、以下は治郎右衛門橋由来の一節である。

昨今の人が御覽になつたら一向に詰まらん橋だが、時代は何と申しても治水の知識も碌々ない江戸時代の初期である、五月雨や秋の暴風雨季節には木橋など一呑みにする洪水が時々襲來して交通杜絶の日が幾日も續いたに相違ないのだ、その蛇川に治郎右衛門は自費を以て里餘を離れた大字管鹽から大石を切り出し、大洪水にも決して流失しない石橋を架けて交通を助けた、行人の嘆きは忽ち解消した、橋の袂には宿場が起つた、治郎右衛門を讃へる聲は地名となつた「じろゑんばし」は今や商家櫛比し、藝妓の嬌聲もきこえる繁華街石橋を持つ新田郡強戸村の關門驛であり、石橋は繁華街の町名となつたのである。

ところで天笠治郎右衛門とは如何なる生涯を送つた人物であるか、その點になると二、三の斷片的なものを除いて資料らしいものはない、従つて話を進めるにはどうしてもいひ傳へによるものだが、それも今にして書き残して置かんといひ傳へそのものさへもめまぐるしい「時」の齒車の響音にのまれ消されてゆくことだらう。

新田郡鳥之郷村字鳥山の妙英寺に治郎右衛門が寄進した梵鐘がある、鐘銘（註二）に曰く

爰天笠治郎右衛門身雖混俗塵心染佛法常凝丹心而欣安鎮望九品之蓮基故鑄造三尺銅鐘合寄進者也云々

この妙英寺は大體天笠家の菩提寺だが、この鐘銘の文句によると治郎右衛門は何か深い仔細があつて佛教に執心した模様が手にとるやうである、また

「治郎右衛門はこの梵鐘寄進の際、つまり寛永五年ですが、その時梵鐘と一緒に庫裏や長屋門までは鐘つき堂まで新しく建て、寄進してをります」

と治郎右衛門の血筋を遠くひいてゐる新田郡生品村上村田洋裁業天笠惣平氏（五八）も語つてゐるやうに治郎右衛門の佛教執心は殆ど放身捨命もなんのそのといつた恰好である。

この惣平氏は治郎右衛門の實弟、與兵衛が養子入りした太田町保屋松家の子孫で、同家の菩提寺、太田町の東光寺の過去帳には保屋松はのち姓を天笠にかへたことが記載されてゐる、同氏の話は更に續く

「治郎右衛門は四人兄弟のうち二男で、長男は與五左衛門と稱して生家を継ぎ二男以下三男與左衛門、四男與兵衛はそれ／＼分家や養子に出されたのだと傳へられてゐます、自分からいふのも變な話ですが、保屋松家は當時相當な豪家だつたらしく、そんな點から推して治郎右衛門兄弟の生家も鳥山の豪家であつたとは間違ひないやうです」

治郎右衛門の生年月日は不明であるが、死亡の日は寛永十年八月十五日となつてゐる、妙英寺現存の位牌には「當寺中興の開基」とあつてその下に「徳庵永盛沙彌」それと竝んで「本室妙源大姉」の六字が刻まれてゐる、前者は治郎右衛門の法名、後者は俗名舟といはれた治郎右衛門夫人の法名であるが「中興の開基」の文字といひ、鐘銘中の言葉から推して佛教に對する治郎右衛門の歸依は眞に淺からぬものが感ぜられる、治郎右衛門夫妻には子供といふものがなく、久兵衛なる者を養子にしてゐたといはれるから、かうした家庭的事情が治郎右衛門の不足感を刺戟したのではあるまいか、いま一つはかうした家庭的事情に併せて後記する金山城の興亡をめぐる盛者必衰の世相などが晩年の治郎右衛門に無常感を起させそれが機縁となつて、たゞ一途の佛教精進となつていつたものではあるまいか、梵鐘寄進は彼が死に先立つ六年前である。

梵鐘を寄進し石橋を架けた年代を睨みながら治郎右衛門が生きてゐた時代を逝去の年寛永十年から遡つて推定してみよう、まづ寛永が二十年であり、元和は九年、慶長は十九年、文祿は四年、天正は十九年續いた、かうした歴史的事實から見て天正元年生れと假定すれば享年は六十一となる。

ところで前記天笠惣平氏の談によつても天笠家は由來長命で治郎右衛門等もみな相當の高齡で死んだとつたへられてゐる、さうすると享年六十一では昔の人としては長命とはいひ難いどうしても生年は更に元龜、永祿と遡つて考へねばならぬ、永祿元年生れとみるならば享年は七十六となり治郎右衛門の生れた年と考へて極めて自然だといふことになる。

永祿年間とは、いふまでもなく織豊時代の初期に當り太田町、金山々頂の金山城は關東の一角に赫々の武威を張つてゐた、當時野州佐野の城主、佐野宗綱は見舞の觸れ込みで東上州の情勢視察に乗込んできた上杉輝虎勢と一戦をかはしました天正十二年には小田原北條勢の金山包圍戦が行はれる

など幾多有名無名の士が武士道の華と散つていつた時代である、金山城方きつての勢力家であつた由良信濃守國繁の従弟にあたる鳥山丹後守高繁（註三）は鳥之郷村に居を構へ、北條勢金山城包圍の際は城に立籠つて奮戦した一方の旗頭である、その家臣達の多くは附近に散在して鋏を握り、一旦有事の際は武器をとつて合戦場裡を馳驅したものに違ひない、といふのは金山城が小高い山の頂にあり、附近に住むべき屋敷等を建築する餘地のない地形から推察しても家臣達は平素山麓の地にあつて農業にも精を出してゐた所謂郷士と呼ぶ半農半士が多かつたのではないだらうか、さうした考へ方が許されるならば治郎右衛門の生家も何等か金山城と關係をもつてゐたのではあるまいか更に想像を逞しくすれば治郎右衛門も青年時代武士道の洗禮を受けてゐたのではあるまいか。

天正十八年小田原落城で北條家の滅びるのと前後して北條と提携してゐた金山城もまた落城の悲運に遭つた、豊臣秀吉の世に入るや秀吉は關八州を徳川家康に與へ、家康は榊原康政を館林城主とするに及んで金山一帯の土地は康政の知行所となつた、鳥之郷村で天笠姓を名乗る古老の話によると治郎右衛門は金山城落城後、榊原から信頼され同地方一帯の年貢米取立役を頼まれたとのことであるがこれをもつて見ても彼が如何にこの地方に隠然たる聲望を持つてゐた人物であるか、わか

る、つまりこんな取立役の如き憎まれ役は尋常一様の人物では勤まらぬからである。

（註一） 治郎右衛門については次郎右衛門、治良右衛門とも書かれてゐるが天笠惣平氏の説に従ひ治郎右衛門を採用した。

（註二） 鐘銘を刻んだ人物は當時の妙英寺住職文鷲和尚である。

（註三） 鳥山丹後守高繁は治郎右衛門の祖先なりとする説もあるが丹後守は天正十八年に死亡してをり治郎右衛門はすでにその當時青年期に達してゐたとみられるべきで、兩者間に血の繋りがあるとすれば高繁は治郎右衛門の父または祖父に當るのではないかと思はれる。

新田勤皇黨 橋本正誠

盡忠報國の三十五年

文久元年、早春の或る日の夕暮れ、太田の含翠館に立つて案内を乞ふ旅の武士があつた。

「拙者は鮫島雲城と申す者御主人は御在宅で御座るか」「拙者が當館主人橋本正誠で御座るか……」

邊幅を飾らぬ主人は平常の通り「應一ツ」とばかり自分で玄關に立つたので、話は早い、様子にそれと察し直ちに客を案内して廊下を先に歩んでゐた。主客對座した奥座敷には深更まで行燈が明るかつた雲城とは、實はこれぞ後藤象二郎、坂本龍馬等と皇政復古に活躍、卓越した見識と豪放洒脱な文章で知られた志士で、後の京都府知事、中井弘藏（後に弘と改む）が世を忍ぶ假の名であつた。彼は天下の志士を募る密命を帯び義貞誕生の地に潜行、とり敢ず含翠館主人橋本正誠を訪問、智恵を借りようとしたのであつた。

正誠は比較的天折の故に、不幸新田勤皇史から没却されてはゐるが、その生涯は盡忠報國の二字に盡くる。殊に後半生に至つては「新田勤皇黨」の生みの親であると同時に、實に黨の推進力であつたのだ、今この隠れたる史實を正誠の「新田官軍日記」により郷黨の見参に供へよう。

新田勤皇黨の事實上の頭領であつた正誠は字を思誠、謾山と號し新田郡太田町本陣、橋本正誼の長男子として天保十一年に生れた、父正誼は壯年の頃から水戸に遊び東湖と交り、水戸學で固めた

勤皇家。正誠は幼年時代からこの父の薫陶をうけるかたはら書は中澤雪城、詩は大沼枕山、文を寺門靜軒に學び、何れも出藍の評判があつた、何んにしても正誠の祖先には、三十代を遡ると橋本八郎正員が儼然と控へてゐるくらゐで、正誠の脈管にはれつきとした勤皇の血が流れてゐた。八郎正員といふのは大楠公湊川討死の際までお伴した楠氏一族の錚々である、正誠が幼少時代から回天討幕に思ひを潜めるのも當然なのである、しかもこれを組織的に訓練したのが父正誼の水戸學なのである、正誠の尊皇の熱血はいやが上にも沸きざざるを得んではないか。果して長ずるに従ひ憂國勤皇の志士と交はり、なかんづく藤田小四郎（東湖の三男）頼復三郎（三樹三郎の實弟）金井五郎（後の之恭）等とは親交を結び、自宅を含翠館と稱して私塾を開設、大いに尊皇精神を鼓吹するに至つた。

含翠館の奥座敷に相對した正誠と弘藏とが一見舊知の如く肝膽相照し、討幕の秘策がいろ／＼練られたことは無論であつた、特に含翠館の會見で忘れてならぬのは兩士の間に新田一族による新田官軍糾合の密議が凝らされた事實である。それはそれとして正誠はこの會見ですつかり弘藏に惚れ込み新田滿次郎の女、竹子を媒酌せんとまでしたほどの熱のあげ方であつた。これには流石の弘藏もいたく困却したが、恰も中央の形勢が急を告げ、一刻も猶豫ならぬ情勢となつたので弘藏は初めて本名を名乗り、此處太田まで潜行して來た眞の目的を打明け、結婚の出來ない由を告げ江戸へ去つた、竹子はその後正誠と強戸の岡田家の奔走、澁澤久太夫（後の榮一）の斡旋で井上馨の夫人となつたのであるがそれは後日の話だ。

水戸勤皇黨の武田耕雲齋一行が筑波の義舉に敗れ、上洛の途次、上州入りをせんとして阻まれ、

足利在八木宿にあつたのは元治元年十一月の初めであつた、この月十日正誠これを聞き、萬難を排し一行を賓客として含翠館に迎へ、歡待すること二日二夜、共に語つて悲憤慷慨した。微雨に煙る十二日朝一行は金井之恭等に導かれ西毛の間道指して出發した、正誠は當時を追想してかう記してゐる。

「小四郎その日の扮装は軍装に虎鞘の大刀を佩し、玄關に立ち、正誠の手を握り、われは勤皇の捨石なりと悲壯な決意を告げれば、正誠無言でその手を確く握り返し、新田勤皇黨糾合の決心を眉宇に示す、通ずるものありしや否や、訣別す」と。

新田勤皇黨といふのは義貞公の後裔新田滿次郎（後に男爵）を盟主とする新田一族並に附近同志の血盟であつた、即ち正誠が勤皇黨結成の首謀であつたことは最早これにより一髮の疑念をも樓めぬ明瞭な事實なのである、その後新田勤皇黨組織の計畫は、どうしたものか外部に洩れ、義舉は挫折同志之恭等は幕吏に捕はれ正誠は逃れて京都の頼復三郎方に潜んだ。

しかし世局は變つた慶應四年、官軍北上し、錦旗は高崎城まで進んだ。

正誠は時こそ來れりと同志金井之恭、大館謙三郎、谷川辰三、細野傳左衛門、宮崎修吉、篠塚勝次、岡田昌道、佐々木英之助、石川熊武。

等と共に含翠館に據り新田滿次郎の名で新田勤皇黨の從軍願ひを征東總督に歎願した、その甲斐あつて

新田滿次郎其方儀祖先左中將之遺志を繼ぎ爲國家忠勤仕度趣再三及歎願に附中軍隨從中附候條無用之冗兵を除き精撰之士を率ひ勉勵盡力可致候事

慶應四年三月十二日

の公書を受けた、こゝに新田勤皇黨が堂々誕生、新田官軍として勇躍天業恢弘の第一歩を強く踏み出した、正誠と弘藏の密約からは實に七ヶ年の歳月が流れてゐる、かくて郷土史に燦とかゞやく新田官軍の出陣となつたのである。

正誠は勿論黨の領袖となり沼田城に向ひ戸倉口に出陣して武功があつた。明治元年歸郷するや郷土の偉人新田(義貞)、高山(正之)兩神社造營を行政官に建言、後大政官少主記に任官、間もなく病に瘳れたのである。正誠筆の日記によれば世に現れてゐる新田勤皇黨なるものは史實とは餘ほど相違してゐる點があるから、これにより大いに訂正さるべきである。

時は明治六年正月、病衰甚だしく、まさに幽明境を異にせんとした刹那、靜かに半身を起して嗚、恭しく皇居を拜し頭を垂れ

「臣正誠未だ聖慮に副ひ奉ることが出来ません……」

至誠盡忠千載に芳香を放つべき新田勤皇黨、覆面の首領橋本多賀之介正誠はこの一言を残し信友金井之恭に抱かれたまゝ合掌、東京駿ヶ台の陋居で永劫の眠りについた、享年三十五。

黨史からみれば外傳になるが明治三年金井之恭の「高山操志」を著すや正誠乞はれて校閲し、更に

義烈上毛今若^レ昔新田公後有二高君^一の文字を寄せてゐるが、烈々の皇道精神を以て三十五年の生涯を皇政復古に捧げた正誠もまたまことに

高山君後有二正誠^一

といれて少しも過褒でないのである、正誠の末妹、關根壽満子刀自は伊勢崎市に外孫橋本正己氏は太田町に現住、新田官軍に關する資料と正誠の日記を門外不出として保存してをられる。

節堂 環 林 藏 傳

黎明期の指導者養成

慌しく移り行く時勢の流れを他所に、山田郡龍舞村(休泊村龍舞)に世を避けて、黙々と子弟の養育に晩年を捧げ、明治十九年三月十六日、五十九歳でこの地に歿した節堂環林藏を語る人は近頃あまり見當らなくなつたが「おらが村の先生」として龍舞附近の人達だけは、今もなほかはらぬ敬慕と感謝に先生の遺徳を讃へてゐる。

節堂先生は文政十一年下總の香取郡小松村に生れた、父の日暮某は當時水戸家を浪人してゐたといふから、おそらくこゝで塾でも開いて村の腕白連中を相手に読み書きを教へてゐたことと思はれる、先生はこの父の下にあつて、父を師として勉學してゐたが二十一の時、心に期するところあつて江戸に遊び、安井息軒の門を敲いた、四五年間こゝで苦學勉勵したが、どういふものか「修學遅々として進まず」師の息軒もほと／＼愛想をつかしたがそれ以上に先生の方でもあまり腑甲斐なさに呆れはて、學業を放棄して飛び出してしまつた、放浪生活の末にたどりついた下野の國足利在の御厨村(群馬縣境)で、私塾を開いて機業地の子供達に教へたのがはじまりで、後に龍舞へ落着くやうになつたと語り傳へられてゐる、が「學業半ばで放浪生活に入り」足利近在へ流れ着いたといふことも眞ッ向からは信じ難いのである。

昭和十四年山田郡教育界が編纂した「山田郡誌」は足利近在へ來るまでの徑路を次のやうに述べ

てゐる。

「節堂、資性穎敏、進取の氣象に富み、郷里の産業振興を目的に足利の機業を視察、時に二十五歳、土地の人節堂に學ぶ者多く御厨村天王に塾を創す」

この方が筋道が通つてゐる、節堂先生の郷里香取郡では當時すでに長部村を中心に世界最初の産業組合創始者といはれた、大原幽學がゐる農村共同組合「先祖株組合」をつくり合理的な農業の經營法を實行してゐたときであり、野望に燃える青年達が、大原幽學に刺戟されない筈がなからう、あらゆる迫害に抗しながらも敢然と農村の新秩序を確立していく幽學の行動は青年達にとつては尊敬の的であつたに違ひない、功名心に燃える頃の青年節堂が新しい産業を開發することによつて郷土を益しようと、機業に着目し「よし織物がいい」と若き日の夢と熱情のすべてをこゝに賭け、固い決意を抱いて足利地方の視察にやつて來た、といへば肯けないこともないのである。

その頃は、多少でも學識があれば土地の人達も放つたらかしては置かない、たのまれて一人教へ、二人教へしてゐる間にいつしか「先生々々」と慕はれて御厨村天王に塾を開いてしまつた、節堂先生にすれば郷里を出るときは決意もどこへやら、する／＼べつたり私塾のなかに閉ぢ籠つてしまつたことは、時折顧みて慚愧にたへないものがあつたらう、が師弟の情愛にほだされて動きがとれなくなつたと見るべきだらう、節堂先生の教授振りは非常に嚴格を極めると共に、熱情溢れた火の出るやうなものであつたといふ、塾生八十餘名のなかには後に初代桐生町長に推されて人望のあつた小内孫一郎（天保十年生明治二十九年歿五十八歳）や地方の殖産興業功勞者として「先哲偉人傳」にも傳へられてゐる武藤幸逸（天保九年生大正三年歿七十七歳）などがゐた、後年同地方の開發に

偉大な指導者となつたこれ等の人達が少年時代に受けた感化のいかに大きかつたかを思ふとき、節堂先生の立派な薰陶振りも偲ばれるのである。

御厨村での數年間、人を教へてみてはじめて、生半可な學才を誇り顔に、人を教へることのいかに誤りであるかを悟つたのである、節堂先生の凡人でないゆゑんはこゝにあり、先生自身もまたこのときはつきりと自らの姿をとり戻したのであつた、思ひ立つと一日一刻も過誤のなかにゐられなかつた塾を解散して江戸へ出た、さうして、これも上州の生んだ偉材京ヶ島村出身の林鶴梁に師事したのである、孜々として八年間文字通り命がけの勉強を續けた、師の鶴梁も特に目をかけ、たえず激勵してくれた、ところで節堂先生には一つ缺點があつた、それは性格がどうも少々狷介でこれには同僚や門下生達もよく手古擦つた、師の鶴梁もやはりこの點を心痛し、環の姓を與へてくれぐれも將來を諭し戒めた、以來先生は「環」姓を名乗つたのである。

鶴梁の門に學んだ後しばらく節堂先生は諸國を歴遊してゐる、この頃はもう青年時代のやうに熱情を驅つて徒らに事業慾を満さうといふやうな輕薄なところは微塵もなかつた、節堂環林藏は儒者として立派に甦生したのである、何年か後に再び懐しい兩毛の地に足を入れ、當時の塾生であり、龍舞村の舊家である小内孫一郎を訪ね、乞はれるまゝに同家の離座敷に私塾を開き、騒然たる幕末の風雲を他處に、向學心を燃えたとせてゐた村の青年達に漢籍、儒學を講じながら、こゝに腰を据ゑた、この間江戸の寺門靜軒は節堂先生の學才を惜しんで幾度か使を立て、江戸へ呼び戻さうとしたが固辭して受けず、明治五年學制の頒布となり小學校が創立されてからは廣澤校（桐生市）龍舞校（休泊村）の教師などに甘んじながら五十九歳で病歿した。

歿後篋底に「易蘇語備」「梧影文話」などといふ易や詩文に關する著書が残つてゐたといふが、どこへ散逸したものか今は一つもないのが眞に惜しい、私塾を開いてゐた小内家(當主己三郎氏)の離座敷も現存してはゐるが幾度かの改築で殆ど當時の面影がない、僅かに残つてゐるものといへば、時折村人の手向ける香華に遺徳が薫る同村寶林寺墓地の一隅に苔むしてゐる「節堂先生の墓」とある墓碑だけだらう。

行動する田島霞山

三つの時代を貫き輝く實踐

明治三十七年日露の役が起つた際東毛地方には書畫會を開いて、その賣上げ全部を軍事費に献金し、献金運動に範を垂れた人が二人あつた、その一人は新田郡世良田村の毛呂桑陰翁、他の一人は佐波郡島村の田島霞山翁である。

翁、名は謙三郎、字は其昌、通稱を定邦といひ、別に芋翁とも號し、その居を維新堂といつた、嘉永二年十二月佐波郡島村の有名な養蠶家田島彌兵衛の三男として生れた。

田島家は新田公の支族である關係から代々「勤皇」の二字を家憲とし、この家庭に生れた翁が幼少時代父から勤皇に關する教育を受けたとは想像に難くない十二歳の時はじめて父の師である藤森天山について儒學の講義を聞き、またこの頃家に入入する父の友人から水府における勤皇志士のことなどを聞かされたものであつた。

この當時の教育、見聞が、翁の一生を通じて、最も腦裡にしみ込んだことは十六、七歳の頃すでに志士としての見識を持ち慷慨淋漓自ら禁ぜざるものがあつたのである、明治元年二十歳の時には、この氣概を押へ得ず戊辰の役に參加し、上野戦争の際には小隊長として天晴れな働きをした。

即ち、戊辰の役が起るや翁は同郷の先輩金井五郎(之恭、後貴族院議員)、大館謙三郎(霞城、贈正五位)、等と共に新田俊純(岩松滿次郎)を推して盟主とし、勤皇の義軍を起して上野戦争に參加し、幼時父から受けた教育に答へて孝の最善を盡したのである、この間の事情は翁の二子田島群次郎、下。



田島霞山

。城庸作兩氏の編纂に成る「霞山遺稿」中の一編「戊辰從軍行」に明かである。維新後、霞山翁は兄彌平を助けて島村勸業會社の經營に當り蠶種の海外輸出に従事してゐたが、餘暇があれば、明治詞壇の諸大家と往來し、苦學研鑽大いに見るべきものがあつた。

當時藩閥打破を唱へる自由民權の運動は全國に澎湃としてゐたが、血氣に勇む翁は何んで黙視出来よう、直ちにこの運動に參加し、板垣伯に従つて遊説にかけ廻り遂に郷里島村へも板垣伯とともに乗り込み、村民に自由民權の説を鼓吹したものであつた。

しかし明治十六年三十五歳の時驟然として覺るところあり、同志と別れて郷里に歸り、まづ父彌

兵衛の墓に詣でて家業に勵むべき誓ひを立て、ついで兄彌平に對して

「これからは専ら家業に勵み、余暇あれば文墨に親しみ、國家に事ある以外は言動を慎み、祖先の遺風に從ひたい」と告げて、自由黨參加時代の輕舉妄動を謝したのであつた、翁はそれ以來出でては桑園を耕し、入つては蠶業の研鑽に努め黙々として養蠶の理論と實地を研究すること三年餘、遂に明治廿年九月には研究の結果を「養蠶眞寶」三卷に纏めて世に問ふことが出来た。

「養蠶眞寶」の書名は翁の師中村敬宇博士の命名になるもので、これを題字とし、依田學海、物集高見博士が序文を、信夫恕軒が跋文を寄せてゐる、學海はその序文に「蠶を養ふはなほ士を養ふが如し」(原漢文)と筆を起してゐるが、この一文は維新の志士―自由黨の闘士から養蠶學者になつた翁に相應しきものがある、内容は翁の例言にもある通り

「始め吾れこの編に志すや、先考の遺訓と吾が意見とを記せんと欲し、殆んど稿の成るや、家兄いふ今日蠶桑の業廣く世に行はれ、隨つて蠶書の出づる者も亦尠からず、而して衆説を輯蒐するのみ、更に自家の考案經驗を附する者なし、故に自家の説に加ふるに諸説を以てせよ」と

によつても翁獨特の養蠶書であることが想像出来よう。

當時上州島村田島家の養蠶は全國に聞えてゐたので、この書の賣行は極めて良好であつた。後に本書は長くも昭和九年十一月十五日陸軍特別大演習の際本縣蠶業の古文献として天覽の光榮に浴してゐる。

以上の事蹟を見ると翁は志士の風格を備へた養蠶家であるが、最初に述べた恤兵書畫會によつても明かな通り、翁は書畫においてもまた一家を成してゐた、最後に翁のその面を紹介しよう。

翁は慶應元年幼時の師藤森天山の逝去後、父とともに京都に至り、山陽の副頼支峰の門に入つて師弟の契を結んだ、この時は僅か數日教を受けただけであつたが、明治元年十二月支峰が東京駿河台に塾を開いてからは約

三年間教を受け、支峰門下の三羽鳥として詩文の才を認められた。

即ち三羽鳥とは小倉迂堂、薄井小蓮、田島霞山の三人で、霞山は最年少者であつたが、迂堂小蓮と兄たり難く弟たり難しと評されてゐたといふ、後詩文は小野湖山、中村敬宇に學び、經書は幼時藤森天山の外、佐々木愚山にも學び、壯年時代には吉野金陵に學んでゐる、繪畫は幼時から金井毛山(勤皇畫家金井烏洲の弟)に學び、詩書と共に餘技の域を脱して一家を成してゐた。

東京に於ける交友には

大槻盤溪、依田學海、川田蕪江、信夫恕軒、森春濤、三島中洲、金井金洞等

の諸大家があり、同郷の友人には共に戊辰戰爭に参加した大館霞城、桃井可堂等があつて、晩年まで往時を追憶しては國事を談ずるのを楽しみにしてゐた、毎日新聞社々賓徳富蘇峰翁とは明治四十二年維新志士遺墨展以來百年の知己となり、大正十五年十一月十四日、七十八歳で歿するまで交友が深かつた。

著者は養蠶眞寶三冊の外、蠶桑餘事、蠶事分業論、臨池論、吾妻畫卷、山水清音卷、霞山詩稿等だが、これ等は皆翁の嗣子田島群次郎、下城庸作兩氏によつて「霞山遺稿」上下二冊に收められ、廣く各地圖書館の所藏となつてゐる。

最後に逸話の一つ、戊辰の役にも參加した志士、民權運動にも投じた思想家、そして當代一流の文人と肩を並べて些もヒケをとらなかつたこの翁が、日露開戦と聞いては矢も楯もたまらず、一時は出征志願の擧に出ようとしたが、年齢の關係から思ひ止まり同年四月自宅で恤兵書畫會を開き筆を劍と銃に代へ、紙をもつて城塞を築くのだ

と數百枚の書畫を揮毫して同好の士に頒ち、潤筆料全部を政府に献納した、その氣概は今なほこの地方の銃後を感奮せしめてゐる。

一九八

篤農家 石原 佐市

「佐市桑」の創案者

養蠶七分、農業三分で立つて來た佐波郡剛志村は、古くから養蠶に關しては實に熱心であつた、殊に養蠶の基礎をなす桑の改良については努力の跡顯著なるものがある、今でこそ指導機關があつて、蠶についても、桑葉についても改良に改良を加へてくれるから養蠶家の苦心も軽減されてゐるが、明治維新前後の養蠶家には實に苦勞が多かつた、當時剛志村で桑葉の改良に先鞭をつけた功勞者で石原佐市といふ人物があつた、即ち「佐市桑」の改良品種創案者がこの人なのである。

この影響によつて同村からは富岡榮藏の「富榮桑」井上清十郎の「清十早生桑」等の改良桑が出た、この二つは現在でも多く用ひられてゐるから「富榮桑」「清十早生桑」の名を知らぬ養蠶家はなないが、それらの土臺となる「佐市桑」に至つては、すでに忘れられて了つた、また石原佐市は桑葉の改良者としてばかりでなく、篤農家でもあつた、彼の農耕法は肥料不足を克服して是非とも増産を行はねばならぬ現下の農家にとつて、参考となる點が非常に多い。

石原佐市は天明七年佐波郡剛志村大字下武士の農家に生れた、若い頃から農業と養蠶業には熱心であつた、單なる熱心ではなく、彼の熱心には常に研究が伴ひ特に地力の研究についてはこの地方の第一人者であつた。

中年の頃養蠶界の先覺者福島縣伊達郡の川久某と交り、桑についての知識は彼に負ふ所が多かつた。

恰度文化年間に降雨續きの年があつて、剛志一帯は湿地と化し、桑樹が續々と枯死して養蠶不能に陥り、村を擧げてその對策に腐心したことがあつた。

この時佐市は平素の研究から實成功を見るに至つた。

即ち佐市の改良した桑は開綻と同時に桑芽の上に花芽が出て一度霜害を受けても、他の桑に比して被害後の發芽が速く、かつ根が丈夫で如何なる地質にも適し樹齡も長いので剛志村一帯の惱みであつた湿地と晩霜の被害は完全に解決されてしまつたのである。



石原才一の墓

● 生苗が湿地に強いことを知つて、これを栽植したところ、一株だけが見事に成長した、これに力を得て更に研究を進め、同地方で年々苦しむ晩霜の被害をもこの際一舉に解決しようとする努力を重ねた結果遂にその

一九九

この時から佐市の改良桑は廣く植附けられるやうになり、剛志の養蠶は益々盛大になつた。

明治初年熊本縣の勸業吏が蠶業視察のため剛志村を訪れた際、佐市の改良した桑を見て、その優良品種であることに驚き「佐市桑」と命名してから、その需要は急に激増し、明治七年頃から關東は勿論、遠く四國、九州等へ毎年數百萬本の移出を見るに至つた、佐波郡は改良者の地元だけに明治二十二年には約七割が「佐市桑」で占められ、佐波郡の舊稱佐位郡の名に因み「佐位一」と呼んだものである、遂に佐市の功は認められて同年「佐市桑」は東京農科大學試験桑園にも栽植されるに至つた「佐市桑」はその後も全盛を極め、剛志村大正三年の經濟改良調査書には五割以上の植附を見てゐるが、明治の末期から大葉ものゝ種類が賞用されるやうになり、大正十年には「佐市桑」もその跡を絶つてしまつた、しかし佐市が前後五十年間日本蠶業界に盡した功績には没すべからざるものがある。

佐市の後は現在四代の孫石原富司氏が繼いでゐるが、氏の語る佐市の「農耕家憲」を次に紹介しよう。

横へ擴げずに深く耕せ、小面積から多く穫ることに心掛けよ、肥料は堆肥と木灰に限る、作物は順環して栽培せよ。

實に經濟の原理に叶つた農耕法でないか、かつ肥料の不足は自給肥料で補ひ、小面積から大收穫をあげようとする現下の増産計畫に一脈相通する所があるのは深く考へさせられる點である。

以下は剛志村の郷土史研究家佐田角太郎翁の話

佐市は地力と季節に重點を置いて肥培に勉め、播種期及び播種量等を前もつて定めてゐたやうです、また栽培法としては深耕を尊び、整地の丁寧なことは驚くほどだつたといひます、例へば他人が淺く一段歩耕す所を、

佐市は深く三畝歩耕して、同量の收穫をあげたといふことです、また穀物、蔬菜その他一切の農作物は必ず輪栽法によつて栽培し、その有利なことを隣人にも教へてゐたといふことです、肥料のことを申しますと堆肥を主肥としまして、當時すでに堆肥舎を設けました、これに配合肥料を應用し、土地に従つて施用量を斟酌し、追肥の季節、回数等を定めてゐた、と申しますからその科學性には驚かされます、また大豆作肥料としては木灰の適肥であることを主張して灰小屋を作つて貯藏し、木灰を粗末にすることは堅く戒めてゐたといふことです。

かやうに種子の撰擇、播種期、中耕、除草、收納、乾燥、調製、貯穀等一として適量、好期を逸することなくかくて毎年佐市には違作がなかつたといふ、従つて佐市の生産した農作物は、商人が取引する際にも秤量したことがなく今に石原家の誇りとなつてゐる當時「武士の農神」の稱があつたが、過褒ではあるまい、この農神といはれた佐市も明治四年五月二十五日八十五歳で歿した、たゞ墓石一個を残すのみで遺物が何一つないのは淋しい極みである。

「富榮桑」の發見者富岡榮藏(天保十三年—大正七年三月二十四日)「清十早生桑」の改良者井上清十郎(萬延元年—昭和四年四月十日)は共に同村小此木の人で、今もなほこの二桑は晩秋蠶用として用ゐられてゐるが、われ／＼は何れも佐市の影響によつて改良された桑であることに思ひを致すべきである。

碩學 鈴木廣川先生

勤皇畫家 金井烏洲の師

鈴木廣川は徳川時代も半ばを過ぎた安永九年佐波郡剛志村大字保泉の農鈴木家に生れた。

先生通稱は四九郎、諱は惟親字は克敬、廣川又は漂麥園と號した。

けだし廣川とは村の南部をゆるやかに流れる廣瀬川からつけた號であることも想像され、漂麥園は南風のおとづれる四、五月の頃見渡す限りの麥畑が青波を漂はせる寓居の風光を愛してつけた號であることも想像される、先生の生れた當時は家も貧しく、十分な勉強は出来なかつたが幼時から學問を好み、餘暇のある時は、いふに及ばず、田圃の往來にも手から書を離さなかつたといふ。

初め徂徠學を修め、ついで闇齋學に移り、更に進んで博く諸大家の說を研究し、遂に一家の意見を立つるに至つた、先生の専門は勿論儒學であつたが、地理、歴史にも精しく、數理の學にも達してゐた、且つ識見高く、説く所は社會に迎合することなく、俗流を超越するものがあつた、しかも俗を離れず常に高遠な理想と確固たる信念とをもつて世人を教導したものであつた。

時には江戸にも出で龜田鵬齋等の一流大家とも交はり、大いに意見をた、かはし或は學者の說を評し、該博なる引證と適切なる引例によつて眞に人をして叩頭せしめずんばやまざるの概があつたといふ。最も詩文を能くしその顯著に係るものは行文流暢にして氣品高く、いづれも後進に教ふるところが多い。

門弟の主なるものには金井烏洲、天田熊郊、吉澤精溪、岡田綠園等の諸大家があり、金井烏洲が畫家として勤皇の志が厚かつたのは、四九郎先生の影響によつたことは想像に難くない、資性濃厚篤實、明敏にして博覽強記なる先生を崇敬するものは上野、武藏の兩國にわたり、當時「保泉の村に過ぎたるものは、四九郎先生と唐金の鳥居」と謳はれたといふ。

唐金の鳥居とは保泉に鎮座する村社勝山神社の鳥居で、當時青銅製の鳥居は近隣になかつたのでかういはれたものだからな



鈴木廣川

● 受けるに至り、天保九年五月五十九歳で病死したが郷人舉げて先生の徳を慕ひ、哀惜しないものはなかつたといふ。
先生の墓は勝山神社裏の共同墓地にあるが「江戸繁昌記」で有名な寺門靜軒が墓碑銘を書いて、先生の人とな

家は貧農であつたが、晩年はその人物を認められて保泉の名主に挙げられ、民政に力を注いだ褒賞として士の待遇を。

りを傳へてゐる、その一節に曰く

初め徂徠の學を講じ、後博く諸家にわたる、且つ詩賦をもつて自ら樂しむ、且つ算術に精しくまた地理に詳かなり、門人年に多し、これより先その地の學者皆闇齋の學を奉じ、詩文に従事する者あらざることこれを久し

くす、後進風霏して漸く孤陋の習ひを變ず、先生薰陶の功偉ならずとなさずといふか、その幹敏督率を具へて能くその郷を治む、故を以て嘗て褒賞を蒙り雙刀を帯ぶるを許さる、學ぶ所の實を見るに足れり、死するに及び人哀惜せざるはなし(原漢文)

著書には漂麥園集十二卷、漂麥園自詠、伏枕漫草、凶荒歌、續凶荒歌等があり、漂麥園集は九卷まで元剛志小學校長奥山陽氏によつて刊行されたが同氏の轉動後は中絶のまゝになつてゐる、漂麥園集には孝子傳、楠公論等があり、世人を奮起せしめずんばやまざる氣慨が満ち／＼してゐる。

善雄寺の堯慶和尚

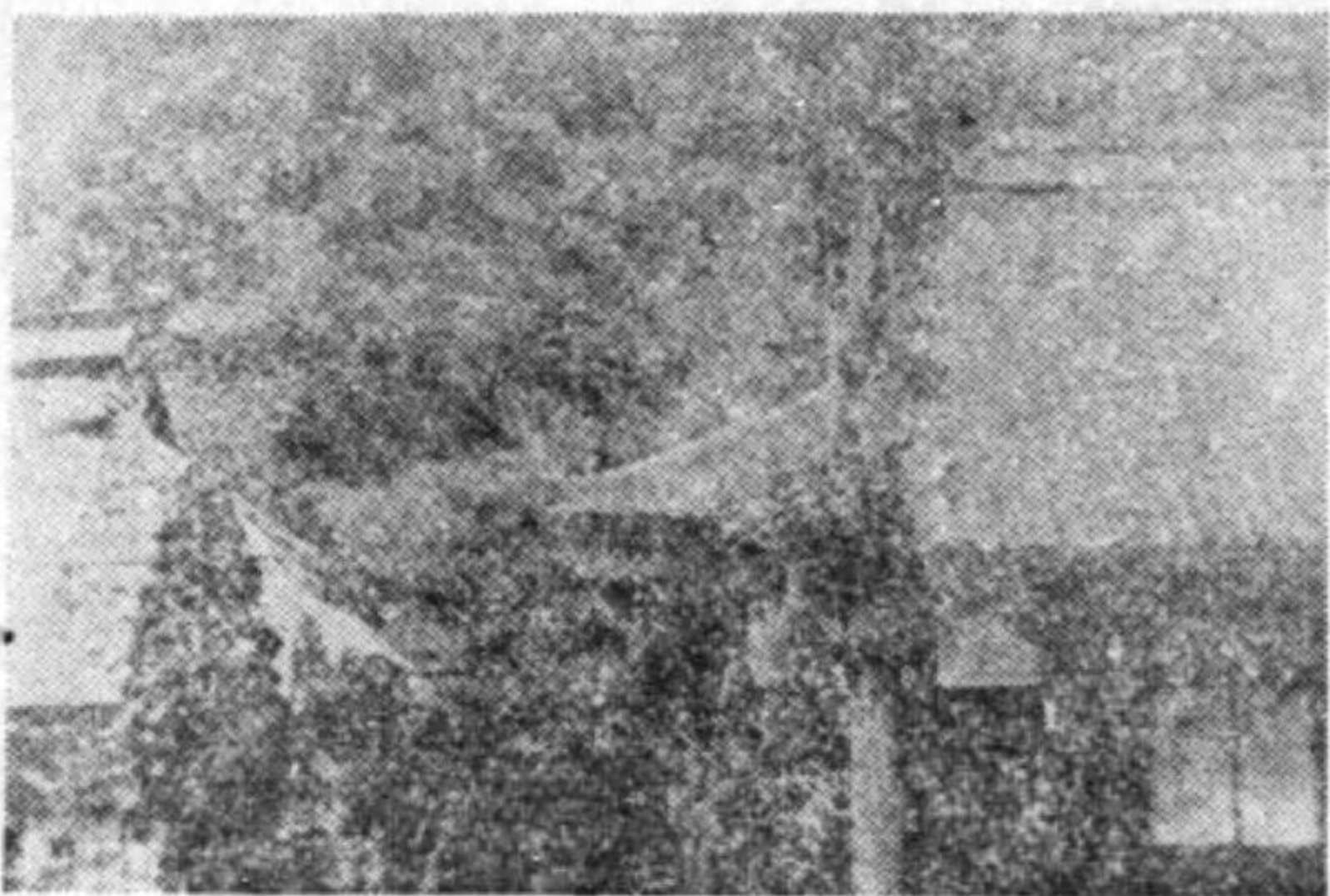
生きながら入定

堯慶和尚といふのは勢多郡東村萩原所在天台宗善雄寺第二十二世の住職で、文化十年三月十二日「わしも八十になつた、八十といへばお釋迦様の御入滅になられた歳だ、いかなる善根の故かこの長壽を保つたことはなんといふ仕合せなことであらう、佛恩報謝に日頃信ずる薬師如来の化身となり、病災厄難に苦しむ人達を救ひ申さう」と大誓願をたて穴を掘つて生きながら入定、大願成就して薬師様になつたといふ「善薬師如来縁起」の主人公なのである。

堯慶は享保十九年四月吾妻郡本宿村(今の坂上村字本宿)の庄屋加邊治左衛門の二男に生れ幼名を清次郎といひ、神童の評判が高かつた、なんによらず一を知つて十を知る利澄もの、一度本を讀めばその次には本なしですら／＼と誦んで聞かせる、お習字は七つ八つでもう大人も及ばないうま

い字を書いた、その頃の讀み書きはすべてお寺の坊さんに習つてゐたので清次郎も毎日お寺へ通つて勉強してゐたのだが、いつの間にかお経まですっかり覚えてしまつて、坊さんになりたい、なりたいたいと母親を手こずらせた、両親も持て餘しお寺の住職と相談した結果たうとう出家させることになり、江戸へやつて上野東叡山寛永寺のお弟子にした十一歳のときであつた。

寛永寺に入つてからの堯慶は文字通り刻苦精勵して天晴れた天台宗の智識となつたが日光の某寺に七年ばかりゐて卅五、六のとき善雄寺廿



善雄寺

◎二世の法燈を繼いだのである。善雄寺は延元三年六月(七月には新田義貞が藤島で戦死してゐる)弘秀上人の開山になり徳川時代には天海僧正が日光への道すがら立寄つたことがあるといふ縁故から十一石二斗の御朱印がついてゐた由緒ある寺であつた。學徳兼備、持戒堅固、さうして金剛不壞の信念に燃えてゐた堯慶であつたから村民の教化には寢食を忘れ、一身を捧げて奔走した。

こんな窮迫の眞最中に善雄寺の住職として東上州の片隅桐生へ五里、足尾へ五里の萩原へ來た堯慶であつた、固い信念の下に、堯慶は怠惰を戒めて勤勞増産、農民道の覺醒を説いて村民を激勵して

歩いた、和尚の説くところは決して空念佛に終らなかつた、田沼父子の失脚後、變つて登場した松平定信の政策と完全に一致し、定信の「幕政改革」より一足お先きに萩原村はこの節の言葉でいふ新體制を實踐してゐる村として地方の模範村になつてゐた、堯慶はかうして村民の信望をあつめ徳を慕はれるやうになつたのである。

和尚はまた義白といつて上州俳壇では鳴らしたものである、句集も何も今は現存してゐないので俳句の方の義白を語ることの出来ないのは惜しいが、たゞ一つ同寺の大門前、足尾街道を走るバスヤトラツクの砂塵を浴びて芭蕉の句碑が立つてゐる。

このあたり眼に見ゆるもの皆涼し
とありその裏に

芭蕉

もの言ひのゆかし瀬端の夕涼み

義白

と義白のたつた一つの句が見られそれと並んで

すゞみ過ぎたと川原上れば月夜哉

似鳩

川風やうしろさまなる夕涼

關更

と刻んである、似鳩は伊勢崎の人で、當時この地方での有名な宗匠、關更は加賀金澤の人、蕪村亡きあとの俳壇を背負つてゐた。(寛政十一年五月歿す年七十三)

寛政八年夏、關更が似鳩を訪ねて上州路に遊び善雄寺の義白のところへ来て三人で詠んだ記念に蕪翁の碑を建てたもので、字は關更が書いた「このあたり」の句は芭蕉が吉野紀行を終つて岐阜、長良川のはより加島某の水樓でものした句で善雄寺がその水樓に似てゐるところから選んだといは

れてゐる鬱蒼たる山を背にして百疊敷の大客殿のあたりから河鹿鳴く渡良瀬の清流を隔て、大畑山を望む繪のやうな風光は遙か長良川の水樓で「このあたり」と感極まつて一句ものした芭蕉の句境に通ずるものがあつたからだらう、三人が三人同じ感慨に耽りながら一夜を語り明かしたに違ひない、その時の有様をこの句碑は手にとるやうに語つてくれる。

文化二年寺を弟子眞純に譲つて隠居したが眞純は間もなく病歿し、宗純が繼いだ、そして八十歳の春、和尚は生きながら墓穴の奥深く入定、薬師如来となつたのである、著書や句集の類など相當あつたらしいが元治元年廿七世智境の代に火事に遭つて寺が全焼した際、殆ど焼いてしまつた、現在の本堂、庫裡などは明治四十二年八月の再建、薬師堂は更にその後現住卅一世眞下興雄師が昭和三年再建した。

月雪も見盡し花も散りぬれば芽でたき浄土へわれは往く春

と臺石に辭世の刻んである地藏尊を安置した薬師堂は厄除薬師として東上州足尾街道一帯に歸依者をあつめてゐる、今でも時折、堂前に黄粉牡丹餅の供へてあるのを見掛ける。

「和尚さんは黄粉牡丹餅が好きだつた、黄粉牡丹餅を供へて願をかけると、どんなことでも叶へて下さる」

と、村人は祖父の代からのいひ傳へを承けついで春風秋雨百三十年、今なほ素朴な心に宿る信仰の深さがかうして香花と共に黄粉牡丹餅を供へさせるのであらう。

東宮佐七の遺訓

赤城山南麓に蘇る

赤城山の南麓が生んだ偉人としては勢多郡宮城村苗ヶ島の勤皇醫で太田町の高山神社建設に與つて力のあつた齋藤多須久翁（天保六年八月生、明治二十六年八月歿、五十九歳）と、滿洲移民の父と仰がれてゐる東宮鐵男大佐（明治二十五年八月十八日生、昭和十二年十一月十四日杭州灣附近の戦場で戦死四十六歳）があつたことは誰知らぬものもない。更にまたもつとお馴染み深いところでは俠客大前田英五郎（寛政五年生明治七年二月歿、八十二歳）のゐたことも宮城村の自慢話になつてゐる。ところがこゝにまた一人、村の人達から「東宮先生」と、その遺徳を慕はれてゐる人に東宮佐七翁がゐた。

佐七翁は天保八年四月二十四日に生れ、大正五年四月七日、八十歳で歿するまで村から一步も出ずに、たゞ黙々として子弟の薫育に生涯を傾け、村の「先生」として終つたのであるが翁の薫陶を受けた人達が、その後村の中堅となつて宮城村の發展に盡瘁し、今はまたその遺訓をわが子達に傳へつゝ、昔に變らぬ敬慕の念を捧げて徳を讃へてゐるのを見ると、山麓に埋もれて遂に世に紹介されるのがなかつた翁の在りし日の一面なりと傳へて、今は年老いたそのころの教へ子達とともに翁の人物を偲びたいのである。

「先生のこととは忘れようとしても忘れられるものではありません」
苗ヶ島の平田豊作老（六）はなつかしさに語つてゐる。

「私は小學校を出てから中學校へは行けなかつたので廿の年まで先生の塾へ通ひました、先生は非常に厳格な方で、私達が居眠りなどしてゐると、お前達の親は晝は晝で野に出て働き、夜は夜で縄などなつてお汝たちのために働いて下さるのだ、それをお前達はこゝへ居眠りにくるとは何んだ、そんなざまなら來なくもいゝ、歸れツと叱られたものです、先生はよく日本外史を講義して下さつた、先生の高潔な人格と日本外史は實にびつたりと私達を感動させたものです、先生の



東宮佐七の墓

◎ 歿後廿五年、今でも先生のお話をすると嚴肅な講義のお姿が眼の前に浮んできます。

佐七翁の家は翁自身が明治維新の頃は名主や組頭、戸長などを勤めたくらゐで舊家だつたのである、父の佐兵衛といふ人

は後に仁壽と號してなか／＼の學問好きだつた。翁はこの父のいひつけで八歳のとき菩提寺にある同村金剛寺の住職寛朝といふ坊さんのもとへ弟子入りさせられたが、どういふものか坊さんにはならなかつた、漢籍は伊勢崎藩の小峰信敬といふ人について學んだといはれる、維新後金剛寺で寺子屋など開いて村の子供達を教へてゐたこともあるが、小學校が出来てからは學校へ奉職して十六年間教壇生活を送り、明治三十二年に辭職して自宅前の隠居所で私塾を開き、晩年は義佐或は好問な

どと號し歌道を奨励し、歌道會など組織して餘生を送つた、これが翁の略傳である。たゞこれだけを聴くと何んの變哲もない凡々とした生涯のやうであるが、この凡々たるなかに村の人達を惹きつけ、今になほ尊敬をあつめてゐるところを見ると凡にして凡ならざるところがあつたに違ひない。翁の孫で大前田英五郎五代目の養子となつた前村長田島莊次郎氏^(五)は祖父を追想して次のやうに語つてゐる。

「私はこんな五尺あるかないかの男ですが祖父は五尺五寸もあつて骨格もよかつた、歌の朗詠など聞いてゐると、いゝ聲ではなかつたが力のこもつた聲でした。まことに嚴格な人で、姿勢のことなど殊にやかましく、熟では勿論のこと日常私達に對しても口喧ましく叱りつけたそしておよそ文字の書いてあるものは屑紙一枚でも粗末にさせなかつた、かうお話すると大變やかまし屋の頑固爺のやうに思ふでせうが嚴格ならちにも優しみがあつて私達にはいゝ祖父でした。」

また、平田豊作老の話によると、翁がまだ小學校の教員をしてゐた頃のこと、あまり薄給に耐へられなくて、全校職員が總辭職したことがあつた、このとき翁はたゞ一人學校に踏み止まり

「教育は金銭の多寡によつて左右されるべきではない、教育はもつと崇高な精神によつてなされなければならぬ」と最後まで教壇を守つて總辭職組に反省をもとめ、學校教育の危機を喰ひとめたといふ逸話もある、翁の氣骨溢れた半面を知る一挿話である。

それともう一つ明治二年の「ぶちこはし騒動」のときだ、維新のどさくさに暴漢が縣民を煽動して「ぶちこはせ、ぶちこはせ」と各地の豪商豪農を襲撃したとき、宮域村もこの暴徒に襲はれたが當時名主だつた佐七翁の臨機應變の處置で暴動も未然に防がれたと傳へられてゐるが、このことについてはどんな方法で暴徒を鎮壓したのか、具體的な事蹟が残つてゐない、たゞ暴動事件に力をつ

くしたといふ程度のことしか知られてゐない。

翁の逝きし後翁の徳を慕ふ門人達で「東宮佐七翁碑」が大正六年三月金剛寺西裏の齋藏多須久翁頌徳碑の前方五百米ほどのところへ建てられた、碑は文學博士遠藤隆吉氏の篆額で醫學博士齋藤玉男氏の撰になる、齋藤博士は多須久翁の孫で、少年時代に佐七翁の教へを受けた。

(齋藤博士は現在東京南品川ジエームス坂病院長である)

翁の墓は金剛寺東方の東宮家墓地にある自然石に「東宮義佐翁之墓」とあり裏面に

亡きからはもの土とぞなりぬべし天のみそらに魂はゆけども
なでしこの花をふもとに眺めつゝのぼるもうれし死出の山みち

と辭世の二首が刻んである、この墓地の一隅には東宮鐵男大佐の英靈も眠つてゐる(大佐の家は東宮一族の總本家になつてゐる)

佐七翁の子、伴一郎氏は昭和十年七十七歳で歿し、その長子端一郎氏は昭和十二年五十七歳で歿した。現在はその長子滿壽次君^(二七)が家を継ぎ祖母のひろさん^(八三)母むめさん^(六〇)弟秋男君^(三〇)大倉高商在學^{II}妹はるよさん^(三二)と農業を經營してゐる、佐七翁の私塾だつた隠居所は滿壽次さんの家の南門を入つた直ぐ右手に、藁葺きがトタン屋根にかはつたゞけで、昔のまゝに残つてをり今はたゞ物置同様に使はれてゐる。

劍士 根井彌七郎

赤城山麓の法神流道場

坂東大橋から赤城の尾根をだらだら登りに約半里の勢多郡北橋村箱田に傳る一世の快男兒根井彌七郎行雄は、栗津の原で討死した木曾義仲の遺骨を背負ひ遺臣七騎と共にこゝへ落ちのび現在の縣社木曾神社に主君の骨を埋めて土着したといふ木曾四天王の一人、根井行親の熱血を承け繼ぐ五郎左衛門の長子として文化八年呱呱の聲を擧げたが主人公彌七郎、大利根の川ッ風と赤城風を鍛へられて沈勇剛直、幕末の劍豪梅本法神の編出した法神流の劍法は免許皆傳の腕前、しかも醫者を開業させても相當にやつて行けるほどの心得もあり、その上に和歌、俳諧等文學の造詣も深いといふ點、文武兩道に通じた近郷切つての當時のいはゆる知識人であつた。狭い農家を改造して橋陰舎を創立、劍法の指南と和漢の學問、殊に俳諧の教授をはじめたが、門弟は遠く富士見芳賀、敷島等から雲集、二部三部教授をする盛況で、群馬の生んだ劍聖持田盛二範士も鼻垂れ小僧時代はこの門に通ひ、親しく薰陶を受けたさうな。

嘉永七年攘夷の聲を聞くや、持前の熱血を沸かせて矢も楯もたまらず、門弟を引連れて出府、祖先の主筋に當たる幕臣木曾義寛を援けてこれが黒頭巾の役を果たし、鎧通し一口を賞賜され、更に慶應三年領主松平侯(前橋藩主)より郷兵頭の辭命を頂き田舎の新撰組隊長として物情騒然たる郷土

警護の大任に當つた、明治元年各地に勃發した暴動の際などは焼討襲撃などに熱中した農民たち、領主の命令など馬耳東風と小馬鹿にしたものだが、彌七郎一度立てば「そらお頭が出張つた!」と蜘蛛の子のやうに散つてしまつた、しかし一面彌七郎は機會ある毎に郷民に肇國以來の惟神の大道を説き聽かせ、明治二年自ら神葬を採用して佛葬と拮抗、同四年七月廢藩置縣後、選ばれて勢多第三大區長(後の郡長と同地位)となるや、かねてから經文も稱へず、説教も知らず、五戒、十戒もあらばこそ、飲む、打つ、買ふ、腐敗墮落の見本みたいな村内寺僧の亂行を痛く憤つて

「こんな生臭き共に人生最後の大事を委任出来るかッ」

と法城の大改革を企て箱田の銀龍山、愛宕山の十輪寺をはじめお寺さん數ヶ寺を取潰し、住職を村外に追つ拂つてしまつた。

彌七郎の鼓吹したのはいはゆる修正派神道で、随分思ひ切つたことをやつたものだが、これこそ彼の直情徑行的性格と信念の強さを物語るもの、それからといふものは村民の間に敬神崇祖の念が昂まり、諸々の行事は悉く神社中心に行はれるやうになり、世態風俗は一變してしまつた、また彌七郎は時代の推移をよく認識、最初から太陽曆を用ひ、眞つ先に斷髮して生活新體制の範を示したり、同村が赤城山腹にあるため水利の便悪く、防火水や灌漑に事缺くのを見兼ね、數條の溝を造つて誘水するなど、村民の爲に圖るところ少くなかつた、その彌七郎も明治十四年、村方一同から惜しまれつゝ死んでいつた。

語りつき、いひつき、こゝに木曾山の、昔を花の、香にこそはしれ

冬木立、空さへ春をまつその朝

これ等の遺句は本曾神社の境内の碑に刻まれ、今に村人から愛誦されてゐる、當主彌太郎氏はその曾孫に當り、陸軍伍長、今度の戦争で全身に手榴弾の破片創を受け、一昨秋白衣で歸還したが間もなく菜つ葉服腰辨の産業戦士として更生、澁川町關東電化會社に通勤、曾祖父の遺功も誇らず黙々と増産報國に邁進してゐる、先代彌氏存命の十五、六年前までは毎日「エイヤツ」と勇ましい掛聲が洩れてゐた橋陰會の道場も、今は納屋と變り、毎月一、六の日の道場開きを記念する講武館稽古日だけが、昔の殷盛を偲ばせてゐるに過ぎない。

船津傳次平小傳

上毛の二宮尊徳

船津傳次平翁は天保三年十月一日をもつて勢多郡富士見村大字原之郷に生れた、幼名は市造長じて傳治平と改む、その先祖は甲州武田の家臣といはれ代々甲斐國都留郡船津村に住んでゐた、從つて船津姓を名乗つたものらしい、天正年間武田氏が滅亡するに及んで前記原之郷に移住、代々相傳へて傳次平に至つたといはれる、翁の父利兵衛は學識があつたので推されて寺子屋の師匠となつたが、讀書、習字を近郷の子弟に教授するのはいつも農業のかたはらであつた、農業の傍らでなければ決して讀書習字を授けなかつたといふところにかにも船津家らしい家憲があつた、この農業本位、實業本位の家風に人となつたればこそ後世老農を以て稱せられた傳次平翁が出来上つたのである、父利兵衛は各方面に興味を有し殊に俳諧を好み自ら白庵と號し俳名を午麥と稱したくらゐなの

で翁も幼少の頃からこの父に教へられ自得するところあつたが、後になると隣村小出村の俳諧の大家蓼園無滿翁に師事し、ますく技を磨いたので晩年の句は素人の域を遙かに脱してゐた。

翁は幼少のときから植物の播種、蔬菜の栽培などを無上の樂みとし土壤の性質、肥料の配合種子の選擇播種の方法に至るまで必ず深く考察實驗し「廿歳の頃工夫研究の結果、里芋や甘藷などの作り方及び簡易貯藏法を發見したくらゐの熱心さであつた、また或る時赤城山に草刈りに出た際、茅の一株が著しく成長してゐるのを發見した、こゝが常人なら何気なく見逃すところだが、流石に翁だけのことはあつて驚異の眼を瞠り、何故この一株だけが生長してゐるかを丹念に調査したらなんと其の茅の株の傍にだけ大きな石があることに氣がついた件の石に觸れてみると太陽の熱をうけて相當に熱くなつてゐた、翁は小膝を叩いて「なるほどな」と微笑した、熱を保つたこの石のためにこの一株だけが著しく成長したのだなと知るや翁は早速これを實驗して、逸早く温床に利用したといふことである翁は万事この式であつた。

翁の徳望漸く高まり二十七歳にして名主に選ばれた、安政五年正月である、翁は豫てこの地方の田畑數百町歩が時々旱魃の害を受けるのを大いに憂へてゐたが、名主となつたので爰に年來の主張を實現せんと村役人に相談して赤城山南麓の廣漠たる原野に水源涵養の植林のため自ら率先して松を植ゑ到頭南麓四百餘町歩の秣場に松林をつくり上げてしまつた、現在赤城山の南麓一帯、見渡す限りの芳賀富士見北橋横野の村々を蔽ふ殆ど原始林と見紛ふばかりの赤松の鬱蒼たる官林はみな翁の見識の賜である。

この頃の翁について面白い話が残つてゐる、翁が單なる篤農人でないことが判明してくるに連れてその評判はいつの間にか前橋藩主松平直克侯の耳にも入り明治元年十月藩侯は翁の行政的手腕を認めて原之郷ほか三十五ヶ村の大惣代に任命、二人扶持を給せられることとなつた時である。

「俗事に忙殺されて了つたのではすきな研究も出来ない」と

菩提寺で剃髪して翌日自ら役所に出頭

「船洋傳次平なるものは急病にて昨日死去依つてお届け申す」

と知らぬ顔の半兵衛を決めようとしたが忽ちばれて強いお叱りを蒙つたことがある、それ以來常に鬘を被つて公職につき、公事を行ふ時は用意の鬘を忙しく被る恰好がまことに可笑しかつたと口碑に残つてゐる。

翁は世人を警醒するには面白く、しかも簡単に呑みこめる方法でなければいけないと蠶の飼育方法をはじめとし稲作、甘藷、里芋等の栽培方法から勸善懲惡の説教までを俗耳に入り易い卑近なチヨボクレ節に作りお祭りの夜または集會の席などで節面白く調子をとつて朗讀したので、その結果、文盲の農民も漸くそれを覚え蠶業などは著しく改良されたし風俗も一般に厚きに移つたのであつた、結果良好なりと見てとつた翁はこれを一層徹底させるため自作のチヨボクレ節を自費で印刷して各戸に配布その数は一万にも達した、このチヨボクレの文句の一例を示せば次の通り

「桑の葉費し器械を損じ工手間を潰して國損壞せし科シヤと思つて天地の御神に罰金差し上げ詫びるがよからう、詫びると申して外では御座らぬ、道橋普請や學校資本や社堂の寄附なり澤山納めよ」

翁が普通の篤農家でなく文筆人としても相當な者であつたことが判る。

明治五年政府が太陰曆を廢して太陽曆を頒布すると今迄太陰曆になれてゐたお百姓は忽ちにひどく難澁して耕作その他どうしたらいいか全く途方に暮れて了つた、その時翁は有名な「太陽曆耕作一覽」をつくり農作物と季節との關係を明かにし百姓の便を圖つた、當時の熊谷縣勸業掛は明治六年十二月「童蒙婦女改曆上に馴れざる者のため」これを上木して管内に頒ち配布した、地方官は非常に翁を徳とし、農具三品を交附した。

かやうに翁の實驗を基礎とした耕作一覽は知識のない農民にどのくらゐ役立つたことか、遂にそ

のことは當時飛ぶ鳥も落とすといはれた内務卿大久保利通の知るところとなり大久保は辭を低うして翁を招聘、駒場農學校（農大の前身）創立當時の「日本式農業」の教授とした、明治十年十二月翁四十六歳、まさに男盛りであつた。

そも／＼傳次平翁が大久保の拔擢を受けるに至つたについては次のやうな経緯がある、觀察眼の鋭いことやはり明治の元勳といはれるだけのことがあるわいとうなづかれるのである、その話はおうだ、松平藩が前橋市岩神町に日本最初の機械製絲の工場を設置したとき、大久保卿が「それは珍しい」とわざ／＼東京から視察に來た、その際前橋地方の農作物が他地方に比べて非常に立派に發育してゐるのに氣がついた大久保は

「此地必ず農事丹念の偉人あらん」

と後年富岡製絲場長になつたわが國製絲業界の恩人速水堅曹に訊ねて見ると果して翁の影響であることが分明した。

明治八年三月のことである、大久保内務卿は全國府縣に命令して各管内における農業熟達かつ老實なる農業家を精選の上「樹藝、養蠶、本草三科のうちで特秀の者一兩名を選抜推薦」せしめたところが、當時の群馬縣令楫取素彦は元來翁と親交あり、信賴頗る厚かつたので直ちに翁を推薦した、群馬縣の船津傳次平とは！大久保卿の記憶に浮んできたのは以前富岡製絲場長の速水堅曹からも聞いたことのある船津傳次平翁のことであつた、かくて大久保の翁に對する關心は決定的となり、すなはち前記速水の設立經營にかゝる勢多郡關根村の製糸場の視察に託し勸業頭松方正義を隨へて再度前橋に來り、關根製糸所で翁と會見した、目のあたり翁を見るに及びすつかり翁に惚れこんだ大久保は翁の出仕方を速水に謀つた、速水曰く

「かれは仕官などを望んでゐません、月俸三百兩もお出しになるならあるひは出る氣になるかも知れませんが」

これには剛腹な大久保も驚いて

「當今三百兩にも値するやうな人物があるのか、假りにあつたとしても、即今政府は三百兩の如き高給は出すことが出来ない」

と飽くまで三百兩に捉はれての長嘆息に速水氏再び曰く

「いや三百兩はお出しにならなくとも、その價值あるものとして鄭重に御用ひあれば、義に厚き彼のことと御座いますれば、何ほど不平を申立つることはござりますまい」

と、かくて大久保の知遇に感激した翁は意を決して上京、先づ駒場野（現在の第一高等學校）の開墾に従事することになつた。

「内務省御用係申付、月俸金參拾圓給與候事、但取扱准判任候事、勸農屬事務取扱申付候事」

上京した時翁がもつた辭令である、月俸三百兩は蓋を明けて見ればたつた卅圓であつた。

駒場農學校に着くと翁は構内五十三町のうち、六町五反歩を拓いて農場を作る計畫を樹て、自分もこの原つばに小屋を立て、寢起きし晝間は絆纏股引姿に鋏を持つて開墾に従事しかたはら人夫を督勵したものであつた一日内務卿の大久保が開墾の實況を視察に来て見ると肝心の翁が見えない、用達しにでも出掛けたかなと思つてそばの者に訊ねようとすると、人夫が一人手拭で顔の汗を拭きながら大久保の前に現れた、何んとそれが翁でないか、大久保は半ば詰問的に

「そんなに日中働いたら事務上の調査はいつやるのか、人の頭に立つ者は土掘り作業など人夫にまかせておけばよいではないか」

といふと

「調査上の事は一切夜業と定めてゐるから聊かも差支ふところはありません、たゞ人の頭云々につきましては言葉を送すやうで失禮ですが、一寸申上げます何事も成ると成らぬは頭に立つ者が率先して躬行するか否かに懸つてゐると愚考します、口先の命令だけで人といふものは動くものではありません」

大久保は翁の精力の絶倫なるに驚くと共に人の使ひ方の奥儀に觸れて今更の如く翁を見直したのであつた。大久保は更に語を繼いで「小屋の中で獨坐し、夜業するのはさぞ寂しからう」と慰め顔にいふと、翁は莞爾として「駒場野や、拓きのこりにくつわ蟲、案外の詩境で御座りましたな、絶えず天來の妙音を聞くことが出来ませう」と答へた相な、武蔵野の一角開墾される荒蕪地を背景にして篤農家と内務卿の間に交される風流談義はまことに濛い圖柄ではないか。

農學校在職八年の後、農商務省農務局勤務となり、樹藝課を本務として蠶桑課を兼務した、樹藝課といふのは現在の農務課みたいなものであつた、以來翁は全國各府縣に出張し、農業講話を行つたが、明治二十三年十一月賞勳局は翁の多年の功勞を賞し勅定の藍綬褒章を賜ひ、これを表彰した、翁官に在ること二十年、その間東奔西走、席温まるに暇なく、各府縣に出張して農事の改良を指導し、明治二十四年三月には全國中足跡を印せざるはたゞ沖繩の一縣あるのみとなつた、そこで知人集まり、翁のため盛宴を張り三組の銀杯を翁に贈つて大いに祝つた、銀杯内部には「賀船津君日本周遊」裏には「農商務省及農科大學員辱知二十六名」と刻んだ。

頑健の見本みたいな翁だつたが明治三十一年春、三月健康漸く勝れず到底激職に堪へられなくなつたので官を辭し故山に歸臥することとなつた、久しぶりでしかも浪人のさばくした氣持で對する故郷は笑つて翁を迎へてくれた、翁も「一ツ養老の居として新居を作らうか」と頗る滿悅の體だつたが、その六月十五日病勢遽かに悪化、その新室に永眠した、享年六十七天津院義巖行善清士と謚し、原之郷の先塋の側に葬つた、翁の愛弟子で唯一人の生存者富士見村原之郷の桑島定助氏（七五）は語る。

「實に研究心の強い人でした、數學の堪能者だつたことは有名でした、私は東京でよく翁から寝物語りに學問や處世のとなどいろ／＼と聞かされたものでしたが先日新宿の中村屋の相馬君等が寄りまして私のために會を開いてくれました折にも翁の話が出て、相馬君などはよく研究してみたら二宮尊徳先生にも勝つてゐることでせうと翁を賞讃してゐましたが實際さうでせうな、極めて影響力の強い方で今でもこの村で翁の教へを守つて實行してゐることは境界の枝を五年目毎に伐つてゐることもわかります、また春になると瀾漫と咲きほこるこの村の墓地の吉野櫻は皆翁が植ゑたものです、翁の思想は未だ誰も深く研究してゐないやうですが、水戸學から來てゐるものと思ひます、前橋藩が水戸と關係があつたためせう、東京へ出て、西洋式の農業を輸入した井上馨侯に對立して、わが國古來の農業法を主張したことは有名な話です、つまり、日本の農家經營の標準としては一家族の勞力に馬或は牛一頭、使傭人二人以内を越してはなりません、わが國の如き島國にして耕地の高低常ならず、その上氣象の變化激しい土地から多收を獲るには大農は到底小農法に及びませんと強く突ツ張つたあたりは全く上州人の面目躍如といふところでせう。」

産組運動の父清水及衛

滿洲分村に率先垂範

「木瀬村の清水さんが逝くなつた」といふ訃報は全縣下の農村にとつてはまるで光を奪はれたやうなものであつたばかりか、全国各地の農山村にも大きな衝動を與へたのである、昭和十六年の十月二十六日午後四時半であつた、勢多郡木瀬村字野中が生んだ農村經營の「父」産業組合運動の偉大な功勞者清水及衛老は狭心症で倒れ、六十八歳を一期にその生涯を閉じた。

〔父の遺産は子供と産業組合と分村（滿洲吉林省磐石縣驛馬）でした〕

と及衛老の長男圭太郎氏（四八）はいつてゐるが、全く老の家庭はいねさん（六七）との間に七男三女があつて昨年の第一回優良多子家庭表彰に厚生大臣から表彰されたほどの賑やかな子寶家庭であり、老の生涯は産業組合を發展向上させることによつて農家個々の經營を安定し、年々狭少になつて來た耕地問題の解決には大陸へ分村の建設を計畫して率先垂範するなど農村指導に渾身の努力を傾け、皇國農道の確立に血の滲むやうな苦闘を續けて來た六十八年であつた、秋既。



清水及衛

●に晩く、カサカサと落葉を吹き散らす風の音は淋しいが、野中の大泉寺墓地に眠る老の墓前には香花の絶え間なく、いまだに毎日一人二人と遙々遠く訪ねてくる弔問客を迎へてゐる、今更に遺徳のほどが偲ばれるのである。

及衛老は明治七年利作さんの長男に生れたのだが、生れて

六ヶ月で父に死別してしまつた、卅八歳だつた父は腸チブスで死んでしまつたのである、以來母親せいさん（大正十四年七十八歳で病歿）の手一つで育てられてきたのだが、家計はいつも苦しい方であつた、老の家は分家（本家は元同村々長清水忠次郎氏）で父の代までは村でもかなり富裕の方だつたが、この若くして死んだ父の利作さんといふのがどつちかといふと傳法肌の人で博奕はする、酒は二升酒を飲むといふ始末で折角の身代も滅茶苦茶となり及衛老のもの心つく頃にはもうどうにも仕方のないことになつてしまつてゐた、

の貧しいなかで及衛少年は小學校を卒業すると一家の戸主として農業についた、子供のときから頭は非常によかつた。

「小學校はなんでも三年で卒業したといふことでした、成績がよかつたので學年を駈足したわけですよ」と圭太郎氏もいつてゐる。

老が志を立てたのは十六歳の時であつた、この時は前の年に吹き飛ばされた家もあつたくらゐの大暴風雨があつたがこの風害に次いで今度は大火事に遭ひ野中部落は焼野原となり及衛少年の家も類焼してそれこそ無一物の裸にされてしまつた、少年の心にはまことに痛々しい災害であつた。

かうなつてみて初めて私は金のないといふことが非常に氣になつた、初めて貧乏が悲しいものであることを味はつた。

と、生前かういつて當時の心境を語つたものだ、もつともその頃の野中は、及衛少年の家に限らず一般に貧しかつた、つまり百姓は貧しいものだといふ諦觀のなかに光明も希望もなく長塚節の「土」のなかに出てくるお品父娘みたいにたゞもう土まみれの生活を續けてゐたのであつた、ところが及衛少年は貧乏を貧乏として傍觀することが出来なかつた、何故貧乏するかの原因を探究しようと、そこで長い間貧乏に悩んで來てゐる貧乏の先輩たちを訪ねては訊いて廻つた。

「こんなに貧乏してゐて貧乏が嫌にならなにかね」「嫌になるけんどうにも仕方がねえよ」「一體貧乏になるといふのはどうしたわけだんべえ?」「どうしたもかうしたもねえ、そんなことわかるけん」

わからないで貧乏してゐるなんてをかしな話だ、結果があつて原因のない理窟があるだらうか、農民が天災や病氣で働けなくて貧乏したのならいゝ、しかし天災もなく、身體も丈夫で朝から晩まで野良働きしてゐて、しかもまだ貧乏してゐる、こんな譯のわからんことがあるだらうか、それから

は貧乏の原因を質すために會ふ人ごとに聞いて歩いた。

かうして苦心した末に少年の頭に出来上つた貧乏の原因といふのは——當時は丁度西南の役直後のことだ、悪性インフレーション時代が續き、おまけに横濱の生絲貿易が馬鹿景氣を出しはじめた頃で繭の値段が素晴らしくいゝ、これに刺戟されて農村は今までの農業組織を改めて養蠶を擴張しようといふこともかしくも無理算段で大きな蠶室をこしらへ、無闇と人を傭つたりしたものだつた、しかし間もなく(十六、七年の頃)山縣大藏卿によつて財政紊亂が整理されるやそれは忽ち農村にもひびいて借金拂ひのために農村民はそれこれ文字通りの無一物になつてしまつた、要するに何も知らない農民は經濟界の變動に翻弄されてしまつただけのことなのである、制度がした罪な悪戯であつたが、これは村に世の中の變遷に敏感な眼を向けながら指導して行く中心人物のゐなかつたこと、農民自身が農業の組織經營に知識を持つてゐなかつたことが最大の原因だつた。

「よし俺は農業經營の根本から改革してゆくんだ」

と、少年及衛は瞳を輝かし頬を紅潮させながら力いつぱい大氣を吸つた、赤城の山が紅紫色に照り映えたある日の朝であつたと想像して下さい。

「先づわれ／＼は最初に人生觀を持たなくてはならない」及衛老の農業經營はこゝから出發した。

——農業は何のためにするか、生活して行くためである、人類の理想は子孫長久であり、日本民族の理想は彌榮である、この理想を實現しようとする生命は生活によつて保持する。

そこで老は次に天地無盡の寶藏を開いて人間の生活資源を掘り出してゐるのが農業だ、なくてはならない仕事であり、誰にも出来る仕事であり國家全體の富を増すものである。

農業は營利企業ではない

と農業の尊嚴を自覺し更にこれが農村社會構成には――

自分もよく他人もよく、皆んながいゝやうに

といふ自他完成の實現を念願とする相互扶助、共存共榮の組合が必要だと結論した、これこそは老の生涯を一貫してゐた農業經營の理念であり、六十八年に集積した老の「農家聖典」であつた、この思想の基礎はどこにあつたか、農業日誌をつけ始めたこと、青年達で祭禮費用の捻出に共同繩を始めたことが貴重な體驗となつたのである。

十七歳のとき及衛老は農業日誌を考案、克明に記入して一家の收支計算を明かにした、日誌は一年一冊として日表、月表、年表に分け毎日記入するのはその日の勞働に従事した人別表と作業別勞力表でその他は買入れ、賣却、收穫の際に記入して、最後に一ヶ年の收支計算が出るやうになつてゐる、どの仕事に何人があつたか無駄に費す日が何日あつたらうか、一反歩の米にいくら資本と勞力をかけいくらの収入があつたか、その勞力報酬がどのくらゐか、勞働日數と報酬があまりに開きがあり過ぎはしなかつたかなどが一目瞭然となり、經營上の無駄とか缺陷がはつきりと現はれた、これこそ一年の成績表であり翌年に備へる計畫書ともなる、老は日誌を心の鏡として日誌に教へられ、勵まされたのであつた。

農業日誌によつて農家經營改善の根本方針が確立出來たときである、村の祭典に青年達で何か餘興を奉納しようといふことになつたが、この費用の捻出方法にみんな思案投げ首だつた、すると毎日みんなで繩なひをして賣つた金を祭典費にしたらどうか

と提案した者があつた、及衛青年だつた。

それもいゝ方法かもしれねえ、まあやつてンべえ

といふことで及衛の家の天井を繩の集荷場にして、みんなで一生懸命繩をなつたところが、これが意外に成績をあげて忽ちお祭りの費用を稼ぎ出したのである。

これはたしかにいゝ

協同作業の力強さをみんなが自覺した、共同組合への精神的準備がこのとき、こゝに芽生えたのである、これはお祭りだけでなくこれから一つみんな毎月必ず藁繩二十房づゝ繩つて持寄り、賣つた金を貯蓄して見ようではないか、と話が纏まり共同組合ともいふべき繩を共同作業の固い申合せが出来た、明治二十五年一月のことであつた、集まつた青年二十七名「及衛さんを世話方に」と組合長格に推された、十九歳のときであつた。

野中産業組合のそもゝの始まりはこの繩なひの共同作業であつた共同貯金が増加するとその金で肥料や種の共同購入が始まり共同施設で水車が出來、藪も同一場所に集めて共同出荷しようではないかと共同事業はだんぐ大きくどつしり根を張つていつた、明治三十三年産業組合法が制定されたときには野中の組合は全國に率先して設立されてゐる組合の一ツとして注目された、明治四十二年産組中央會から優良組合として表彰され大正四年には更に特別表彰の光榮に浴してゐる、組合の發展は組合員協力の賜ものではあつたが、よき指導者を得てこそはじめて立派に成長したのであつた、そのよき指導者及衛老の組合運動に生涯を捧げて献身した熱意と苦闘があつたからこそその發展なのであつた、大正十三年將來の飛躍に備へて野中組合は解散して現在の保證責任木瀬信用購買

販賣利用組合となり、組合員は全村に及んで一千二百二十六名組合員の定期貯金だけでも百萬圓を突破してゐる大組合となつてしまつた。

木瀬組合専務同村笈井の齋藤順衛氏(三)は亡き及衛老を追慕して語つてゐる。

「組合長(及衛老をかう呼んでゐる)はいつでも村のためにといふところから出發してゐましたかうしたら村はどうなるか、あんな風にしたら村が救はれるだらうとか、何時いかなる場合にも村のためにといふ念願で働いて来た人です、神様のやうな人だつた、組合長には駆引きは出来ない、信じたとなると翌日は自分が放つぽり出される結果にならうとなんであらうとやり逃げた、人を欺してはいけない、正直であれ、これが組合長の常務私達を教へてゐた言葉でした、責任感の強い抱擁力の大きな偉大なる人格者としてまことに一點非の打つところもありませんでした、だからこそ一時傳染病のやうに農村へ蔓延して来た赤の農民組合なども忽ちのうちに解消させることが出来たのですナ」

晩年を飾つた老の偉大な業績は分村計畫であつた、年々過剩なる人口に耕地の均衡を失つて来た農村の現状は、分村移住以外に打開策はない、そこで木瀬村でも滿洲國吉林省磐石縣驛馬へ分村計畫を樹て昭和十五年二月から移住を始めてゐるが現在既に百家族が渡滿してゐる、しかもこの分村指導員として眞つ先きに渡滿したのが老の長男圭太郎氏であつた、次いで老は五男五郎君(三)六男六郎君(三)七男七郎君(三)まで分村へ送つたのである。

「長男を分村に出すなどいふことはちよつと出来ないことですそればかりかまたその弟三人をやつたといふことは組合長が分村計畫に率先範を示さうとしてゐたばかりでなく、いかに分村計畫へ熱情を注いでゐたかわかるのです、これは「感激」などといふ言葉ではいひ盡せないものです、組合長はいつも元村を愛するが故の分村であり、個々の農家を完全にするための分村だといつてゐました、産組が發展する一方に個々の農家が衰へてはいけない組合の發展と一緒に個々の農家も完全にならなければいけない、だから分村は元村の延長であり、組合の延長なので従つて組合でも分村へ力を入れてゐます、木瀬ほど産組が開拓地の援助をしてゐると

ころは外にはありません」

と順衛氏は語り續けた。

産組運動と分村計畫を生涯の仕事とした老は男の子七人によつて更にその遺志を繼がせてゐる、分村へ出した長男圭太郎氏とその弟三人の外、二男の二郎氏(三)は地方農林主事で長野縣廳に勤務してをり、三男三郎氏(三)がたゞ一人村に残つて組合の主任書記をしてをり四男四郎氏(三)は農林技手で箕輪青年道場の教師となつてゐる。

追賞 昭和十六年十二月廿三日附銀杯一個下賜の御沙汰ある。

吾妻川 三代の矜持

飯塚父子の遺業を偲ぶ

眼下に吾妻川の碧濤をのぞみ、仰げば重疊たる岩井堂の奇岩怪石がおほひかゝる山河秀麗の地、これが飯塚團藏父子三代を育くんだ群馬郡小野上村大字村上である。澁川中之條線縣道の省營バス群馬下平停留場からだら／＼坂を北へ四五町ばかり、振興橋を渡つて更に半町、山道端の丘上がその屋敷跡だと言はれるが、いまは没落して跡方もなく、明治二十二年門弟數百名が、師の團藏とその孫村上耕作の遺徳を永く後世に傳へようとこゝに建立した「摩利支尊天」と「村上耕作尊靈神」の

碑がわづかにそれと領かせるだけである。

團藏は寶曆八年五月（百八十三年前）飯塚伊兵衛の長男として生まれたが百姓の小倅ながら幼い時から武道で身をたてようと心に期し、近所の洩垂れ小僧と遊ぶ暇に土岐美濃守の高弟で隣村長尾村北牧の住人飯塚武七信周につき揚心流の柔術を學んだ。梅檀はすく／＼と伸びて忽ち奥義を極め村に歸つて屋敷内の小屋を改造、道場を作り、柔術指南の門標を掲げ弟子をとるまでになつた、後その力技ともに師の信周を凌ぐといはれたほどで門弟は吸はれるやうに縣内は勿論、遠く越後、後津信州、江戸からまで慕ひ寄つてその數何んと一千人を突破したといふ。

團藏の無双の腕前と人格を讃へてその死後醉山といふ畫家が描いた團藏の肖像追題に、

燕嶽鬱截、地靈生人傑、柔術能制剛、胸襟自卓絕、短鎌落飛鳥、一拳貫金鐵、門人慕遺芳、子孫守閭閻、嗚呼楊柳質、當風不肯折

と最高級の形容で謳つてゐるが、誇張を割引してもその神技の程が偲ばれるではないか。

ある時團藏所用あつて越後に赴き渡船に乗つたと、ころ上州の柔術の先生と聞いた力自慢の船頭（たかゞ田舎天狗しめ殺してやれ）といふつもりで「先生私に一つ首を締めさして下さい」と満身の力でしめあげたが「お前の力はそれ切りか？」と泰然自若、更に締めつけようとする船頭の殺氣を感じると、いきなり腕からすり抜けるや目にもとまらぬ早わざで船底目がけてズデンドーさすがの船頭も平伏したといふ逸話がある、文政十三年六月二十八日七十三歳で逝つた。

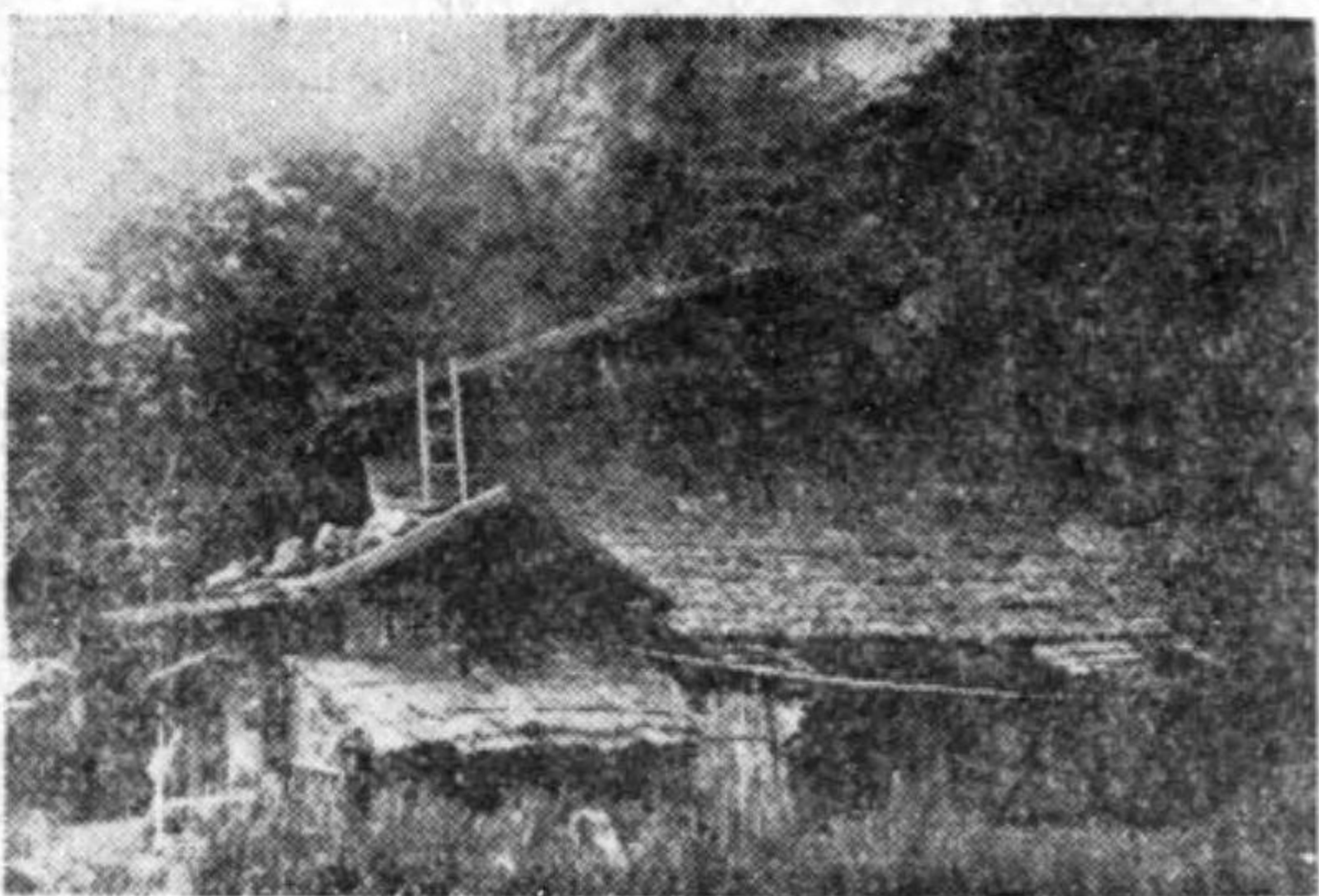
この團藏の門弟中から幾多の人物を輩出、中に居村の飯塚界輔興應といふ人は柔道も達者なら醫術にも通じ、「醫は仁術」で決して私の利益に應用すべきでないといふ、村人をはじめ望む人にはどし

／＼無料で投薬、決して金をとらず、しかも百發百中で效驗あらたか、また教育の必要を説いて子弟に教へ、忠孝仁義の道を講じて生涯を濟世に捧げたといふ。

團藏の子に圓二といふ人があり、父の血を繼いで柔道に熟達、剛毅の半面、學才もあり漢學にも通じてゐたが、惜しくも名をあらはさず夭折した、その子村上耕作（村上と改姓してゐるが、由來詳らかでなく、字名を採つたものと思像される）幼名を柳三といひ文政七年生れ祖父の剛と、貞淑温良彈琴に非凡の妙技を持つてゐた祖母の柔とを享けて父からは漢學を授かり三代目にしてはじめて村上家の人格が完成したわけ。

二十幾歳の折江戸日本橋橋守部の門を叩いて國學を修め、更に赤坂一ツ木町橋本彦八について和歌に精進、一通り知育に。

百町歩にわたる北山共有地（現在の村上施業森林組合）を作つたり荒野を開墾して米、麥、農産物の植栽を企て一步の空閑地も無くしようと努力した。



岩井洞下に在る飯塚(現姓村上)の家

○磨きをかけて歸郷後數百名の村の兒童や青年男女を集めて讀み、書き、算盤、修身、和歌などを教へ、夜業に馬の靴を毎晩五足づゝも作つたといふ。

社會的に活躍したのはむしろ中年の四十臺からで名主、村總代、組頭等勤め、當時村人の野火を放つて山の雜草木を焼く習慣を戒め、植林を奨勵して治山治水をはかり六

維新後も引續いて公職に携はり、先祖が生産部面と縁遠い生活をしてゐたためすでに家産が傾きかけてゐたので、ふりかへつて自家の復興に主力を注ぎ養蠶や農事の改良試作、畜産と百姓にも精を出す傍ら勤儉貯蓄を強行して忽ち家を盛り返し、また三轉して公事に力を振り向けた。

大字村上に在る現在の角田彌吉氏宅附近へ製糸工場を設け、村の勞力を使つて村民の増收を圖る一方、榛原生産會社、購買組合を建て、榛名湖に親を養殖して金融や共同利益の途を講ずるなど八面六臂の活躍をつげた。現在の箱島郵便局はかれの盡力によつて設置され、その外道路の開鑿、橋梁の架設、神社佛閣の保存等々の社會的施設に拂つたかれの犠牲と努力は並々ならぬものであつた。

明治二十二年四月十四日胃癌の床に六十六歳で倒れるまで絶倫の精力で生涯を闘ひ抜いた。

この村上も團藏から四代目即ち耕作の子章三郎の代に離散、内藏之助を経て六代目の當主柳三氏(三)は郷里を後にいま埼玉縣羽生町の東電變電所に勤め家郷には岩井堂下の縣道端に農業を営む先代内藏之助の姉まつさん(六)が夫義三郎氏(七)とともに唯一人の血族として残るだけで、入婿後たつた一週間で耕作と別れてしまつた義三郎氏は老いの眼をしばたゝきながら語る。

「私が四月六日に入婿する、耕作さんはその十四日に逝つてしまふ、胃癌でずつと寝たまゝとうとう健康な姿を見られずにしまつた。團藏夫妻の肖像や耕作の遺墨、和歌等もあるんですが村には何一つ残つてゐません、御覽の通りの微力な水呑百姓で血族も諸所に散りくゞで祖先に面目ないのですが、何代か後には村上家を昔以上に再興させたいと思つてゐます」

俠客 觀音丹次

芝居や講談以外の實説

ある朝のことです榛名山腹の古利水澤觀音にほど近い「觀音丹次之墓」なる立札の前に立つて「これ、昔の大泥棒ぢやなかつたかしら？」

と囁き合つてゐるハイカーらしい三人連れの女學生がりました。俠客なんて思慮も教養もない市井無頼の徒ぢやないかといつてしまへばそれまでですが、義父の仇敵を追つて生涯を孝道と正義に生き抜いた宿命の男伊達觀音丹次を、たゞの無宿者か泥棒扱ひするのは丹次があまりに氣の毒だとかう思ひ、せめて上州人にだけでもかうした認識を是正して頂かうと筆を起したのが本稿であります。

先づ丹次を語るには水澤觀音から知つて頂かねばなりません。

頼みくる心も清き水澤のふかき願をうるぞ嬉しき

東武伊香保電車の水澤停留場から南へ二十町餘、伊香保町字水澤の水澤山麓、幽邃閑寂なハイキングコース水澤觀音で通つてゐるので寺の名はそれほど知られてをりませんが、嚴密に申上げると坂東三十三番札所の第十六番天台宗五徳山、水澤寺といふのでいはゞまあ寺に同居して觀音様が主人を押しつけて權勢を張つてしまつたといふ恰好であります。こゝでちよつと寺の縁起に觸れさせ

て頂きます、今を遡る千三百年、上野の國司、高光中將が勅宣によつて建立したものを、開山は高麗の僧忠灌で、彼地から傳來の千手觀音を本尊とするとあります。

徳川時代の水澤は幕府の御朱印地でありまして水澤一山卅餘房(寺)を數へ民家も附近に櫛比して宛然上州の高野山の觀があり、眞に上野第一の靈場であつたと傳へられてをります。國定忠治は弘化から嘉永頃の人でしたから丹次はそれより七十餘年も先に生れてをります、以下は同寺中興から第十九世に當る現住職山本徳晃師と前任職が丹次の身分を明かにしようと二代がかりで調べたが、資料や文献が皆無のため村人がいひつぎ語り傳へたいはゆる口碑を纏めたもので、前任職により芝居の脚本にもなりましたが、どうしても傳説の域を脱しない非現實的な個所も多々あるので、そんなところは成るべく除外することにしました。

安永三年九月十七日(百五十八年前)水澤寺境内に捨てられてあつた生後間もない嬰兒を村の名主高橋丹左衛門が拾ひました、勿論これが丹次であります、實父は會津の藩士番場覺右衛門、母は同家に働いてゐた女中のさと、不義はお家の法度であります、厳格な親の勘氣に觸れたことはいふまでもありません、若夫婦は流れながれて現在の群馬郡明治村附近に落着き、村人の勧めでふこの師匠をはじめましたが、母なる人は産後の肥立が悪く二日目に亡くなりました。夫の覺右衛門は乳呑兒を抱へて懊惱の果てに捨てたのを、たま／＼夫婦の間に子がなく觀音様へ子寶を祈願中の丹左衛門夫妻に拾はれたとかういふわけであります。捨子は義父の名をとつて丹次郎と名付けられました。丹次郎十一歳の時養母が病死したので女中のりんといふのがその後へ直りました。ところがこのりんには土地の無頼で金助と呼ばれるかくし男がいました、この兩名が財産横領を企てるために邪魔者の丹次郎を或る夜金助が手拭で絞め、水澤寺の境内にある池に投げ込みました。よく通りかゝりの村人に救はれます、この池は現に水澤寺の庫裡脇にあつて

「昔は相當大きい池だつたらしいが、埋立てたり、崩れたりして形も變り現在は小さくなつてゐる、寺ではこれを「丹次千手の池」と呼んでゐます」

と山本住職の説明であります。

丹次郎にこのたくらみを知られた金助はいつそ親父を……とひどい奴があるもので、それから數日後金島村祖母島の弟喜左衛門方へ泊りがけで出かけて行つた丹右衛門の歸りを、伊香保の間にある庚申堂附近で待ち伏せをかけ、たうとう丹左衛門を殺してしまひます。その後丹次郎も二度ばかり彼の魔手に遭はうとしますが幸ひ郡奉行へ訴へ出て助かります、金助、りんは身邊に危険を感じたので在金全部を浚つて何方とも知れず逐電しました、高橋の家は伯父喜右衛門が後見して一時丹次郎が相續と決つたが丹次郎は少年ながらも養父の横死を思ふと無念やる方なく、まだ十二、三の身空で仇敵をたづねて家を出奔する、といふのが「觀音丹次仇討」の發端でありまして離郷後の丹次郎が「俠容觀音丹次」として男を賣り出し、後世講釋師にも材料を提供してゐるわけであります。

觀音の丹次が男を賣出した舞臺は主として高崎であります。

藩主松平右京大夫のころ城下に吾妻屋といふ有名な古い鰻屋がありました(同市で百年前から鰻屋をしてゐる宮元町銀直本店主人高橋直吉氏の談では、同店先代のころまで今の嘉多町交番と會議所裏四ツ角との中間に吾妻屋があつたと申します)仇敵を求めて江戸に上る途中高崎に入つてきた丹次郎は、丁度この吾妻屋の前を通りかゝると空腹に堪まりかねて懐中無一物なのを承知でツイと暖簾をくゞりました。「鰻飯を一杯御馳走して呉んな」と二杯平げましたが勘定を催促されると「最初から御馳走しろと斷つたはづだ」とあべこべに劍突を喰はせたさうですが眞に梅檀は二葉より香しい?心臓ではありませんか、吾妻屋主人重兵衛はなか／＼俠氣のある人物で事情を聴くと丹次の心根に痛く感心「今時の小僧さんには珍らしい、これを持つて行きな」と却つて路銀三百文をくれたと傳へられてをります。

その頃近郷に鳴り響いた貸元で荒波の清六といふ顔役が高崎にをりました。(一説によると清六は徳島の浪人あがりで神陰流に達してゐたと申しますが、群馬郡長野村に西新波、南新波といふ字があり、この邊の出ではないかと申す郷土史家もをります。)この人が丹次郎の健氣な心掛けを聞いて、自分の息分として八年間武術を教へ、男に仕上げたといふことです。この邊で異名となつた観音丹次の説明をして置きませう、丹次郎は拾はれたのも、ゆく末仇討に助太刀として仰くのも水澤の観音様のお力だと一途に信じ、貰入れの金具にも後年水澤で老後を送るやうになつてから使用したといふ茶釜にも水澤観音の景を刻んでゐたほどの信心でしたので誰いふともなく観音の丹次が通り名になつたのです。

講談によりますと高崎本町に白銀屋藤七といふ豪商があつて、伴の嫁に懸想するやぐざと店の番頭が通謀、一家を襲殺するがこの騒動に、義によつて飛込んだ丹次の落した貰入れを證據に罪を丹次にかぶせ、番頭から賄賂を貰つた町奉行柏木半左衛門が丹次を處刑しようとする、そこへ折よく上方へ行つてゐた親分清六が歸り兒分を連れて刑場を襲撃、丹次を助けた上町奉行を高手小手に縛りあげ城内へ名乗つて出ます、家老奥田將監は

「開闢以來博徒に奉行が召捕られたのははじめてだ」と驚きますが結局冤罪とわかつて奉行は役儀召上げの上切腹、番頭は磔、共犯のやくざは打首になるといふことになつてをります、何しろ百五十年前のことだしその後再度の大火で現在は本町に當時を知る資料は全く遺つてゐませんから白銀屋の存否すらわかりません、従つてこんな筋書であつたかどうか眞偽を確める術も御座いません。

兎に角、丹次がこの邊で荒波の若親分としてめき／＼賣出してきたことはほんたうです、武州幸手宿、幸手の三次といふ丹次には全然未知の男達の女房に頼まれると持つて生れた任侠から、三次が悪目明しを斬り、信州上田から江戸送りになるのを高崎市新町駿河屋で軍鶴籠破りまでやつて助け

出し、そのまゝ江戸へ入つて厳しい詮議の目をくゞりながら仇敵金助を探すのですが、求める敵には會へませんで同じく親の仇を追つて返り討ちになつた武士の仇討ちをしてやつて江戸でもその俠名を謳はれたりします(丹次は江戸の生れで淺草観音に因み観音の異名をとつたとも傳へられてゐるが、これはどうも信じられません)それから足を奥州に轉じ、宇都宮から白河に入りますと、こゝで偶然會津本町で入稼業をしてゐる信州屋金兵衛といふのがどうやらたづねる金助らしいと聞き込み、勇躍會津へ乗込み、國を出てから十三年目二十四歳でつひに本懐を達します。この時會津藩の一家老として羽振りを利かせてゐたのが實父覺右衛門で藩主松平肥後守容敬はいたく丹次の孝心を賞美し、その計らひによりまして丹次の替玉を處刑、丹次はお構ひなしとなりましたから無事水澤に歸郷、堅氣になり、老後を全うしたといふことに講談や芝居ではなつてゐるのですが、それでは話がうま過ぎます。

水澤寺にある丹次の墓には「覺峰淨頓信士」の戒名に「元治(文字不明)戊午年十月十四日、生國武州岩付」とあり、生國にちよいと矛盾はありますが、元治は一年しかないのですから、この年に死んだとすれば享年は九十となります。また傍らの立札にも

「観音丹次の墓、孝子観音丹次は目出度敵討を爲し、晩年當地で過し、歿後その徳を慕ひ地藏尊に祀りたるなり」

と説明してあつて、晩年を送つたといふ丹次の屋敷跡も水澤寺山門通りの桑畑に石の祠が目印となつてをり、實父との對面、替玉云々の経緯は信じられないとしても丹次が、こゝで大往生を遂げたといふのは事實ではないでせうか?水澤寺住職山本徳晃師の話。

「寺に縁りもあり、村の誇りとも思ひ、随分調べたのですが講談を幾分訂正出来た程度です、上州の俠客も數あつて腕も強く俠氣もあります、惜しいかなみな心の鍊成が足りません、證據が無くいきゝか我田引水になつて恐縮ですが、その意味から丹次は終始觀音様を信じ、腹で武を練り生涯を信するまゝに正しく生き抜いたところが偉いと思ひます。軍鶏籠などを破つたりして國の掟に觸れるやうな事をしたのは賞められませんがこれとてこの時代のこの社會の道徳觀だつたのでせうから……丹次愛用の茶釜と傳へられるものが、その屋敷跡と道路を隔てたお向ひの現伊香保町收入役大河原義雄氏宅に所藏されてゐます、先々代の頃他家にあつたものを譲受けたとのことだが、水澤寺の景がそつくり刻まれてなかく見事なものです」

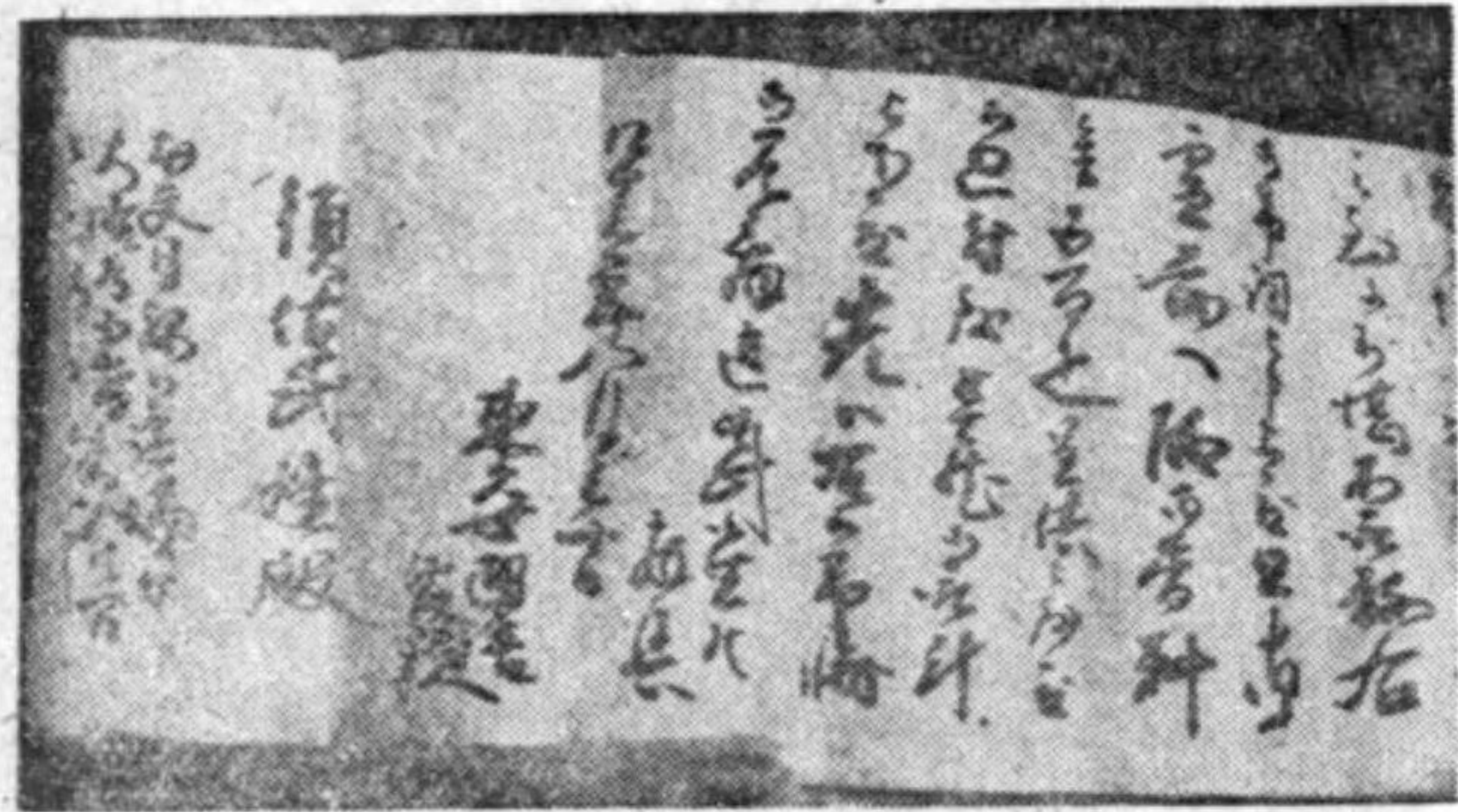
空惠寺の人々

勤皇僧樵堂父子のこと

群馬郡白郷井村上白井の子持山の中腹、杉木立の鬱蒼たるなかに天靈山空惠寺(臨濟宗)といふ寺がある。白井城主長尾氏歴代の菩提寺だつたところである。大同元年(一千百三十六年前)傳教大師が開山した古刹で、最初は天台宗であつたが、その後しばらく廢寺となつてゐたのを、四百五十年後の康元年(鎌倉時代)の春、白井城主となつた長尾四郎左衛門平友景が再建復興し、このとき以來宗旨も臨濟宗に改めて今日に至つた。長尾氏没落後はすつかりさびれ長尾氏累世の墓も徒らに苔むして訪れる人もなく、豪壯華麗を誇つた山門や鐘樓堂の朱塗も剝げ落ちて僅かに昔を偲ぶばかりのものとなつてゐた。ところが明治維新の後、この寺へ須佐樵堂といふ人が住職でやつて來てか

ら、取残された山寺は再び世に出て、上州の古刹空惠寺の名が天下に喧傳されたのである、これから語らうとする「空惠寺の人々」といふのはこの樵堂師親子のことだ。

樵堂は越後湯澤(石打村)の人で、長岡藩士須佐爲右衛門の子に生れ與三郎といつてゐたが、なかく剛毅果敢な少年だつたらしく、八歳のとき誤つて近所の人に斬りつけて傷を負はせた(殺したとも傳へられてゐる。)相手が子供のことであり、たいしたお咎めもなかつたらしいが、父の爲右衛門は謹慎の意を表してわが子を出家させることになり、湯澤の關興寺といふ。



(紙手の伯世久東)む悼を死の堂樵

寺へ入れた。無理々に寺へ入れられた與三郎が素直に坊さんの修業をするわけがない、お経はそつちのけで腕白連中を集めては劍術の稽古ばかりして暴れ廻つてゐたらしいのである、時代は萬延、文久元治と勤皇、佐幕の兩論囂々として慌たゞしいときだ、大義に目醒めた血氣の若者にとつて京都はそのころ憧れの地であつた、到頭與三郎も寺を飛び出してしまつた。
一 京都へ出た與三郎はこゝで勤皇の志士達と談論を交へて討幕を策し、鳥羽伏見の戦ひには征討軍に加つて勇敢な働

き振りを見せた。特に

伊藤俊輔（後の博文）東久世通禧（後の伯爵）などは交遊が深く、東久世伯とは晩年まで浅からぬ縁を結んでゐた。維新の大業が成ると與三郎はまた湯澤の關興寺へ歸つて来たが、感ずるところあつてか今度は眞劍に坊さん修業を始め名も樵堂と改め、明治十年の頃空惠寺住職となつて白郷井へ来たのである、さうして久しく荒廢してゐた寺の修築をなしたり、新たに參道も開鑿したりして寺の面目を一新し、山麓の信仰をあつめ、地方の文教開發にすくなく貢献した。

樵堂の二男で空惠寺現住職道仙師（六）は父の樵堂の追憶を次のやうに語つてゐる。

私は生れると直ぐ越後湯澤の高橋へ養子に行き、兄が死んで間もなくまた父も亡くなりましたので卅四で俄か坊主になり寺を繼いだやうなわけです、殆んど父とは一緒に暮らさないうでしまひましたから、父のことについては餘り知りません、何んでも若い時代父が京都の方で暴れ廻つてゐたといふ話等にしても、聞き傳へだけで記録などありませんから、どの程度のものかわかりませんが、鳥羽、伏見の戦には雜兵として參戰してゐたのではないかと思つてゐます。ただ東久世伯との親交は伯から贈られた書や生前父に宛てたいろ／＼の手紙があるところから推してかなり深いものであつたらしいですネ、話に聞く父は頗る開放な性質のやうでしたが酒は少しも飲みませんでした。頗る小男だつたらしい、或るとき小男だといはれて口惜しがり、小男でもこんな藝當が出来ると米俵一俵を銜へて這ひながら本堂の廻りを一廻りして見せたといふ話など残つてゐます。

波瀾の生涯を送つた樵堂師も明治四十三年六十三歳で病歿した。

樵堂には男三人女二人の子供があつた、長男の貫一は教道といつて父の隠居後空惠寺を繼いだが明治四十年三十歳で早世した、教道は明治三十二年井上圓了氏の哲學館（東洋大學の前身、東京小石川原町にあつた）を優等で卒業、自ら主宰して「護國」といふ哲學雜誌を出して地方青年を教導し大いに將來を囑目されてゐたが、天は才子に壽をかさず三十歳の若さで病歿したことは返す／＼も残念であつた。二男の宜三は現住職の道仙師で、この人は生れて間もなく縁戚の湯澤高橋家の養

子となり、兄の教道が逝き、父の樵堂もまた世を去つたので三十四の中年から僧侶となつて法燈を繼いだのである。

三男の武雄は天齋と號して畫家になつた、天齋は大正年間の日本畫壇で奇才を注目されてゐた一人であつたが、晩年を關西で暮し、四國で歿したので郷土には馴染も薄く殆ど知られてゐない、しかし天齋は十五の年まで空惠寺にゐた。小さいときから繪が好きで樵堂も好きな道に精進したが、いと、十五歳のとき上京させ歴史畫の大家東京淺草の松本楓湖翁の門へ入れたのであつたが、少年天齋の繪を一見した師翁も「天才だ」と吃驚したといふ。

當時のわが美術界は橋本雅邦の双葉會とか、美術協會、眞美會、研精會、日本畫會、日本美術院等があり楓湖門中にも選畫會といふのがあつて何れも競ひ立ち、若い畫家の血を沸かせてゐた、さうしたなかに天齋は東京府主催の博覽會に「張良吹笛の圖」を處女作として出品、大正博覽會では「嬪妃の圖」が二等に入り第五回文展では「新承恩澤圖」が絶讃を博し文部省賞上げとなつた、震災後は關西に移り大阪辯護士會長大阪市法律顧問白川友吉氏の知遇を得て悠々酒に親しみ畫興至れば彩筆を揮ひ、興至らねば酒を飲むといふ生活を續けてゐた。

昭和七年、四國善通寺から「弘法大師御一代記」の執筆を依頼されて四國に渡り天齋畢生の大作と深く心に期して取掛つたが、不幸病のため、同年十一月四十六歳を一期とし、大作も未完成のままに世を去つた、酒が命を縮めたといはれてゐる。生前名利をもとめず、表面的に顔を出さなかつたし、殊に關西へ移つてからは全く郷里にも忘れられてしまつた天齋畫伯ではあるが、今空惠寺本堂に残つてゐる「寒山拾得」の一筆畫の大幅を見ると、その技倆の並々でなかつたことが想像される、天齋の墓は四國仲多度郡吉原村字出釋迦寺にある、同村村長福崎祐市氏が施主で建てたもので

ある。

兄道仙師の語る天齋畫伯の一面を聴かう。

「武(天齋のこと)の酒は一體何升飲んだら十分なかわからない三日でも四日でも飲み始めると幾日でも飲んでゐるので、さうして酔ひつづぶれて寝たとなると、三日でも四日でも寝續けに寝てゐた、淺草邊では武の飲ン兵衛は有名なもので巡查などもすつかり顔馴染みでした、私が武と最後に會つて飲み明かしたのは大震災の直後で、それつきりたらう／＼死ぬまで會はなかつた」

樵堂の子のうち女二人の、一人は既に故人となり末ツ子のみよさん(★)は畫家村上鳳湖氏夫人となつてゐる。

(天齋については群馬郡古卷村八木原神保冷平氏の昭和八年四月「新上野」所載「天齋畫伯」によるところ多し)

名里正 小野澤平左衛門

小野池に偲ぶ善政

百年後の今日まで澁川地方民に善政を謳れ、敬慕追憶されてゐる一代の名里正(名主)で、小野澤平左衛門といふ人がある、寛政初年澁川町で生を享けたが、幼時から神童の譽れ高く十幾歳かで江戸に上り、幕府の祐筆だつた屋代弘賢の門に入りその傍ら塙保己一の高弟奈佐隅東について武家古實を學んだ、しかし神童とはいへ、飴ン棒でもしやぶつて駄々をこねてゐたい年頃のことだから、

全國から雲集する優秀な兄弟子たちに伍してゐるのさへ並大抵の難行では無かつたらう、苦節數年それを兎も角も切抜けて一通りの國學を修めて歸郷すると、すぐ私塾を開き近郷青年に國學や草字の教授をはじめた、實際、平左衛門の草書は天稟だつたらしい。

追々徳望を高め、その博識を認められ、二十代で名主となつたが、間もなく岩鼻代官林部善太左衛門に行政的手腕を買はれて、忽ち澁川村はじめ二十八ヶ村取締役(名主總代)の要職に座つてしまつた、當時上毛の風俗は各地に俠客と稱するチンピラ無宿者がはびこり、飲む打つ、買ふ、些細のことだんび。十八ヶ村に發した、それとて頭から抑壓するだけでなく、自ら質素の範を示さねば感化出來ないといふので野良着のやうな綿衣を纏ひ、竹皮草履を履いて毎朝、毎夕部内を巡視し、村人の動向を視



池野小

らを振り廻すといふ怠惰と殺戮で汚され、醇風全く地に墜ちる有様であつた、これをいたく慨嘆した彼は「村人を善に歸らせる者は自分を置いて他にはない」とまづ贅澤を追放するため奢侈禁令を二

察、従ふ者は言葉を盡して褒め逆らふ者にはビシ／＼火の出るやうな意見をして歩いた。

或る日、平左衛門がいつものやうに巡視してゐると一人の少年が禁制の麻裏草履を履いてゐるのに路上でばつたり遭つた、これを見咎めた平左衛門

「この忙しい農繁期に懐手をして街をぶらつくとは何事だ」

と大喝一聲すれば少年は愕然色を失つて平伏、草履を懐ろに藏つて涙ながらにひたすら陳謝するので彼は俄に態度と言葉を柔げ懇々と後日を戒めて歸した、またこんなこともあつた、一日近所に屋根替へをしてゐる者があるので、つか／＼と近寄つた彼は

「屋根替も決して悪いとはいはんが前前の身分で俄にそんな金の出来る筈がない、どこかで博奕でもしたのだらう、包まず白狀して二度とこんな事は致さんと誓へ」

と高壓的に詰問すれば件の男は閻魔大王に睨れた亡者のやうにスラ／＼と自白、その眼前で賭具を燃し屋根替へを中止して懺悔の涙にくれるのであつた、これが二十八ヶ村に普く傳つて僅かの間に奢侈や賭博がこの地方から根絶されてしまつた、すべて彼はこの通り嚴正明敏、しかし情理を盡して處断したので、二度と彼の叱聲を聞かされた村人は無かつたといはれる。

天保年間隣りの金井村(現金島村大字金井)金藏寺の僧が

「村内某所に古墳があつて、その墓石に「康永二年」の字が刻んである、これは正しく新田義季の墓に間違ない」

と宣傳して歩いてゐるのが岩鼻代官林部氏の耳に入り平左衛門にこれが眞否のほどを照會して來た、彼答へて曰く

「新田氏の墓ならば南朝の年號が鏤んであるはずだ、然るに康永は北朝の年號だ、これは恐らく好事家の造り事だせう」

と代官まで半ば信じてゐた流説を一言にして粉碎して了つた、國學者としての彼の一面を物語る逸話として今に語り傳へられてゐる。

この地方は山林が多かつたため百姓、町人が無闇矢鱈に獵銃をブツ放し、鳥獸の繁殖する時期を與へず、また危険極まりないので、かねてその取締の必要を痛感してゐた彼から、幕府にその旨上申したところ、關東取締富田碓之助が江戸から早馬で高崎に馳せつけ、平左衛門を呼出して彼の上申を採りあげるゝの沙汰あり、時を移さず百姓町人の鐵砲濫用禁制、沒收の布令が廻つた。

かくの如く彼の善政によつて一旦邪道に走つた村人が漸く土に還つて農業に本腰を入れるやうになつたが、肝心の水がこの地方には極めて少く灌漑に苦しむこと久しかつたので、平左衛門は貯水池の構築を思ひ立ち、村人を草鞋履きで説き廻り、天保年間今の澁川町入澤地内に舉村一致の勤勞奉仕で直徑二丁餘、周圍十丁餘の大池を掘り干からびてゐた瘦地を忽ち美田とした、平左衛門の徳に感じた村人はこの池を呼んで「小野池」と稱したその後耕地の殖えるに従つて池も擴張してゐるがいまだに早害知らずの救世主として小野池の名を近郷に遺してゐる。

一代の名里正、平左衛門も弘化五年正月元且、維新の朝ぼらけを前に惜しまれつゝ五十八年の生涯を終つた、現在澁川町新町に農業を營む小野澤憲太郎氏(六三)はその四代目、長男伊平氏(四三)は上毛銀行に勤め、三男三郎君は澁川中學五年在學中應召、佐々部隊上等兵として中支の第一線に銃をとることすでに二年半、先祖平左衛門の名譽にかけても一家揃つて獅子奮迅の御奉公である。

經濟學者 吉田芝溪

御用學へ挑戰する

二四四

澁川の生んだ偉人堀口藍園は縣内ばかりでなくすでに日本的人物として有名だが藍園に勝るとも劣らない大きな事蹟を遺してゐる經世濟民の學者吉田芝溪の名はどうしたことかわづかに澁川地方だけにとゞまつてゐるやうである。

芝溪は寶曆二年澁川町元宿の絲繭商吉田甚兵衛の長男に生れた、諱は友直、字は子正、通稱宇助、のち甚兵衛を襲名、芝溪はその號である「芝中の先生」「新田先生」とも呼ばれた、學問好きの芝溪は家業を勵む傍ら書物に親しみ、十四歳の時、兄に劣らない好學の弟、當時たつた八歳の翠屏と一緒に隣村北牧(長尾村)の儒者山崎石燕について儒學を修めた、といつても精々、寺子屋式の讀書算數の程度であつたらしい。

石燕の歿後、専ら獨學をつゞけてすつかり自信を得た芝溪は東部の學者を一呑みに大儒にならうと野望を抱いて上京、井上金峨の經史を聽講したが、何がさて、さすがは大江戸の大先生、生徒の質問に全部暗誦で答へてゐるのに度膽を抜かれ「井の中の蛙」だつたと逃げ歸り「學問は讀書、讀書にはまづ文字を知ることだ」とその後は字彙を讀むこと一千回、殆ど語記してしまつた、天明五年山城の學者平澤旭山が漫遊の途中、澁川に立寄つたのを機會に無理矢理に自宅に逗留して貰つて

教へを受けこの間に經學の哲理を究めたばかりでなく、詩、書道、政治、經濟の方面にまで知識を廣めた。

芝溪は最初父祖の業を繼いだがそのころ度量衡器の取締がきびしくなかつたため、絲繭商が不正な秤を常用してゐるのを嘆き、存命中の父とこの悪習打破に努めたが誰一人耳を藉する者がなかつた、そこで亡父の七回忌にその遺志もあつたので、斷然父祖傳來の絲繭商を投げ出し、煙草、水油商に轉向自分でタバコを刻んで賣りはじめたが、これにも満足せず、當時の農村が疲弊のどん底。屏をはじめ親戚小作人など八軒を誘つて芝中(今の伊香保街道ぞひ澁川町折原)に移住、三轉して純粹の百姓となつた。



墓の生先田吉平子

にあつて、土地は荒れるに任せて、何の收穫も無く、高い租税は納められず、盗刈、野火は頻發する、このまゝでは農家は衰微するばかりだと荒地開墾の必要を痛感し、領主に土地拂下げの陳情書を出して享和元年弟翠

芝溪はこゝで灌漑用水に努力、卅餘町歩の美田を作つて農耕、養蠶の傍ら澤山の子弟を集めて朝飯前や夜間教

二四五

授きては著述もやり、タバコ屋時代からつゞけてゐるやうに毎夜史記を一巻讀破しなければ寝ないといふ不敵の精力をもつて不屈の精進をつゞけた、ある夜一門生が折柄の大雪を肩して勉學にやつて來た、その意氣に感じ爐に根株を焚いて夜もすがら道を説き明かしたといふ美しい師弟愛余話もある。

その當時の著述に荒地開墾の體驗を基とした「開荒須知」「救荒須知」「養蠶須知」やまた「上毛上野古墓記」をはじめ十二卷附添一卷の大作「辯學遼東家」或は文藝作品として「浴泉奇縁及び漢詩」等があるが、特に「養蠶須知」は迷信や神佛にすがつて豊蠶をねがつてゐたその時代の養蠶家に科學的蠶育の神髓を訓へ、養蠶縣群馬を今日あらしめた貴重な手引書ともいふべきもので、芝溪が新保市次郎といふ人にあてた書簡中にも

私養法さへ相用候得ば凶蠶決而無之皆年々同様に豊蠶に御座候

と滿々たる自信を述べてゐる「養蠶須知」の原本は現に澁川町の名望家後藤善十郎氏が珍藏、大正五年東京高等蠶糸學校で催した創立三十年記念展覽會に出陳、長くも台覽の榮に浴し、閉會後御手元に差上げて再び台覽に供し奉つた。

「辯學遼東家」は儒學の本義を論じ、徳川幕府の漢學を微塵に粉碎した畢生の大著で、十二篇からなるが彼はそれから三篇を抜きそれに添へて父子二代がかりで絶叫した、不正秤の徹廢取締りと博突の嚴禁、投機射倖の惡風を防ぎ、廢娼を要求する爆弾的な建言書を代官に差出したものだった、ところが「遼東家」はいはゆる幕府の寛政異變の禁（漢學以外の學問は禁ぜられてゐた）を破り、思想を混亂するものであり、直々代官に建言したのは明らかに差越訴へ（下からの手續を踏まず直訴する意で、場合によつては打首に處せられた）の大罪だと地頭（鎌倉幕府時代からの職名で、土地の頭領）から嚴しい訊問を受けた。

その建白書は残念ながら現存してゐないが、その訊問に對する辯明書は残つてゐる。

博突、賣女、祭芝居諸民の大きに相成候間、是又相除諸民のために仕度と、四ヶ條の義、訴狀に相認め候へ共、村役人へは相談も非常の義故不相成、御屋敷様へは愈々恐多く候得共、亡父の追善（不正秤取締りを生前から要望してゐたため）と一國の害の義、後難は私一身と存、御勘定所へ差上候所御開置に相成、其上御屋敷様御慈悲を以て差起の罪御赦免被成下……拙文三篇を相撰死後に殘し置可申心懸の所何事によらず存付有之者は可申出旨度々御觸下り候付恐多く存候得共、去々年八月御箱訴にて奉差上候云々

これと同時に芝溪は開墾の獎勵救荒貯蓄、養蠶、産馬牧畜の事迄箱訴で建言したが責を一身に負ひ眞に經世済民の熱誠から出た義舉として右の文面にもある通り代官から特に赦されたものらしい。芝溪は文化八年六月芝中の家で病歿した、時に六十歳遺業の開墾地は芝溪に實子がなく、養子にした甥大二郎は夭折、弟翠屏は芝溪に先つて歿するといふ有様で中心人物を失ひ親戚小作人は離散一時荒廢に歸したが、明治初年以來小林兼吉等有志がその遺業を繼いで復興に努めてゐる現高瀬桃園主の父君五郎翁などは伊香保に湯治した折、芝溪の遺跡をたづねて發奮、邑樂郡大箇野村からはるく移住し同地方の名産として現に聲價を博してゐる立派な桃園を築きあげた現在附近の戸數二十五戸また芝溪が百四十年の昔、命を賭して達し得なかつた度量衡器の取締は遅蒔ながら實施され廢娼は斷行され、賭博村芝居は禁じられて芝溪の精神はいま立派に生き還つた今後もまた永遠に生きるであらう。

（本稿は澁川國民學校長田部井鹿藏氏著「吉田芝溪先生」に負ふところ多い）

石坂孫市と都丸梁香

前橋中學校草創時代の恩人

本縣中等教育興隆の陰に咲く恩人が澁川町に四人ゐる。石坂孫市、石坂四郎平、都丸梁香、大竹直四郎の四氏、このうち石坂孫市と都丸梁香が本稿の主人公である。

明治十五年赤城山麓の勢多郡富士見村大字木暮に設けられた「縣立木暮尋常中學校」(前橋中學の前身)が本縣中等學校の草分けなのだが、何しろ當時は鐵道馬車が地方の最優秀交通機關だつたらんで通學上の不便といふものは想像外だつた。それに縣民の教育への關心が薄かつたため入學希望者も極めて尠く、開校後四年で收容生徒は百人足らず、しかも一ヶ月の授業料七十五錢で各科目毎に擔任教諭を置き、英語の先生などはアルソツ・ブルークとかチャールズ・トーマス・コツキンなどいふ英人を相當高給で雇入れ生徒十人に先生一人といふ贅澤さだつたから人件費に追はれて到底收支償はず、明治十九年十二月十五日の縣會の時の知事佐藤與三氏から突然同校の廢止問題が持出され、大多數議員の賛成で、校費を削除、二十年四月以降廢校の決議をしてしまつた、これを聞いて慨然奮起したのが石坂孫市であつた。

同志石坂、都丸、大竹氏と謀り、即日全縣下の父兄に檄を飛ばして反對の烽火をあげた。孫市氏覺書の一部に

生徒はこれを開き學を廢さんとする者、他校に轉せんとする者生じ學事混亂、世論紛々たるものありき、吾等四名本縣文化發達上大支障を來すを憂慮す

とあり、こゝで同十八日前橋市住吉屋に三十六名の父兄を集めて劇的會合となつた。孫市氏は

「私の一身は教育界の捨石に捧げる覺悟ですが、皆さんの御協力が無ければ到底目的は貫徹出来ません、暗黒の前途を嘆く青年たちに私達の力で希望の光を與へてやらうではありませんか？」

と聲涙共に熱情を披瀝、滿場を動かして

直ちに調印を取纏

め、缺席父兄へは書

面で或は草鞋履きで

勸説して歩き、斯く

して五十六人の連判

状を作り、佐藤知事

に決議不認可の請願

書とともに建言書。

る人士に乏しく遂に他府縣の驥尾に附するを免れず、實に國家の禍福安危は今この中學校廢立の如何に原因すべく云々」



石坂孫市氏

建言書の内容は

「誠に悲憤千万の事共なり、嗚呼我輩子弟は二、三議員の玩弄物となり悲鬱慘悽の域に陥り彷徨五里霧中に在るが如くその向ふ所を知らず、加之將來縣下の人民は高等教育の進路を斷ち、(中略)有爲の材幹も空しく山野に立ち枯れとなり、一縣下寥々乎として性行知識ある人士に乏しく遂に他府縣の驥尾に附するを免れず、實に國家の禍福安危は今この中學校廢立の如何に原因すべく云々」

とあり、現在この寫しは、父兄への勸説狀、返信、學校關係書類などと一緒に長さ七間の大巻物に表装、孫市氏長子の澁川町石坂庫氏(と)方に所藏され、去る昭和九年陸軍特別大演習の礎長くも

天覽の榮に浴したものである。

しかし縣當局は頑として容れず、やむなく孫市氏はじめ四名は縣會議員を歴訪して時勢を説き、縣下の父兄を巡回勸説すること三回、孫市氏は澁川銀行（現上毛銀行の前身）頭取の要職もサラリと投出して東西に馳驅し、復活不可能と知るやこれに代る縣立英學校設立の建議書を四名連署で提出する一方、寄附金で中學の授業を維持する案を樹て、その募集や管理、豫算等の實行方法につき縣と父兄の間を奔走、寄附目標を二萬圓として二ヶ月後漸く纏まる見込みがついた。

この間縣廳の正門に「サトウは蜜よりも甘し」と佐藤知事の頑迷を揶揄した落書が貼出されたりして結局縣もその熱意に動かされ、明治二十年三月九日縣告示第四十號をもつて四月以降授業料と寄附のみで維持繼續する旨發表、こゝに風前の學燈は危く消滅の厄を免れたのであつた。

そこで木暮校の校舎は前橋に移轉と決り、同年四月十一日紅雲町龍海院を假校舎として校門を開いた、この年の經費收支豫算書に總額五千八百五十圓、収入の部は寄附四千五百圓、授業料（生徒一人一ヶ月七十五錢で百五十名）千三百五十圓とあり、以來五年間維持、經營、存続一切の責任を主唱者孫市氏等が負はされ、教師の雇入から飲料水の面倒まで見、寄附金が入らなければ代辨するといふ縣立とは名のみで孫市氏個人の經營も同様であつた。

だがつひに苦節は酬いられた、二十五年の縣會で知事はじめ全議員も中等教育の一日もゆるがせに出来ないことを痛感して、縣費支辨の復活が議決され實に六年振りで軌道に引戻されたのである。

話は前後するが孫市氏は弘化四年父祖代々の名主の家に生れ、堀口藍園の門下で國學を修め、後質屋を開業、

澁川銀行初代頭取を學校問題の犠牲にしてから郵便局長を勤め後年これを當主庫氏に譲つて獨力で國民學校隣接に今の澁川公園を建設、招魂碑、征清役凱旋記念碑、征清役忠死者の碑、北清事變記念碑、日露戰役忠死者記念碑等を建立して郷土の忠靈を顕彰し、町役場へ寄附するなど、明治四十五年十月卅一日六十五歳で病歿するまで殆んど半生を地方文化の發展に貢獻した。

伊香保、榛名へ修學旅行に來る前中生徒は孫市氏の徳を慕つて毎年必ず同家へ立寄り、孫市氏はまた教へ子に對するやうに無性に喜んでこれを迎へ、いつも澁川名物の饅頭を五ツづつ饗應、この美しい師弟愛が明治廿年以來連綿廿年もつゞけられたといふことである。

澁川新町石坂園茶舗の主人七次郎氏(三)は庫氏の二男で孫市氏の孫に當る、學校復活で活躍した同志はすでに全部故人となつたが、その一人石坂四郎平氏は孫市氏の叔父、また大竹直四郎氏は先年まで郵便局長を勤め呉服店を営んでゐたが、死後閉業して當主は縣廳に勤務。

都丸氏は非常に變つた人となりで天保十四年仁兵衛の長子に生れたが、この父か物凄い大酒家で放蕩者、仕事は嫌ひ、博奕は打つて手がつけられず、これを嘆いた妻野島某がこのまゝでは子供の前途が思ひやられると江戸にある仁兵衛の兄澁谷淡良氏に事情を訴へて梁香氏の教育を託した、この時たつた五歳、伯父の膝下で讀書手習ひに螢雪の功を積み、後川本幸民に和蘭醫學を、高橋玉齋、前田梅堂に書方經史を學び更に福井藩學問所に入つて芳野金凌から漢學、詩文を醫師の淡良から内外醫術の實地を教はり二十二歳の若さで早くも完成した、この時郷里の母危篤の報を受け、病床に馳せ歸つたが、間に合はず十七年間相見ぬ賢母と生別して一心發起、郷里に止まつて慶應元年五月澁川町新町に醫者を開業した。

近所に堀口藍園先生が染物屋をしてゐた關係から時折出入するうち羽織の紋書きを覚え、傍ら漢學の門弟を多數集めてメスと針と筆の多彩な生活をはじめたが、明治六年澁川小學校の創立と同時

に懇望されて教鞭をとり五年で退職、その後は醫業に専心して名醫の譽れ高く、患者と門弟でゴツタ返したといふ。非常な博識で或る日客人が駒寄村漆原の某家は幾代も長壽で邸内の井戸端にぬみくすりといふ灌木があり、この井水を飲んでゐるためではないかと近隣で不思議がつてゐる噂を傳へると即座に

「ぬみくすり、は和名で、漢名でクキ俗名クコといひ四季によつて呼名が違ひ、春は天精子、夏はクキ葉、秋は邨老枝、冬は地骨皮一名仙人杖ともいふ、書に「甘美如飴輕身益氣」とあり天精子仙人杖等の名は長壽に因縁があるからその灌木のためだらう」

と一氣に答へ謎を解いたと澁川町郷土誌に遺つてゐる。

明治四十年十二月十四日孫市氏に先立つて同じ六十五歳で歿したが折原地内伊香保街道にある當時の宮中顧問官二條基弘伯題字、柳原義光伯揮毫の「都丸梁香先生之碑」の碑文には在世中の功績が詳さに記されてゐる。

遺著「元治聞見筆記」「百人一首解」「幕府の末期」「見聞慷慨和歌集」「燕香遺書」等十數卷は未だ世に出ず二男の澁川町並木町議澁谷典二氏(六七)が所蔵してゐる。

馬場重久苦闘傳

科學的養蠶法の先驅

明治維新の直後馬場石坂白亥といふ戒名のやうな長い苗字と名前を書いてゐた澁川在石原の俳人白亥(西馬門下の高弟)と一緒に會津へ錦旗を進めた官軍の中に馬場保といふ人物があつた、この人が祖先の馬場三太夫重久といふ者について手記を残してゐる、この重久が本稿の主人公だが、その手記によると重久は群馬郡明治村北下の草莽の一醫人で勸農に苦闘の全生涯を捧げた我が國蠶絲科學の鼻祖とも稱すべき人物で、今から約三百年前の正保二年といふのに武田信玄の家來として有名な馬場美濃守信房の後裔として明治村に生れた享保二十年乙卯年九十二歳で歿したことゝなるが、どうも九十一歳が正しい計算らしい、「醫を以て業とす」とあるけれど、この道では藪井竹庵らしく、二十歳の時百姓に轉向、幼稚極まる當時の養蠶法の改革を發心した。

村の先輩から養蠶の理をたづね、術を聞いては實際に試み、素人の悲しさで違蠶に違蠶を重ねたが、その度に失敗の原因を究明、蠶種を製造して試養し、眠起の不齊を來すもとを訊し、上下繭一升の蠶數を調べたり、蒺一泊の得失を研究するなど辛苦三十年、五十歳で漸く蠶育の要諦を會得したといはれる。其の夫人さと女がまた偉かつた、稗を食ひ、水を飲むといふ赤貧のなかに半襟一本買つて貰ふでなく、全く半世を犠牲にして夫の研究を援け、勵まし、愚痴一つこぼさず仕へたところ

は文字通り糟糠の賢夫人で、そんなよそこの井戸端會議の會長や銀狐の有閑マダムはよろしくさと女の墓石でも削つて吞むべしである。

正徳二年十一月、研究完成とともに重久は江戸通油町山城屋又兵衛に依頼して神州の蠶事を永久に傳へる「養蠶育手鑑」を發行した大判二十八枚の全一卷で、十一項目に分け



重久の建立した蠶神社

「抑々蠶の初は天照大神いまだ御出現なきまへに保育命の間出生して、はだへをかくしあたたむる事成しがたからん事を憐み玉ひて化虫とならせ玉ひ、養蠶の道を云々……」
◎ といつた雅文體で種、蠶、繭三者の因果關係を論じ蠶滯滅の發元を種矢と風濕寒暑の五とし種矢に注意し風濕寒暑の補ひをするのが養蠶原理の重點だと喝破、稚蠶育の要、蠶種の掃立の方法から各齡飼育中の桑葉と陽氣

の調節、上蒞法と採種法にわたり實例を擧げて三十年來の蘊蓄を傾けた業界の一大快著であつた、また各條毎に

はきおろし桑のめあつく毛蠶うすくその夜のしみをいとへきはぎは
竹休み風濕寒をよくいとひうすくひろげて桑をかきねよ

舟休み風濕のぞけ桑せめよ暑氣と火たくなはづせ戸障子
まぶしをばこじりをわけて重らせてやとひうすく風をいむべし
蠶にはつひえを徳のもととする桑をしむなよ隙をしむなよ
上り前桑くれ直せ度毎に手こじりあれば日限り揃はず
とにかく書くも夢なり讀むも夢 夢さめやらぬ憂世なりけり

等の和歌を配して飼育上の警戒を興へてゐるが、何せ當時のいろはの讀めない百姓には馬に念佛で、目標とした養蠶階級には殆ど讀まれず、相當數を印刷したらしいこの著書もどこにどうなつたものかその後明治初年になつて馬場家の親戚に當る某家の納屋に煤だらけになつて危く鼻紙代用に使はれるやうになつたのは全く最近のことである。一面重久は農耕にも非常に熱心で、毎秋の稻の熟するころ、稻穂を携へて各田の稻穂と比べて歩き等級を定めたりした、現在同地方で使つてゐる「馬場鋏」といふ手鋏は重久の發明したものと傳へられてゐる。

この農桑の先覺者遊いて二百年、重久直系の馬場仲司氏(六四)は現在同村小學校の小使さんを勤めてゐるが、二男の正四郎君は今事變で興亞の礎石となり妹ふききん(六二)ふちきん(五七)はさゝやかな煙草店を營むかたはら野菜などを作つてゐる、かうした報いらぬ馬場一族のため傍系に當る村長馬場武輔氏など心ある人達によつて重久贈位の申請も行はれたが叶はなかつた、これでは苦蒸すまゝになつてゐる墓の下に重久が餘り淋しからうと昭和五年すくそばに供養塔を建てたが、昭和九年陸軍特別大演習の際、畏くも「手鑑」が天覽の榮に浴するに及んで、不遇を嘆く末孫たちの感傷は一遍に吹つ飛んでしまつた。

國民學校前の發地岡にまつられてゐる蠶神社といふ石神は重久が生前、屋敷内に板宮を建て蠶、蛾の老廢したのを集めてまつつた名残であつて、現在の石碑の臺石が當時の板宮の臺石だといはれ、馬場一家ではこの蠶神社の御札を出して、參詣する養蠶家にわけてゐる。

原澤家の人々

榛名山麓に天下の名外科醫

二五六

名峰榛名が展開する廣漠たる裾野には數限りない先賢偉人の靈が眠つてゐる、そのうちで最も異色あるのは原澤家の人々であらう、三國街道、高崎、澁川線の小倉といふ電車停留場から分れて爪先上りに西南へ七、八町、涼々たる小川の流れも清い一部落の中ほどに、田舎びた朱塗りの長屋門、松や芭蕉の巨木に圍まれて點在する病棟、由緒ありげな書院などまことにゆつたりと住みなしてゐる舊家がある、これが紀州の華岡隨軒(註)、と共に天下の二大外科醫として謳はれた刀圭の名家群馬郡明治村上野田の原澤家なのである、實際熊谷の儒醫三浦無窮などは醫師としての原澤家を讃めあげて「嶺東第一家」とまで折紙をつけてゐるくらゐなのである。

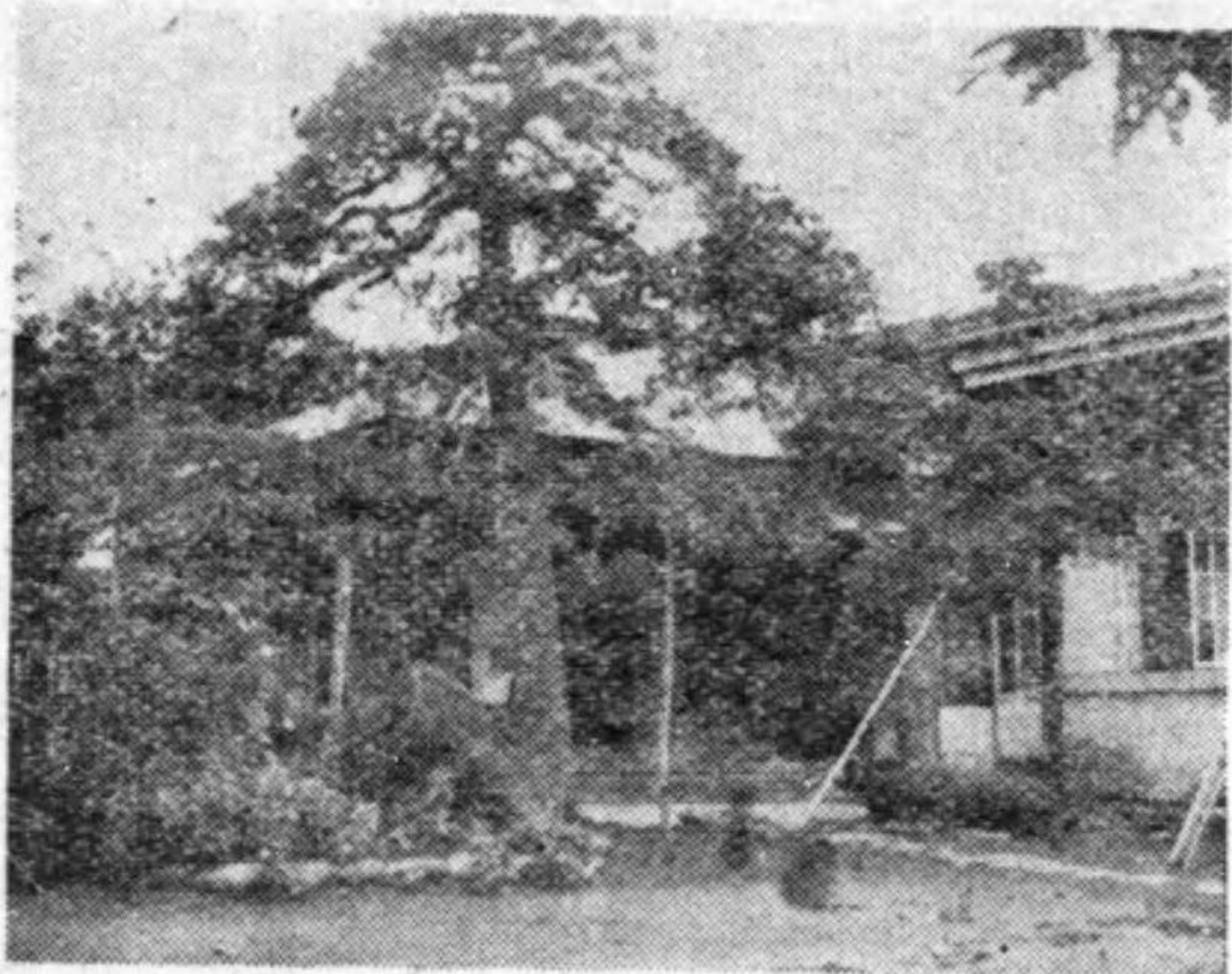
同村天台宗野田山東福寺に在る原澤氏先塋碑には

原澤氏系出新田義貞、義貞納上野群馬郡野田村澤浦右近女女生二男

といふ書出しで、同家の系圖が刻つてある、それによると澤浦氏は義興と徳正を生み、徳正は野田にゐるうちに新田氏の滅亡に遭つたからつひに歸農源氏の原の字と母方の姓から澤の字を取り原澤將監と名乗つた、この將監が原澤氏の家祖になるのである、一方、母方の澤浦氏といふのは先祖は梶原景時と同族で、水澤觀音堂の伽藍修築の募命を受けて出張中、どうした加減か同村で外科醫を

開業した、それがいつの間にか、といつても記録に現はれてゐるのは三百數十年前と判つてゐるのだが、とにかく醫人澤浦の看板が原澤と塗り替へられるやうになつて十幾代文仲(圭亭)の時に成ると華岡隨軒と並び稱せられたり嶺東第一家とまで持て囃される名聲を博するに至つたのである、けだし原澤家とはいふものゝ天下の原澤として刀圭界に嶺東第一家で通るやうになつたのはこの文仲先生からなのである。

文仲が生れたのは明和元年、墓表によると諱を誼、字は子恕、號は文仲、圭亭は晩年の號である、少々といふ隱逸の高士であつた。



高野長英の泊つた原澤家書院

◎年の頃兩親を失ひ、祖父に養育されたところがあるが、その祖父といふ人の名はわからない、文仲の醫術の師は彼を嶺東第一家と推賞してくれた熊谷の三浦無窮なのだが、かの有名な青梨(清里村青梨子)の葛西玄沖親子(註二)佃の田胡玄洞、總社町の石田玄圭なども實は悉く無窮の門弟だつたくらゐで、當時刀圭界における無窮の地位は相當以上なものだつた、先生諱は長、字は伯誠といひ祖先是豊臣家の臣だが祖父玄昌の代に熊谷に居を定めた、無窮は少年時代から群書を涉獵しかつて笈を負うて東都に遊學、幕府の醫官長谷川玄通から醫術を、經義を江子園及び稻垣維明等に學んで歸郷、開業したが無慾恬淡、文化十三年八十歳で歿するまで生涯を超然と物外に送つ

二五七

無窮は上州の刀圭界に一大勢力を成した門弟達の懇請もだし難く寛政十二年三月、一杖一笠、繪にある西行の恰好で上毛にやつて来た記録によると無窮の時六十四歳であつたといふ、上毛に遊ぶこと約一ヶ月、そのうち半分は文仲宅に御輿を据ゑたが、その間有名無名の訪客陸續として絶えず、一日浪速の人で雜劇や謡曲などで渡世する伊織と呼ぶ藝人が弟子三、四人を連れて老先生と若先生に報恩の藝盡しを披露したいと押しかけて来た、かつて伊織が病んで咽喉を潰し江戸を喰ひつめ田舎廻りの合力藝人と尾羽打枯らしてゐたとき、無窮の懐ろに飛込んだことがある、無窮も窮鳥殺すに忍びずと處方を文仲に授けて投薬したことがあつた、再生の恩に泣く伊織の強つての願ひに一間を開放、患者や村の衆を集めて夜が明けるのも忘れ、伊織一座の熱演を觀賞したといふ、澁川の國學者吉田芝溪もこの間二度も來訪（記録には四月六日と同日とある）してゐる、無窮は彼を評して「年五十餘、上毛操觚之巨擘也」と喝破してゐるが、その眼力はさすがに鋭い。

東福寺にある原澤家代々の墓石は全部太田玄齡なる人物の選文だがこの玄齡とは何んと當時儒學者仲間であつた折衷派の大家として有名であつた加州大聖寺の人、太田錦城（註三）の四男である、これがどうも親譲りの道樂者で、原澤家に取入り絶えず小遣ひ錢をいたぶつてゐたいは、原澤家の家ダニで玄齡から原澤家にあてた

前略……第一家の記入出来揚り候間奉入御覽候

一、小子も積（借）金之穴フサギ兼候間、質物も皆入盡し致方無之候故、又々旅行之企有之候へ共、餘り大暑に而旅行も出来兼誠に思案に不及、窮迫至極に御座候間、御約束の文代は一日も早く相届被下候様御取計之由……後略

の一書を見ればあまり上等でないその人格が窺はれるではないか。

聊か本題を離れる嫌ひがあるが大儒と仰がれる太田親子が實際にはどんな人間であつたか一般の認識を是正する意味から松浦靜山（註四）の「甲子夜話」卷十の一節にある錦城父子評を左に掲げる

世には思よらぬことを聞なり、或る大儒と呼ばるゝ者の固より經義に通じ文學に達したるは雙ぶ人もなしと言ふ、然るに講釋をするに何つもあぐらをかきくはへ烟管にて、中々正座などすることなく（中略）其子六人とかあるが、何れも年盛んなる者にて、父の風儀に能く似て學術文章には長じたれども行狀は取るところ少しもなく、夏は皆裸體にて衣など著ることなく、親の前を憚る所なく時には足を出してゐることもあり殊に甚しきは一人の子、その父の妾を誘出して不還、夫よりまたこれを免して同居するなど人倫の道とも不覺、然ればその窮る經義はいかなる者とか思ひけん、講釋と云も厚顔の沙汰なるべし（下略）

また、此處に父なる錦城が文仲へあて、花柳病の治療を頼んだ文書もある、笑止と云はうか、公開を憚る珍文献？である。

文仲は四十五歳の文化五年頃漸く家業の基礎が固つたのであとを同族の女婿存義に託して江戸に乗出した、表面隠居の體だがはじめは自由の身となつた彼のひたむきな研究慾は堰を破つて奔流のやうに異常な熱情を以て各地大家の門をたゞいて歩いた、原澤家の記録と傳説に従へば文仲が前記華岡隨軒を紀州平山に訪ふて外科術を學んだのもこの時のことである、更に長崎で蘭醫ヨアンロイスに教へを乞ひ一方駒形町（勢多郡木瀬村駒形）の醫生内田忠順に學資を與へて華岡塾に送り、その習得した奥義を絶えず情報させるつまりスパイ戰術によつて自得すると同時に郷里の存義にも傳へた。

かうして研鑽すること前後二十年に及んで文仲はこゝに家傳の秘藥たる整骨藥を「春秋散」金創藥を「黒嶺東散」打撲藥を「黃嶺東散」と命名、この三藥を一子相傳の秘法とした、これは今になほ

傳へくして先代の未亡人なか刀自(六三)の筐底深く秘藏されてゐたが先頃三女富貴子さん(三三)の婿として迎へた當主湯淺忠平氏(三三)に移つてゐる、由來原澤家は「野田の金瘡」と呼ばれて近郷に轟いてゐるが、恐らく家傳のこの金瘡薬から出たものであらう。

(註) 華岡隨軒は寶曆十年十月二十三日紀州に生れ家は代々醫を業とした、二十三歳の時京に上り吉益南涯に古醫方を大和見立について外科学を究めた、衆醫の匙を投げた業病を擁して、患者は全國から門前に市をなし、塾生千三百、徒弟を算へない所は全國に大隅、壹岐の二國だけといふ華岡法の外科を創始した大家で、名を震、字は伯行、青洲と號した、天保六年十月二日病歿、享年七十六、遺著二十餘種がある。

(註二) 群馬郡清里村青梨の醫師父の玄冲は書も能くし上毛三大家の一人、子の玄冲は耕樂舎主人と號し同郡野良犬地内に耕樂舎といふ私塾を設立し郷黨の薰陶に努めたので有名、天保九年五月歿、享年五十五。

(註三) 幼年の頃神童の聞え高く京都の皆川洪園や江戸の山本北山等に學んだが後遂に折衷派の大家となり加賀侯に仕へ文政八年六十一歳で歿した、なか／＼の大學者だが惜しいかな素行が悪くまた博覽を街ふ風があつた玄齡はその第四子で通稱遮那四郎、晩成と號した、儒者としては實に立派だが、これもまた素行が面白くなかつた。

(註四) 肥前平戸の城主、幼より書を好み群書を涉獵し「甲子夜話」正續二百巻を著す、天保十二年六月二十九日歿、享年八十二。

話は在郷中の文仲にもどるが、この家傳薬につき無窮から文仲あてに一書生の面倒を依頼してきた添書の中で

其方は家傳之事も有之候得共、それは一向にうかゞひ候者には無之候、家傳御調合並に療治の時は遠く引退き候様に申付候

と家傳の神聖冒すべからず、弟子にはたゞ獨立自尊の精神だけを吹込んでいたゞきたいと認めてゐる、封建的といはうか、家傳に對する當時の考へ方が窺ひ得てまことに面白い手紙である、序に原

澤家では門生共が將來開業する場合を豫想して

二十里以内、御家法に紛敷儀は決而仕間敷

と保證人連署のいかめしい證文誓詞を一札入れさせたものだといふことを附け加へておく、それでも彼の名聲を慕つて門弟は關東はもとより信越、佐渡、奥州からまで集ひ寄り、文仲も時によつては遙々雪の越後までエツサ、ホイサと駕籠にゆられて三國峠越しの往診に出掛けたといふ。

江戸に出てからの文仲は下谷御徒町と龜井町に居を構へ醫者の看板を掲げる傍ら詩文の道にも遊んだ實子義道に送つたある時の手紙の中に

其元の書狀は文を成したがる故面倒なり、只用の事ばかりむき出しに書候方、信實にて調法也、父子の間に於て文不文はいらず……

と文章道の要諦を教へてゐるあたり、どうして只のお醫者さんでなくその文才は相當高く評價されてゐる。

初代文仲の女婿として迎へられた存義も義父に劣らぬ傑物で、安永九年の生れ、圭亭(初代文仲)の同族義番の次子小字和四郎、桑園と號した、青梨の葛西玄冲が水戸の儒臣朝日集義を聘して設立したといはれる私學耕樂舎は從來玄冲一人の經營のやうに傳へられてゐるが、利根郡の人でのち小栗上野介の下に製鐵所委員となつた増田作右衛門から桑園にあてた一文によると却つてその設立は桑園が主唱し、文仲の後援で建てたのが事實らしい。専門の醫術においても「銳意整骨究其精妙」と文字通り骨を削る研究努力の果、文政九年五月四十七歳で鬼籍に入つてしまつた、原澤家の土臺を築く尊い犠牲である。

三代の義道これが文仲の實子で寛政十年生れ、號を復軒といひ高野長英と親交があつたのは實に彼である、原澤家の碑誌を引受けた太田玄齡が復軒のために書いた墓表によると

君在時世、醫者其能、僞日義道歿、以誘病人、今君眞歿、衆醫當鼓掌

つまり復軒の聲望をねたんだ歎醫者どもが生きてゐる復軒を死んだと宣傳して病人を横取りしようとしたことを書いてゐるのだが、それほど彼の技術は群を抜き、原澤家累代の醫業は正に彼に至つて大成したといつていゝのである、一年の患者實に五、六千を算へ、上野田の農家といふ農家は原澤家へ收容し切れない患者で充滿してゐたといふ、太田錦城に學んだだけであつて詩文にも巧みで、文墨の人とも交り多く、草稿や詩集も數卷遺されてゐる。

長英が同家の客となつたのは天保七年八月、吾妻郡澤渡温泉の豪傑醫福田宗禎（註一）を訪ねての歸途、馬上に伊香保高原の秋色を味ひながら水澤から野田へ下り八ッ半前原澤家の門を潜つた、吾妻郡誌に記される遠藤玄亮といふ人にあつた長英の書簡にも

八ッ半前野田に着仕候、御放慮可被下候然水澤近邊の野にアルニカ花（ウサギギク屬の藥用植物）未だ散不申甚盛に候

とあるが、郡誌の編者はその註に「野田には當時原澤某といへる醫師ありきといへば長英はそれを便りて至れるものか」とまるで原澤家の存在を知らない、その時長英は三十三、復軒は三十九歳である、この時、長英は自著「醫學樞要」の土木費を募集に來たのだが、たまたま上州の凶作の慘狀を目撃するや道傍に多い蕎麥と芋に氣がついて、これこそ備荒補食天與の代用品と早速「二物考」の起稿を思ひ立つたのである。

長英と原澤家の交渉は相當深かつたらしく、原澤家にある「義順隨筆」の一節に長英が自分の門生佐々木雄逸を復軒に託したことを傳へてゐる、この雄逸といふのは仙臺の人、天保二年十月の渡邊華山の「毛武遊記」を見るとその二十九日の所に武州高木島の舊家伊丹新右衛門方で雄逸が蘭學を教へてゐるのを華山が発見

此家に洋學生教授してありしが、出て話せんとして姓名を告ぐ、佐々木雄逸、仙臺人、予が知る人の名を問ふ、みなことふ。

とある、華山と雄逸は勿論初対面だが、その問答のうちには長英はもとより雄逸がこれから長英の添書を持つて訪ねようとする復軒のことも出たことが想像される。

江戸で有名な蘭學者大槻俊齋（註二）からも弟子が送り込まれたことがある、やはり「義順隨筆」に曰く

義蕃の代大槻俊齋添書して醫生鎌田蘆庵と云者を食客せしむ、成す所ある者の如しと雖も、嗜酒粗暴にして家人に耐えざらしむ依て噓して歸す、途中熊谷に到り割腹して死すと云、暴漢終りを能せず又憐むべし。

俊齋と原澤家の交友も長英以上に密接だつたらしく、後年江戸で相當な蘭醫となつた湊長安（註三）といふ俊齋の不良門生が逃げて來て原澤家に轉がりこんだ時、俊齋から寄せた謝禮と依頼の書簡も同家に保藏されてゐる、とに角この草深い邊陲の一醫院に天下の志士、大儒をはじめ全國幾多の醫生が秋燕去り鴻雁來るといふ鹽梅で往來したことだけでも原澤家の存在はわが上毛の誇りとするに十分だらう。

當主湯淺忠平氏は先代利藤太氏の兄の一子で慈惠醫大卒、なか刀自の長男一郎氏（註四）は外科を兼つて東京で齒科醫を営み、二女三枝子さん（註五）の養子金一郎氏（註六）は日本醫專を出てから慶應病院

で永らく血液の研究を重ね、去月三十一日日出度く學位を受けて沼田町で開業、一族揃つて七百年の醫家原澤の輝く歴史と傳統を守りながら隆々たる家運を盛りあげてゐる（本稿は大部分高崎の郷土史家本多夏彦氏の調査に負ふ）

（註一）吾妻郡澤渡の人、少壯江戸に出て市川寛齋に詩文を、醫術を二宮洞底に受けた、後蘭學に志したが、長英が密かに來て宗禎を頼つたのもこの頃である宗禎がこれに師事したことは勿論で大いに得るところがあつたらしい。

（註二）江戸末の醫人、仙臺藩の重臣片倉氏の家臣、少壯長崎に遊びシーボルトについて蘭法を學び「銚劍瑣言」を著して名聲を得た、文久二年歿、歳五十七。

（註三）奥州湊千軒村の人、文政六年シーボルト渡來の時、いち早く長崎に赴いて入門した、シーボルト直傳の新療法を唱へたので大いに名聲を博し、後丹波篠山の青山侯の侍醫となつた。

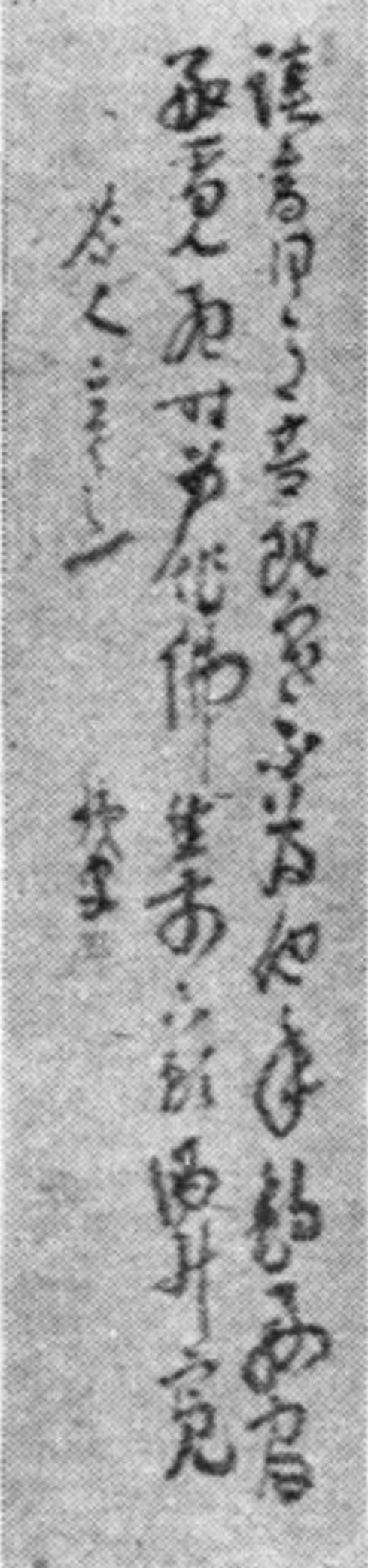
勤皇僧 牧野再龍

縣令大音龍太郎の黒幕

勤皇家の極めて少い西上州に群馬郡箕輪町曹洞宗龍門寺の僧牧野再龍のあつたことは、高崎藩の志士田中毛野の項でその一端を紹介したが、彼は毛野の先輩でありながら、毛野と同様に埋もれてしまつた勤皇家の一人である。

明治維新後は「官軍坊主」または「官軍隠居」の悪口を放たれるほど勤皇についてはハッキリした態度を持つてゐた、徳川幕府の政治を最善のものとしてゐた御用藩の人々が、維新後の政治に難癖をつけたのは無理のないことであるが、勤皇家であつた牧野再龍に後の世まで「官軍坊主」の悪口をいつて、この勤皇僧を埋もれたまゝにして置くことは遺憾千萬である、これには門人にその人を得なかつたこと、廣く上毛における勤皇事蹟の研究に手を染めた人のなかつたことにも原因があるだらう、確に再龍は西毛における同時代の勤皇家新井守村、堀口藍園、狩野利房等と肩を並べて少しも遜色ないし、或は彼等以上の人物であつたとも想像されるのである。

再龍については新潟市西大畑町坂口仁一郎氏の著になる。



再龍の遺墨

「北越詩話」下卷（大正八年刊行）及び群馬郡上郊村故齋藤平治郎氏著「前龍門寺住職牧野再龍先生略傳」（昭和六年刊行）

によつてその概略を窺ふことが出来るが、更に再龍和尚が住職した高崎市若松町龍廣寺及び群馬郡箕輪町龍門寺について調査し、これに再龍が得度した新潟縣刈羽郡北條村普廣寺の住職を永らく勤めた高崎市下横町向雲寺住職内山憲一師の調査を加へて、勤皇僧牧野再龍の一生を明かにしたいと思ふ。

何分にも埋もれてしまつた人であるから、何處を探してもいまだに生年月日がわからない、齋藤

氏の略傳によると長岡城主牧野侯の遺胤とあるが新潟縣刈羽郡北鯖石村中田の百姓牧野なる人の子として生まれたとするのが正しいやうである、幼名も不明である。

何歳のころかこれも不明であるが、同縣同郡北條村曹洞宗普廣寺に入つて得度し、名を道介と改めた（再龍は晩年の名であるから、中間の名はその時々の名によつて記述を進める）いま普廣寺に傳はる話によると、道介は得度した當時非常に漢詩を作ることの妙を得てゐたといふことである、普廣寺住職北條剛轉も漢詩にかけ

ては北越方面で有名だったので、詩友を全國に持ち、詩文の交換が非常に多かつた。
當時上州の漢詩壇で名を成してゐた人に高崎市若松町曹洞宗龍廣寺住職卍菴僧三があつた、普廣寺住職とは同宗の關係もあつて特に詩文の交換が多かつたが、得度したばかりの小僧である道介は時々僧三和尚の詩を見ては、次韻を賦し、これを僧三の許へ送つたといふ、この次韻を見て僧三は道介を弟子にほしくなり、普廣寺住職に弟子の譲り受けを申込んだところ住職も承諾し、道介もその氣持ちになつて、こゝに僧三と道介との師弟關係が結ばれたのだといふ、これから僧名を卍岫道介と稱した。

どうして小僧時代に道介が漢詩を覺えたかはわからない、龍廣寺の弟子となつて高崎へ來てからは師匠の卍菴僧三及び大沼枕山について學び、一家の域に達してゐる、その遺作は長子肇の近世名家詩鈔及び大沼枕山の下谷吟社詩等にも見えるが、大部分は邦寧館絶句抄に輯録されてゐる。

さて龍廣寺の弟子となつてからの道介は、禪學研究のため江戸駒込の曹洞宗學寮吉祥寺に入つて宗乘餘乘の蘊奥を究め、數年の後高崎に歸つた、これも何歳の頃か不明であるが、當時師匠の卍菴僧三は龍廣寺の本寺群馬郡箕輪町龍門寺の住職となつてゐたので、道介は僧三の法を嗣いで直ちに龍廣寺二十一世の住職となり、僧三の歿後龍門寺住職に榮進した。

この頃別名を玉龍と稱し、生家の牧野姓に還つて牧野玉龍を通り名としたやうである、（北越詩話には「福勝寺平井太龍に投じて剃度し、名を玉龍と命ぜらる」とあるが、疑問の節がある）

龍門寺は曹洞宗派中風指の寺院で、箕輪城主からは十萬石相當の格式を與へられ、御朱印地五十石を有する巨刹であつた、ここで卍岫道介事牧野玉龍は、雲水を集めて坐禪を指導し、或は獨特の禪風を昂揚してゐたのであるが、その禪風と學德兼備の名聲は忽ち上野諸藩の間に擴まり、一時龍門寺は、玉龍を慕つて教を請ひ、或は談論の時を過す各藩の志士で絶え間がなかつたといふ、その頃高崎藩の田中毛野は頻繁に出入して教を受け一人であるが、談論の時を過す者の中には西毛における風指の勤皇家新井守村、堀口藍園、狩野利房等があり、その勤皇に關する論議は時人の耳を聳てるものがあつた。

こんな關係から龍門寺はいつとはなしに勤皇志士の温床となり、有り餘つた寺の財産も勤皇運動の資金に投げ出してしまつて、十萬石相當の格式を備へた巨刹も荒れ放題となり、玉龍の生活は實にみすばらしいものになつて了つた、玉龍が當時の生活を賦したものに

夕汲清泉朝採薪藜羹豆粥自甘貧誰知林下眞風味說與城中玉食人

といふ詩があるが、これが當時の眞相であつたらう、いまでも箕輪方面では

龍門寺も官軍隱居のために荒されてしまつたといふが、道樂して荒したわけではなく、立派な事業のために荒したのだから、荒されたとてうらむ筋合ひではあるまい。

この寺に出入した志士は上州各藩の志士ばかりでなかつた、遠く江州彦根藩からも郷士大音龍太郎なる者が、玉龍和尚の名聲を聞いて入門し、三年間食客となつて教を受けてゐたことがあつた、この大音龍太郎こそは初代の岩鼻縣令大音菱陀その人である。

大音龍太郎が玉龍の門に入つたのは十六歳の時であつたといふが、三年間玉龍の教を受けるうちに、その感化

によつて勤皇の志を抱くやうになり、遂に江戸へ出て志士の間を往来することになった。江戸に出た龍太郎は玉龍の添書によつて志士の間を轉々としてゐたが、感ずるところあつて京都へ上り、岩倉具視公邸の下働きとなつて時の到るを待つことになった。

この間玉龍と龍太郎の間には交渉がなく、お互に忘れかける年月が経つたが、時たま幕府征討の議が起り、朝廷においては東國の事情に通曉する士を求むることとなり、こゝに大音龍太郎が起用されて舊師玉龍と事を謀る日が到来したのである。

明治元年龍太郎は關東觀察使に任ぜられ、東山道東下の軍に屬して四月には横川の關に到着した。

この時大音龍太郎は早駕籠を驅つて箕輪なる龍門寺を訪れ、玉龍和尚に再會して舊恩を謝し、且つ關東觀察使の辭令書を示して、こゝに至れる經過を述べ、大いに請ふところがあつた、平素勤皇を持論とする玉龍は、感激してこの請ひを容れ如何なる難事に遭ふも朝廷の命を奉じて事に従ふべきことを誓つたのである、龍太郎は喜び勇んで本隊に歸り、玉龍は直ちに龍門寺住職を辭し、僧籍を去つて一介の牧野玉龍となり、官軍に屬することとなつた（この時還俗して名を再龍と改めたといふ説もあるが誤りである）

官軍に身を投じた玉龍は、各藩の間を往来して、深くその情勢を探り、或は勤皇の大義を説いて、上野諸藩の士に歸順を勸告し、これに成功したのである。

間もなく幕府は政權奉還の實を表明するに至り、こゝに明治の御維新となつたのであるが、上野統治の大任は、またもや玉龍と因縁淺からぬ大音龍太郎に任せられることになつたのである、即ち群馬郡岩鼻村舊陣屋に置かれた岩鼻縣初代の縣令が彼である、時に明治元年七月、彼は二十三歳の青年であつたといふ、岩鼻縣令に就任した大音龍太郎（菱陀と號す）は、早速牧野玉龍を顧問に招聘

して、上野統治の方針を立てることになつた、當時上野は亂麻のごとき國情で、特に上州長協差の遺風があつて人氣はこの上なく悪い、まづ大音縣令はこれを鎮撫するために玉龍の意見を徴したのであるが、この時玉龍は

「治を布くの始めに於て、嚴以て之を鎮し、寬以て之を撫するに如かず」

と施政方針を示したのである。

大音縣令の在任は二年に滿たぬ短期間であつたが、この間玉龍から與へられた施政方針によつて情民の覺醒につとめ、強盜、暴行等を働く博徒の親分子分を一掃し、その治績には見るべきものがあつた。

博徒の處斷等は相當思ひきつたもので、斬罪に處することが多く、且つその首を路傍に梟して情民の覺醒を促したものだといふ、これがため大音縣令の名を聞けば泣く兒もだまつたといふことであり、縣令の巡視と聞くと、農民は夜でも田圃へ出て草採りをしたものだといふ。

この鬼神の如く恐れられた大音縣令の背後に玉龍のあることも自然と知れ、玉龍は一時縣令以上に恐れられた、この頃「官軍坊主」の悪口を放たれたものと想像される。

「嚴以て之を鎮す」の施政は大いにその治績を見たのであるが、大音縣令と岩倉公との間に意見の相容れざる事情があつて「寬以て之を撫す」の施政に移らざる前に職を退くこととなり、これによつて嚴の斷行のみで玉龍の施政方針が終つたのは惜しいことであつた、幾分でも寬の實行に移つてをれば、玉龍も今頃は立派に世に出てゐたことであらうと思はれる、以上が幕末から維新にかけての玉龍の働きである、大音縣令が更に一年の在任期間があれば玉龍の働きにも更に一段の光彩が加はつたことであらうが、縣令の中途更迭は何んとしても遺憾の出來事であつた。

こゝで玉龍が再龍と改名した事情を探つて見たい。

玉龍が龍門寺に在る間弟子を養成したことは一、二に止まらなかつたが、その中で玉龍、即ち正軸道介の法を嗣いだ弟子が二人あつた、一は道鳩和尚で龍門寺を継ぎ、他は謙光和尚で龍廣寺を継いだ。

道鳩和尚は玉龍が僧籍を離脱すると同時に龍門寺住職となつたが、明治の初め小田原最乗寺の役僧に就任したため、龍門寺の寺務を見ることが出来なかつた、當時玉龍は岩鼻縣令の顧問として活躍してゐたが、龍門寺住職を空位にするを許されぬ事情から、再び玉龍は龍門寺に歸つて住職となり、道鳩和尚が歸山するまで名ばかりの住職をつとめたものである、この時に名を再龍と改め、これ以來牧野再龍で通して來たのである、この名が上州人に最も印象を與へたと見え、生れながらの本名のやうに呼ばれたものと想像される。

大音縣令と別れた再龍は附近の人々から「官軍隠居」と呼ばれながら龍門寺にあつて詩文を友としてゐたが、明治十二年の春前橋に出て紺屋町で塾を開き、還俗後迎へた妻前橋藩士厚木氏の女を相手に子弟の教育に當つたが、同十四年春、重野安繹博士に迎へられて修史館顧問に就任、在職中明治二十二年十一月二十九日東京市下谷區南稻荷町の寓居で歿した、享年六十九歳、弟子謙光和尚が遺骸を引取り高崎市若松町龍廣寺の墓地に葬つた。

再龍の晩年は所謂英雄の末路の例に洩れず、失意と赤貧の中に一生を終つたもので、同情に堪へざるものがある。

一子牧野惠龍は再龍の歿後龍廣寺に引取られて謙光和尚の弟子となつたが、感ずるところあつて還俗し、東京を轉々とするうち、再び東京市板橋區下赤塚町曹洞宗松月院の弟子となり、某寺の住職となつたが、數年前死亡し、その後龍門寺龍廣寺とも遺族との交渉がなく不明のまゝになつてゐる、再龍の法を嗣ぐ龍門寺及び龍廣寺は、再龍に養育されて住職となつた道鳩、謙光兄弟の子孫が代々相續し隆盛を極めてゐる。龍門寺の如きは「官軍隠居」に荒らされたといふものゝ巨利の體

面を保持して、いまなほ隆々たるものがあり、現住職喜美侯部謙正師が再龍直系の法統を繼いでゐる。

再龍の容貌は長身にして色黒く極めて魁異、自ら鐵隻または漆道人と號したくらゐ、また別に杉陰、再生人、木鷄子等の雅號を用ひたともある、詩は大家の域に達したが、書は上達せず、これがためあまり筆は揮はなかつた、彼の筆蹟は高崎附近にも多少残つてゐるが、最近越後方面の再龍崇拜者に集められてしまつたのは惜しい。

住屋武兵衛の先覺

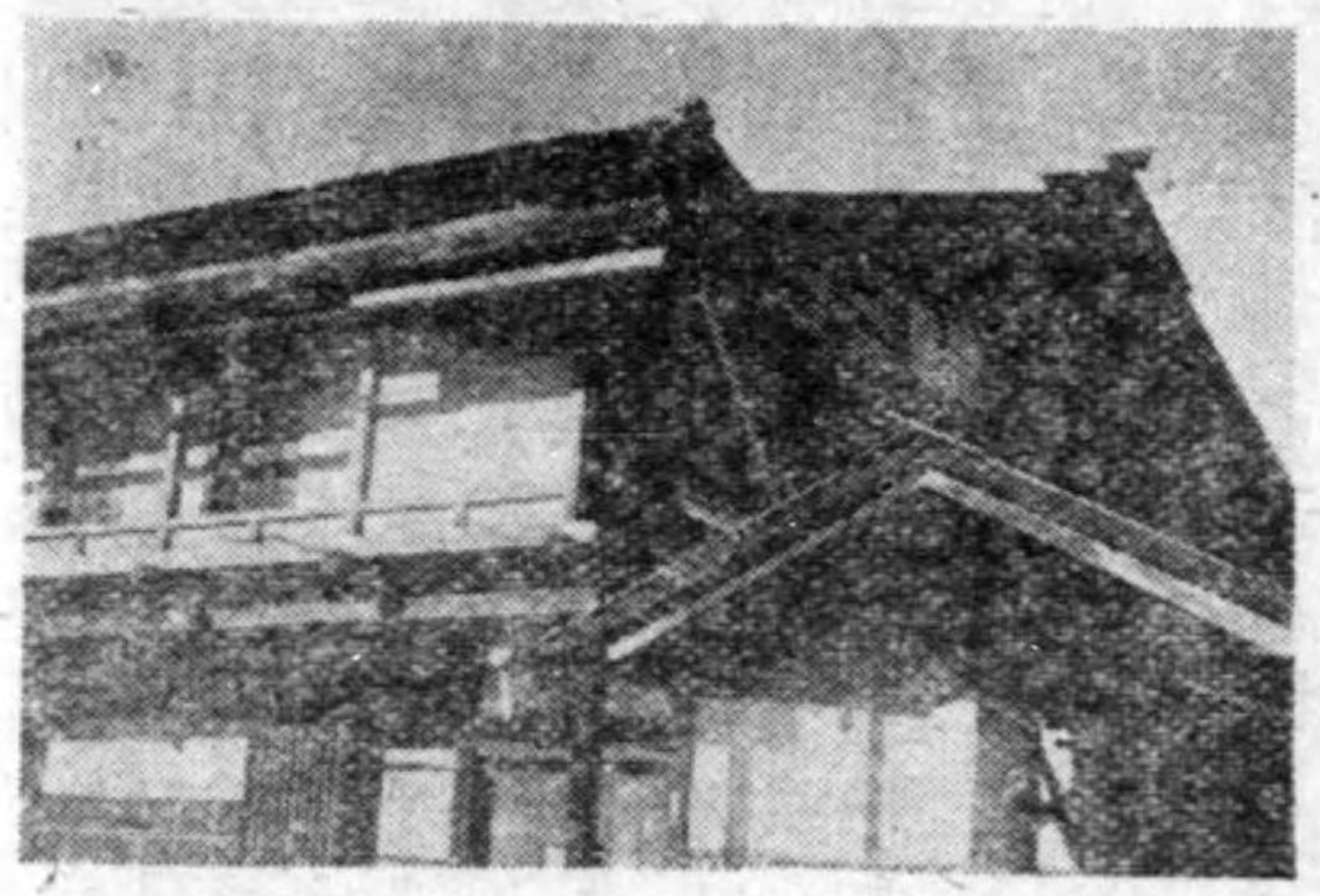
百二十年前に「農民金庫」創設

百二十年の昔、農村の經濟更生に東奔西走八方苦慮をめぐらした結果厚生資金金庫ともいふべき「永續金」施設を完備して前橋藩向領（利根川對岸）三十三ヶ村の貧しい農民六百餘人を救濟した恩人、群馬郡國分村（今の國府村字東國分）の名主、住屋武兵衛重信を紹介しよう。

住屋家（現在は住谷）は武士の出で、永祿六年に國府へ土着したと傳へられ、代々武兵衛を名乗つて名主を勤めた豪農、當主晴治老（六）で十四代、かつて和宮様御東下の際、御泊所の光榮に浴した碓氷郡板鼻宿の本陣木島喜兵衛方から娘が二人も嫁に來てゐたことがあつたといふ。

本篇の主人公十一代武兵衛重信老は天明、寛政年間から文化、文政にかけての人であつた、例の

天明三年淺間山の爆發以來この地方の田畑はすっかり瘦せをとろへていつまでも復舊しない、か
て、加へて天候不順の年が続き、更にいけないことには「殆ど狂人に近い」と後世の史家が評する水
野忠成の悪性インフ
レの時代であつた、
重税は課せられる、
物價は暴騰するがそ
の割合に農家の懐中
は樂ではないし、穀
類も思ふほどの收穫
はない、「百姓など馬
鹿らしい、御城下へ
出て仲間奉公でもや
らうか」とか「博突
でも打つてゐた方が
ました」とか「娘が
あつたら女中奉公。
の「永續金」施設のことを聞いたのである、小幡藩では
領内有志から五百兩、藩主（松平攝津守）が五百兩出資、都合千兩の資金を運用して農民を救済してゐるがも



家谷住の在現

をやらせるに限るぜ」とか鼻もち
にならぬことを平氣でいひの、しり
歩くといふ、もうどうにも手のつけ
られぬ状態が続いた、従つて小作米
どころか年貢も納められず田畑を放
つたらかして夜逃げをするものも出
てくる始末、藩でも種々對策を講じ
たがどうにもならないで文政五年の
秋となつてしまつた。
「これではいけない、どうにかセン
ければ」と日夜心痛してゐた住屋武
兵衛、一日所用あつて小幡藩（北甘
樂郡小幡町）へ出張して、同藩御用
達新井吉十郎方へ一泊、こゝで小幡

う三年ほどになり、相當に實績を擧げてゐる。

といふのであつた、「これだこの施設をやらう」武兵衛は手を打つて喜び歸村すると早々にこのこと
を藩の勸農係内海友七に届けたところ、農民救済方法にほと／＼考へ盡きて嘆息してゐた矢先とて
内海氏は即座に同意し、武兵衛の人望手腕に一切を任せ、武兵衛重倍四十六のときである、よし
家財を叩いて裸一貫にならうとも、いかでやり遂げんでおくものかと悲壯な決意を固め

向領卅三ヶ村中の有志植野村（總社町）儀左衛門、上日高（新高尾村）民吉、東國分村輪之助といふ三人を得て先
づ資金の調達だとばかり手分けして村々の有志を説き歩き、翌文政六年三月遂に二百卅一人五百卅五兩一分の
出資を得てこゝに厚生資金金庫の店開きとなつた、熱心が天に通じたのです。

出資金とは申しても現金で即座に出資するわけではない、出資金をそのまま出資者に預けて置い
て出資額に對し三十兩で一分の利率をつけその利息に相當する金額を毎年二期に徴收して救済資金
に當てたのであつた、この點が一寸變つてゐるし、こんな方法をとつたことが案外出資者の説得に
効果があつたのだらう、案するよりも生むは易く、更生金庫は思つたより簡單に出來上つてしまつ
た、もつとも出資額全部を現金ですぐ提供するといふ篤志の人のあつた場合は例外である「永續金
元帳」によると村々の出資状況は次の通りであつた。（住谷家蔵）

村名	人数	出資金總額	漆原	一三	十七兩	巢烏町	一一	十二兩
植野	一六	五十八兩	大久保	二九	四十四兩一分	内藤分	一〇	十三兩一分
高井	七	十五兩	上青梨子	一	五兩	大渡	二	二兩一分
川原島新田	五	廿兩	新田町	一一	六十二兩二分	小相木	二	一十五兩
八木原	九	卅一兩三分	栗島町	九	十九兩三分	古市	三	二兩一分
中村	一〇	十二兩二分	鍛冶町	七	十九兩三分	鳥羽	七	十五兩

上日高	六	十二兩二分	東國分	七	十八兩一分	西箱田	四	八兩
下日高	三	八兩三分	東明屋	九	卅三兩一分	東箱田	四	五兩
塚田	一三	廿兩二分	金數平	八	廿兩二分	西國分	四	五兩
引間	一六	七兩	中箱田	二	三兩	野馬塚	二	三兩

救済は

△分家を望んでも貧乏で分家出来ないもの △子供が大勢あつて生計困難なもの △出産費用 △屋根替の葺代 △馬を買ひたいもの △肥料を買ひたいもの △婚費費用

などに二兩から三兩を限度に無利息年賦返済で貸してやり、事情によつては貸しツばなしのものもあつた、この結果は非常に良好で野馬塚（元惣社）などでは一時は疲弊して全村倒産の危機に瀕してゐたがこの金庫のお蔭で立直つてしまつた、藩でも大變喜んで文政十一年には八百三兩の補助金を出し大いに奨励したのでその後村々の出資者も殖えて元金三千百四兩になり、二十六年も續き弘化五年三月つまり嘉永元年には住屋の經營から藩の直營に移り明治四年の廢藩までつと繼續したのである。

三十三ヶ町村の農民救済に一身を投じてこの「永續金」施設の完備に心身を勞したこの武兵衛翁が所もあらうに大利根に溺れて非業の最期を遂げるに至つては「世には神も佛もないものか」といひたくなる。時は天保十五年眞夏の陽炎に榛名もゆらぐ六月九日、用事で前橋へ出る途中、利根川大渡の渡しで翁の乗つた舟が顛覆し不慮の死を遂げた、享年六十八、悲報に領民擧げて慟哭したといふ。

附記 本前については資料提供の住谷修君と前橋市佐藤院太郎氏の御教示によるところ多い。

慕はれる上州良寛

國府の俳人金井岱路

群馬郡國府村の金井岱路は百五十餘年後の今でも依然として子供たちの心に宿つてゐるのである。

たいろうさまのお墓にお参りして墓石を撫でればお習字が上手になる

と子供達は岱路の墓に詣でては香華を手向けるのである「たいろうさまのお墓はどこだらう」と引間の中宿といふところでバスを降りて訊ねると「俺が教へてやらア」と近所の子供たちはわれ先きに立つて駆け出すのである、中宿の十字路から小學校へ行く道に折れて五六間、坂を下ると十王堂といふお堂が杉木立のなかにある、その右手に一區劃をなして村の共同墓地がある、その眞中に高さ四尺ほどの自然石の墓が苔むして立つてゐる「權律師隨意奉願覺位」とあり、裏面に

花に葉にちりの世と聳く御堂哉

の句が刻んである、村の子供達からは手習のお師匠さんと敬はれ、老人達からは「生き佛のやうな方」と慕はれながら一方にはまた門弟五百有餘人を數へたといふ俳諧の宗匠金井岱路の在りし日を偲びながら墓前に佇んでゐると深々とした感慨に浸つてくる。

岱路は國府村字引間上宿（昔は引間村）に生れた、宇右衛門善了といふ人の長男で宇善太篤雄、吉次郎、長兵衛と三人の弟があり、吉次郎と長兵衛の間に妹が一人あつたらしい、小さいときから出家になりたい／＼と願つてゐたやうだが長男でもあり母が許してくれなかつたらしい、しかし後

にはどうかしてお坊さんになつたことはその戒名によつても明かであり語り傳へられる「たいらうさま」もお坊さんとしての俗路である、生涯獨身であつたらしく金井の家は末弟の長兵衛が継ぎ、長松、妻藏と續いて妻藏で絶えてゐる、血筋をひいてゐる現存者では上宿でお百姓をしてゐる新作さん(五)一家がゐるが、これは俗路の父宇右衛門善了の弟の末孫なのである。

能筆であつたことは今でも墓石を撫でるとお習字が巧くなるといひ傳へられてゐることによつても想像される、非常に節儉家で、衣食住の冗費はつとめて省いてゐたといふ、しかし吝嗇家ではなかつたらしい、しみつたれ坊さんであつたら、さう村の人達からもてはやされるわけがない、俳句を江戸の白雄に學んだ、白雄は蕉風復興の陣頭に立つて安永、天明年間のわが俳壇に重きをなした人で、寛政三年九月五十三歳で歿してゐる、俗路は大順、大路、台路などともいつてゐた、寛政五年四月八日赤城山大洞湖畔赤城神社へ俳額を献納しようとして利根川の大渡(今の太渡橋附近)の渡船で氣の毒に乗つた船が顛覆して溺死してゐるが、晩年は殆ど豊秋村光雲寺に庵を建て、花鳥風月を友として俳諧の境地に靜かな日を送つてゐた、もつとも豊秋村には高弟の玉路といふ人がゐたのである。

玉路は同村湯ノ上(今の行幸田)の人で姓を伊藤といひ代々農業を營んでゐた家であるが、幼少から身體の弱い方で佛門に入り珍榮といつて今は焼失してないが、同村の日輪寺にゐた、同村に現在ゐる伊藤和平さんはその末流である、玉路が師の俗路を追慕して建てた句碑は豊秋村役場前と國府村妙見寺の境内にある、豊秋村のは

草の戸にあをきをかりのすだれかな

の一句を刻み妙見寺のは三角のやうな自然石で正面に芭蕉の句

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

右側に

わがこゝろ漂として

その日くをしむもよそに梅の宿

一の日庵俗路建之寛政五年癸丑四月八日

とあるが、寛政五年四月八日は俗路の逝くなつた日なので死後玉路が師の供養に建てたものであることはその筆蹟からみても明かである、臺石には

半田村、西國分村、新田、金尾村、稻荷臺村、觀音寺、三ツ屋村、後正間村、當村(引間) 俗路門弟凡五百有餘人

とある。

俗路の句は天明五年白雄自ら撰をして刊行した春秋稿の二卷がある(註) 遺墨は僅かに天明五乙巳二月臺路拜寫と奥書のある「和歌拔書」位のもの(國府村住谷修君所藏) これは單に昔の和歌を書き寫したものでこの外に上野の地誌、神社佛閣、史蹟名勝、産物などを叙述した「毛原狀」といふ紙數僅か十枚の小冊子がある、今残つてゐるのは何れも寫本である。

國分の住谷修君と妙見寺住職宮川順信氏、前橋の前圖書館長佐藤鏡太郎氏などがしきりと事蹟について調査したことがあつたが遺憾ながらつひにはつきりした資料を掴むことが出来なかつたのであるが「たいらうさま」は依然として今でも村の子供たちのなかに生きてゐる、次から次へと語り傳へて子供たちは「お習字の上手になれますやうに」とたいらうさまの墓石の前に額いてゐるのである。

(註) 春秋社發行、中興俳諧名家集下卷所載

山村暮鳥を想ふ

逆境を生抜いた愛國詩人

日本

日本、うつくしい國だ
 葦の葉つばの
 朝露がぼたりと
 おちてこぼれてひとしづく
 それが
 此の國となつたのだとでも言ひたいやうな日本
 大海のうへに浮いてゐる
 かあいらしい日本
 うつくしい日本
 小さな國だ
 小さいけれど
 その強さは
 鋼鐵のやうな精神である
 おう日本
 びちびちしてゐる魚のやうな國

勇敢な日本

古い日本

その霧深い中にとちこもつて
 山鳥の尾のながながしいゆめをみてゐたのも
 いまはもうむかしのことだ
 めをあげて
 そこに
 どんな世界をお前はみたか
 日本、日本
 お前のことをおもふと
 此の胸が一ぱいになる
 お前は希望にかゞやいてゐる
 そして眞剣だ
 だが日本よ
 お前の道はこれまでのやうに
 もうあんな平坦なものではあるまい
 お前はよるひる絶えず

強い日本

わたしらは此處で生れたんだ
 また此處で最後の息もひきとつて
 遠祖らと一しよになるんだ
 墳墓の地だ
 静かな國 日本
 小さな國 日本
 つよくあれ
 すこやかであれ
 奢るな
 日本よ、眞實であれ
 馬鹿にされるな

幸福な日本

この燃ゆる愛國の詩が誰の詩か知らない人が多いと思ふ。「東海の小島の磯の白妙にわれ泣き濡れて蟹とたはむる」と歌へばすぐに天才詩人石川啄木を想ふやうに、この愛國の詩「日本」を歌つてすぐにこれは山村暮鳥の詩だと想出せないやうでは上毛人の恥だと思ふ。

越後の風がまつすぐに關東平野へ吹きおろすところ——と暮鳥もその半面自傳の冒頭に書き出してゐる榛名山の麓群馬郡堤ヶ岡村が彼の故郷である、この地方に金持ちの頑固で知られた彌兵爺さんの孫として明治十七年一月十日に生れた木暮八九十が山村暮鳥である。

「父は婿であつた、母は泣いてばかりゐた、自分が姉さんとよんでゐた母の妹は眞赤な血嘔吐をはいて自分の四つの春に悶死した、自分にはおばあさんと呼ばねばならぬ人がかほる／＼幾人もあつた、大きな家は陰鬱でいつもごた／＼してゐた、他家のやうに自分の家では笑ひ聲一つ立てるものがなかつた」と自傳にあるやうに

彼の人生への發足は恵まれた環境ではなかつた。

幼少五、六歳の頃父が家出をしたので、彼は赤城山の黒檜岳神社の神官をしてゐる前橋市の叔父の下に預けられた、

この叔父は歌人としては素人の域を脱してゐたので詩歌に伸びる暮鳥の芽はこゝで育まれた。明治二十四年生家に歸つて小學校に通つたが頭は冴えてゐたらしく、尋常二年から三年をとび越えて四年に進み同二十八年に卒業した。

家庭はこの頃も暗かつたのか四月に[○]區の書記と文字通り流轉の生活であつた。



暮鳥とその家族

○は家を出て千葉縣の佐倉町にゐる父母を訪ねた、そこで漸く平和な日が巡つて來たやうだつた、その年の夏、成田見物にゆき百五十首の和歌をつくり、酒々井といふ古驛で土地の宗匠某を訪ね批判を乞ひ、賞められて一句を贈られたが、彼は氣に入らなかつたやうだ暮鳥十二歳の時である。しかしこの平和な日も長くは續かなかつた翌二十九年から三十一年にかけては彼の暗黒時代が始まり父母の下を離れ陸軍御用商人の小僧、活版職工、紙屋の少店員、ブリキ屋の職人、貿易商の少店員、鐵道保線

流轉の生活に病を得て悄然と郷里に歸つた時には父母も生家より數里隔つた榛名山麓で貧しい水呑百姓として働いてゐた、明治三十二年である。彼は年齢を三つ多く届けて、曾て自分が學んだ小學校に代用教員として奉職した、そして晝は教鞭をとり、夜は松山寺といふ寺に通ひ四書、五經、史記、左傳を誦んだが、日本外史を終る頃その寺の若い僧と争つてこゝに通ふのを止め、今度は英語を習ふため利根川の船橋を渡つて往復七里の夜道を前橋市北曲輪町の聖公會に通ひ牧師のチャペル氏について學んだ、この燃ゆるやうな向學心にわれ／＼は多くの示唆をうける。暮鳥はその頃の想ひ出を——チャペル氏は金曜日には説教をきかせてあとで住吉屋の饅頭をくれた、夜の遠道の空き腹へ饅頭はうれしかつたが、祈禱の時には耳を塞いでゐた……と正直に書いてゐる。

聖公會に通ふうちに宣教師のミス・ウォールと知合ひ同三十五年に彼女が青森に轉任したので語學交換の約束で小學校を辭職してこれに従つた、青森では何んの變哲もなく語學の勉強に没頭したやうである。

ミス・ウォールと語學交換の約束を果たした彼は彼女の盡力で翌三十六年に東京築地の聖三一神學校に入ることが出來た、學校では文學研究に走り、同年岩野泡鳴、前田林外、相馬御風等によつて發行された雑誌「百合」の社友となり、短歌の創作を始めた、詩人としての暮鳥の生長はこの邊からはつきりしてくる。三十七年日露戦争が起ると戦時補充兵として召集され滿洲の戦線に十一月餘奮闘し、三十九年二月中旬戦勝に沸く祖國に凱旋した、陣中でも

あたためし甕にいくさ語りして

古傷なづる雨の秋の夜

等「母の國」と題した多くの短歌をつくつてゐる。凱旋してから再び神學校に通ひ、蒲原有明を知

り短歌から長詩へと移つて前田夕暮、三木露風等と交つた。

詩作として初めて雑誌「文章世界」に發表されたのは「壁」の一篇で、報酬の原稿料を貰ふと餘ほど嬉しかつたと見えて小使の爺さんを二人も連れ銀座に行き天金で御馳走してゐる。

四十一年に神學校を卒業したが、文學へか宗教へかに迷ひ、淺間山に登つたりしたが、何のこともなく下山して、その年の夏は父母と暮し、その秋、秋田に赴任してキリスト教の傳導にたづさはつた。こゝに三ヶ月ばかりゐて横手に移つて數ヶ月、更に湯澤に轉じて半年餘、このごろ人見東明等の「自由詩社」に加はり従來使つてゐた木暮流星または馬村から山村暮鳥となつた。

精神的な苦惱時代に入つた山村暮鳥は湯澤で吹雪の御嶽山に登り山上で瞑想すること四十日、漸く或る境地を得て山を下つた、湯澤から仙臺に移つてキリスト教の傳道を續けること一年、そこで「La Bonne Chanson」その他のパンフレット詩集を世に送つた、文學的な活動はこの頃から激しくなつたが教會では先輩と意見を異にしたため家具藏書類を全部賣り拂ひ残り市中央を流れる廣瀬川に投げ込んで一枚の葉書に告別の挨拶を残し仙臺を去つて了つた、明治四十四年暮鳥二十八歳の時であつた。

仙臺を去つてからは土浦と東京に遊ぶこと五ヶ月、この間に多くの詩人や文學者と往來した、さらに水戸に六ヶ月を暮し太田に移つて一年二ヶ月餘を送つた太田に來てから雑誌「秀才文壇」の長詩の選者となり「早稻田文學」「新潮」「詩歌」「劇と詩」等に創作や翻譯を發表するやうになつた、だがこゝにも落着けなかつたらしく、さらに福島縣の平に移り、大正二年五月十日前橋時代に想思の仲であつた土田富士さんと結婚した、暮鳥三十歳、夫人は十九歳であつた。

平では鳥崎藤村の序文で詩集「三人の處女」を出した、翌年六月長女玲子が生まれ父となつた暮鳥のその頃は

文藝雑誌「風景」を創刊したり、雑誌「第三帝國」「詩歌」「秀才文壇」「創作」「早稻田文學」「アララギ」「新潮」「文章世界」等に寄稿したり、雑誌「國民文學」「新思想主義」その他の詩欄の選者となつて幾多の詩を生み、得意の時代をつくり出した、大正四年には長男聖一郎が生れたが早産のため生後四日で死亡した。

超えて五年の一月に詩集「聖三稜玻璃」を出版し五月にはパンフレット「プリズム」を發行したが、一年足らずで廢刊となつた、この頃から暮鳥の詩に對する惡評がさかんで、餘りに痛烈な惡評をうけてある日暮鳥は卒倒したことさへあつた。

大正七年の一月に平から水戸に移り住んだがこゝで二女千草が生れた、水戸では大關五郎、柳橋好雄、石川武、花岡謙二等を率ゐて雑誌「苦惱者」を出した、暮鳥は酒が好きで一介の酔ひどれとなることを恥としなかつたが、この酒のために咯血してその生活力を奪はれてしまつた、前途は暗澹たるものだつたがしかし彼は決してそれに屈しなかつた、強い意志と信念は彼を重體から救ひさらに多くの仕事を遺させた。

水戸から千葉縣の北條に移つたが、この年には「ドストエフスキー書簡集」や詩集「風は草木にささやいた」を發刊した、北條では十日餘も總一文も無い生活さへあつて、子供に菓子と與へる代りにお伽噺をして聞かせたことさへあつたやうである、大正八年には北條から茨城縣の大貫へ、さらに九年には再度福島縣の平へ轉じた、そこでは土の詩人吉野義也が開墾してゐるそばに自分の手で小さな家を建てたが、こゝも彼の安住の地ではなかつたらしく、最後に茨城縣磯濱に落着いた、大洗海岸の森つゞきで居ながらにして太平洋の海の見える小さいけれど陽當りの良い家で彼は漸く流轉の足をこゝに止めて童話集「チルチルミチル」「少年行」「萬物の世界」「地獄の門」「小さな世界」「お菓子の城」童話「鐵の靴」「聖フランシス」童話集「よしきり」詩集「棺の巢にて」「雲」小説「十字架」翻譯「ドストエフスキー」等を書いたがたま／＼好きは西瓜を喰べ過ぎて腸を悪くしたのが死期を早める結果となり同十三年十二月八日愛妻と愛兒に心を残しながら遂に四十一歳でその生涯を終つた。

暮鳥が生涯を終った磯濱の家から森一つ隔てた大洗海岸の子の日ヶ原に彼を偲ぶ暮鳥詩碑が十五年の五月に建てられた、家族は彼の歿後、未亡人富士さん(四七)長女玲子さん(三八)二女千草さん(三〇)が水戸市に現住してゐる。

以上暮鳥半面自傳、花岡謙二氏の暮鳥小傳特に暮鳥傳記研究中の沼田中學校教諭上野勇氏の研究を資料とした。

静 利 右 衛 門

大 日 堰 開 鑿 の 功 勞 者

「静利右衛門さんをこのまゝに埋れさせて置くのは面目なし」

と群馬郡中川村の人達が、水飢饉の夏などあちらこちらで水騒動の話など耳にすると、二百八十餘年の昔から今も變らず満々たる水を湛へて村の南部三十八町歩を灌漑する大日堰のほとりに佇みながら、開鑿の功勞者静利右衛門翁を追慕し感謝に喩を潤すのである。

翁の家は代々中川村大八木で庄屋を勤めてゐた、當主文雄氏(五三)は醫師で、現在は日本郵船會社に勤務して村にはゐないが、分家の同村村長静治平氏(六七)の話によると、

「静家の先祖は新田大炊助の一族だったといふ話を聞いてゐます大炊助は並榎の莊(高崎市並榎町)にゐたのださうですが、子供の頃からさう聞いてゐるだけで系圖とか古記録の類を見たわけではないのです」

といつてゐるが大炊助といへば治承四年に上野へ入國、この地方を平定した先驅者である、その一族とすると家格は相當なものであつたらう。

翁の歿後百五十年にして法橋御免の畫家静俊芳といふ人の出てゐるのを見ても代々英才が輩出してゐたことがうかがはれる、利右衛門翁の事蹟としては畢生の大事業たる大日堰と墓石があるだけで、詳細はわからぬが墓石の寛文三年七月二十三日歿とあるのと静村長の

「七十餘歳で歿くなつたと聞いてゐます」

といふことから推して文祿年間のお出生であつたらしい。大日堰用水堀のことはやはり墓石に

承應二年村用水金明曆元年成就

と刻んであるので徳川四代將軍家綱の時代であつたことは明かだ。

當時中川村大八木の南面濱尻、貝澤の水田數十町歩は西に隣接する六郷村下小鳥から流れてくる十二堰(今の第二長野堰)の末流を引込んで灌漑してゐたのであつたが、なにしろ隣村で引いた滓の、おこぼれ水を引用するのだから豊富な年はいゝが、殆ど毎夏のやうに水不足で惱まされてゐた、年々歳々この農民の難儀を目のあたり見てゐた利右衛門翁はこゝに悲壯な決意をもつて遂に起つた。中川村の北を流れる井野川上流(上郊村井出地先)を引用して十二堰と並行する長さ三町の用水を一本開鑿して十二堰の増水を圖つたらどうかと計畫してまづ高崎藩の認可をもとめた、徳川の覇業も四代に至り將軍家綱は幼年ではあつたが老中に人物多く、施政大いに振ひ、地方行政もあがつたときだから藩主安藤右京進も大賛成、藩としても援助しようとう翁を激勵したので翁も畢生の事業なりとまづ測量に着手した。

水路開鑿の成功、不成功は一にこの測量の如何に懸つてゐることは今も昔も變らない、測量術の幼稚な時代に果してどんな方法で測量を行つたか不明だが、その困難のほどは想像出来る。

工事に取り掛かつたのが承應二年、翁の六十歳の頃、明暦元年竣工するまで三年の間濱尻(中川村)貝澤(今は高崎市)兩村民は女子供まで出勤して勤勞奉仕した、思ひ設けぬ岩磐などに突當り怪我人も出来たらうし、随分と工事は手古摺つたらしい、この間翁は若し測量の誤算から、十二堰との合流地點で折角の新用水堀の流水が逆流するやうな結果になつたら

「切腹して水中に投じ、工事の責を負ひ、村民に謝罪する」と悲壯な覺悟で毎日工事を督勵してゐたといふ。

決死の大難工事であつたのだ。だからこの勞苦が酬いられ、見事用水堀が開通したときの翁の喜びはどんなであつたらう、と共に翁がいかに數學的に緻密な頭腦であつたかも親へる、翁はしかしこれは偏へに新用水堀の傍りに祀られてある大日堂の加護によるものであると用水も「大日堰」と命名し、新たに地藏尊一基を建立して感謝の報恩を捧げた、堂は現在跡方もなく、地藏尊だけが残つて、二百八十七年の昔から大日堰を守護してゐる。感慨深く今このほとりに立つて密生した篠竹に兩岸を蔽はれて鬱蒼と谷を思はせるやうな中を覗くと、昔のまゝの幅二間、深さ一丈餘の大日堰が奔流のやうな勢ひで流水の喜びをせまらぎ交はしてゐる。

「水の流れが早いから堰淺ひなどしくもいゝのです、何しろ魚が棲まないときへいはれてゐる位ですから」と靜村長は語つてゐる、功德万世不朽と村民に敬慕されつゝ翁は同村大八木融通寺の靜家墓地内に眠つてゐる、當時としては立派なものであつたらしいが高さ二尺程の風雨にさらされた「米里院關翁道鐵居士」の戒名も磨滅して漸く判讀出来る淋しい墓石である(大日堰は、勿論今でも中川村が管理し既得水利權を持つてゐる)

勤皇醫 飯島父子

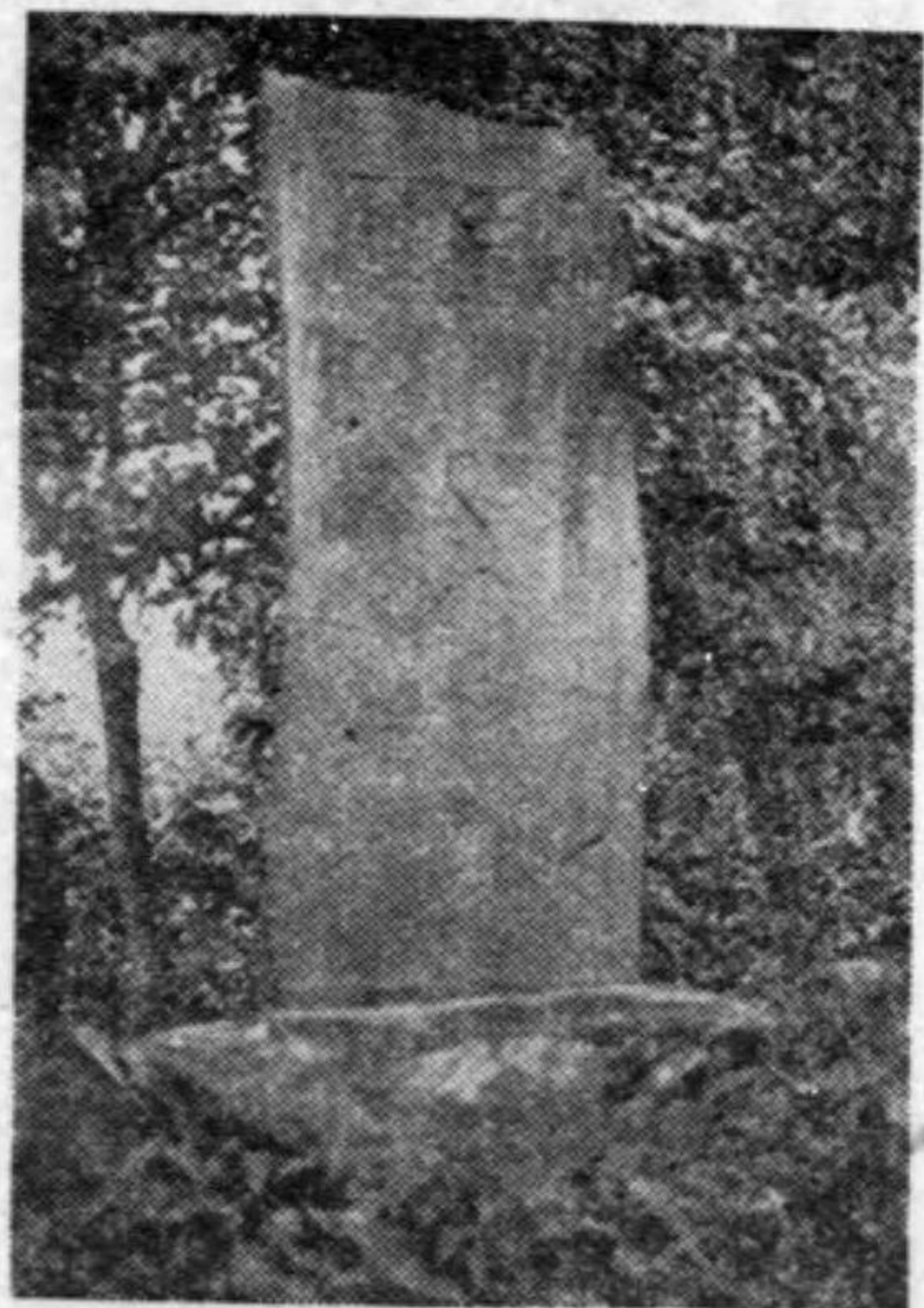
育英に捧げた烈々の血

父祖から承け繼いだ醫師の立場で名利を度外視し郷黨のために盡したお醫者さんは現在でも數多あるが、風雲急を告ぐる維新の夜明け前に生れて、眞に國家を思ふのあまり、幕政を攻撃し勤皇の志士と血盟し、退いては國難突破の英材教育のため私塾を起して郷黨の育英に盡瘁した飯島雪齋父子二代にわたる誠忠に至つては史上にもちよつと例がない。

享和元年の春、上州金古村足門(群馬郡金古町足門)の飯島家に飯島雪齋翁は呱呱の聲を擧げた、たつた十歳で四書五經等父親陽庵の藏書の大半を讀破して家人を驚嘆させたといふ神童振りだつた父祖傳來の醫師の業を繼いだのだが、因習に捉はれた漢方醫學に嫌たらず、悶々の日夜を過ごす日が續いたといはれるのだから當時早くも漢方醫として一家の見識を持つてゐたものだらう、その頃漸く海外との往來は頻繁となり、西洋文化もどしどし入つて來て世相百般は舊體制から新體制へ移行する變革期に直面、専門とする漢方醫學も抹殺されんとする情勢となつて青年雪齋は「さうだ江戸へ行かう、江戸へ出て新しい醫學を學ぼう!!」と決心した時に十八歳、落葉焚く秋の頃だつた。

父の諒解を得て笈を負ひ江戸に出た、まだ前髪立ちの雪齋は、しかし江戸だけでは満足しなかつた。更に京都、大阪、長崎まで足を伸ばして西洋醫學の奥義を究め、精力の餘るところ、なほ、經學

から書畫の道にまで手を出して後の大雪齋の根柢を培つたのである、かうして江戸を中心に各地を遊學する間高邁な理想と信念で説く翁の論説は當時の學者間に大きな反響を喚起し、博學多才の名聲は忽ちに昂まり、江戸の儒者の錚々青木錦城、同蘭城などと談論を交へたのもそのころであつた、當時外夷のわが國邊を窺ふこと再三に及んで、慧眼早くも彼等の意圖を見破つた翁は「國家の大亂は必ずこれから始まる」と語つたが、果して數年ならずして幾多流血の慘事は踵を接して惹起された。



飯島父子碑

◎守は翁に醫官たらんことを望んだが、名前に淡白な翁は素志を述べ固辭した爲に土岐侯は却つてますく翁を信用し苗字帯刀さへ許した、以來足門村にあつて村民の病苦を救ひ、貧困者には無料投藥するなど、村人から慈父の如く仰がれ如何なる難病でも先生の家をくぐれば全快する

雪齋は足掛け十四年振りて、天保二年故郷へ錦を飾つたが翁の學識に惚れこんだ沼田城主土岐伊豫◎といはれたほどだが、その傍ら「これからの農民は文盲ではいカン」と自宅の二階を私塾にあて、學問を奨勵、近所のお百姓さん百餘名に經學、蘭學、さては遊學時代長崎で求めた遠眼鏡の煤を拂つて天文學まで講義するといつた熱心ぶりである、いまだに残る當時の教科書「修身讀約説例」などその手垢から見ても如何に何遍も丹念に讀み返されたかがわかる、翁はかうして誠心誠意、村の育英に終生を捧げたのである。

飯島三宅は天保十年三月、雪齋翁の次男として生まれた、十三歳の時三宅は一幅に丹誠を凝らし

「西園雅集」と題した、雪齋これを見て「揆一郎(三宅の幼名)は恐ろしい」と吃驚した、けだしその文藻の豊かなことは全く天稟だつたのである、その才氣を父に買はれたのかまたは長男が夭逝したためか詳細はわからぬが、兎も角雪齋翁の後繼者として十七歳で上京、安政、萬延、文久の十年間、幕府の奥儒者島司直成の塾生となり、漢學一般を研修する一方、更に幕府の松平勤治郎、林長儒等に師事した、其間幕府の舊體制的な消極政策に一矢を放つたため勤皇の志士達とも血盟が出来、まさに皇國のため大いに爲すあらんとした矢先き、父雪齋翁の計に接したので熱血多感な三宅も遂に大望半はで歸郷の止むなきに至つたその胸中はいかばかりだつたらう、當時の詩がよく物語つてゐる。

流落崎岬三十年 胸中鬱々氣慨然 平生志節誰誰訴 半生若牢祇自憐
命似鴻毛方臥地 身垂虎口更呼天 赤心誓慾安皇祚 洗盡舊埃宿昔緣

歸郷後維新の大業はかつての盟友達が遂行し、明治の春は皇政復古に甦つた、すでに望みも達した三宅は家郷にあつて醫術に没頭するほか、父雪齋の遺志である飯島學校の子弟教育に餘生を傾け、明治二十三年十月三十日畏くも教育勅語を下賜せられたのである、近郷近在の老幼男女等しく其の徳を慕ひ、慶應三年幕府の奥儒者林長儒の撰文で雪齋、三宅父子の碑を建立した。
なほ當主飯島三宅氏も現在同町で醫師を開業してゐる。

五萬石騷動夜話

唐傘連判狀に見る農民魂

郷土史の研究に興味を持ちはじめ近頃しきりとあちこちの資料を漁つてゐる青年達が三四人、或る日顔を合はせて最近の收穫をあれこれと語り合つてゐたときのことである、一人がいかにも得意然としていつた。

「唐傘連判狀といふのを知つてゐるか」

「ほう、それはなんのことだね」

「傘のやうに圓形に連判したものサ」

そこで皆んな意外な顔をした、連判狀といへば忠臣蔵のお芝居にあるやうなものしか見たことのない連中だ、唐傘連判狀とはけだし垂涎ものなのだ。

「どこで見つけたんだ」

「連れて行けよ」

「高崎から一里ばかり西北の群馬郡六郷村上小塙のお百姓で小島伊之吉さんといふ人のところにある」

「ちやア早速行つてみよう、しかしその前に何故その家に傘連判狀があるのか、そのいはれ因縁を聞いて豫備知識を持つてからでも遅くはないだらう」

といふことになつた。

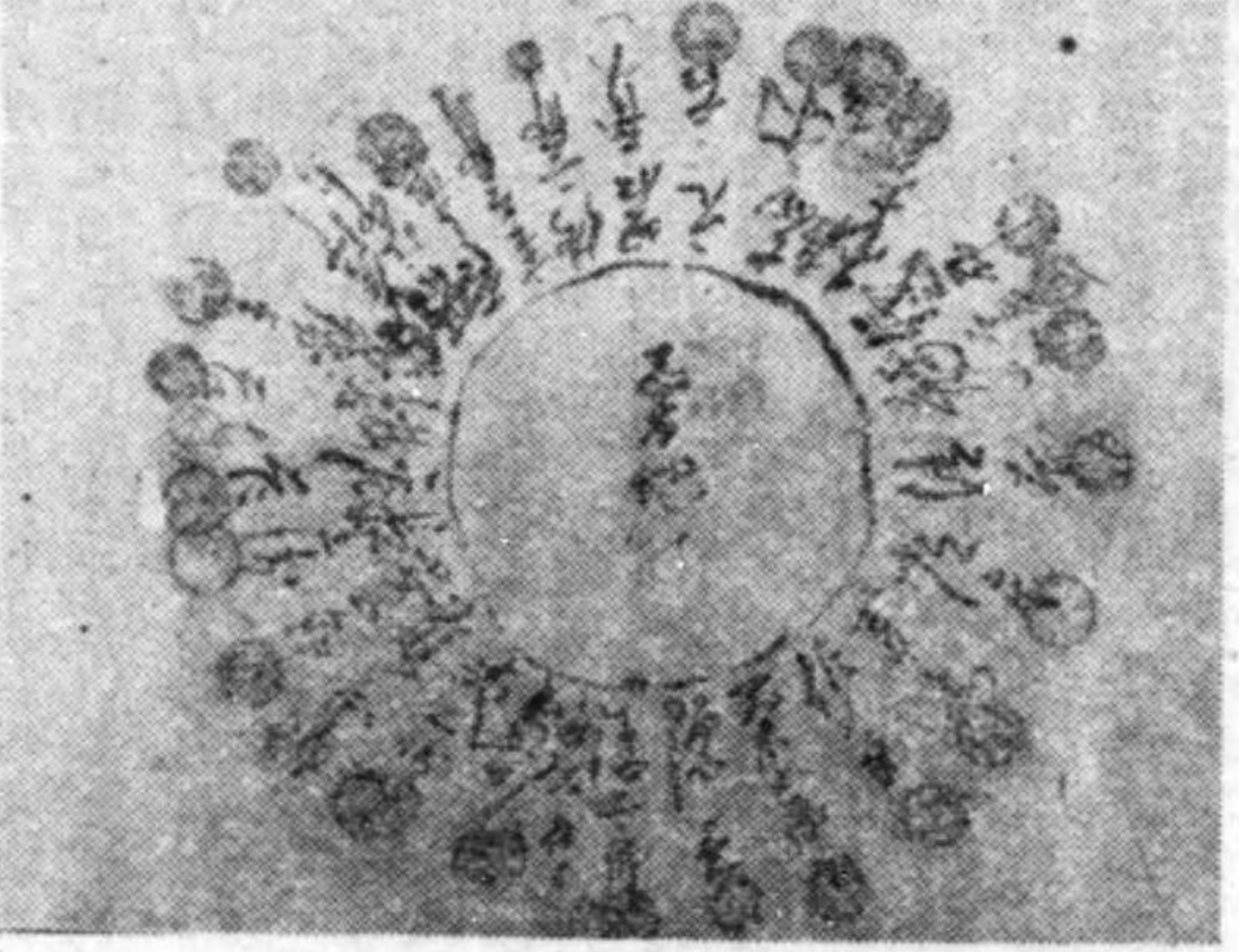
小島伊之吉さん(七)の祖父に文次郎といふ人があつた、上小塙村の舊家で農事改良に専心盡瘁し

村民の信望をあつめてゐた、武藝にも達し、觀世流の謡曲、遠州流の華道にも嗜みがあつたといふ、時は明治二年、文次郎四十五歳のときである、王政復古とはいつてもまだ實質的には封建政治

の延長であり、昔から「高崎領へ嫁に行かうか、裸體で荆棘を背負はうか」とまで俗謡に唄はれたくらゐ高崎藩の苛政振りには依然として續けられてゐた。

高崎藩は表高八萬二千石、内譯は城附領(片岡郡三ヶ村、群馬郡七十二ヶ村、那波郡一ヶ村、綠野郡二ヶ村)五万五千六十九石三斗九合、武州野火止領二千石、越後一の木戸領二万三千石、下總銚子領五千石

このうちで城附五萬石領内の群馬郡下四十五ヶ村、現在の高崎市佐野、飯塚、塚澤、田中の外六郷、といふのをかけ更に希望してもしなくても種籾を貸附けこれに年三割の高利をつけたその他大豆十四俵、麥十



(藏氏吉之伊島小) 狀判連の動騷石万五

● 中川、大類、京ヶ島村地方が特に苛酷で、同じ領内にゐて年貢米の取立に厚薄輕重の差別があつた。

苛斂誅求の一例として上小塙村の例を挙げると同村は

- △田地卅六町七反六畝十八歩
- △畑廿一町七反三畝十七歩△
- 屋敷(宅地)一町五反一畝三歩
- で戸數五二、人口三百一(明治二年當時)で總石高五百二十一石一斗八升四合、この年貢總納高(今でいふ調定税額)二百九十三石六斗八升四合であつた、
- 徴税は本税ともいふべき上納元高の外附加税ともいふべき口米

ところへ明治二年の凶作である春は暴風雨で荒され、夏は霖雨続きで稲作は不熟、一反歩二三俵もどうかと思はれる、農民達は暗鬱な中にも前年東山道鎮撫總督の農商工布告にあつた

年來苛政に苦罷在其外子細有之輩は無遠慮本陣へ可訴出云々

のことを思ひ出し、一つ減納嘆願運動を起さうといふ機運が漲つて來た、文次郎はもうちつとしてゐられなかつた、四十五ヶ村一體となつてやらなければならぬと村々を説き廻るうち、同じやうに南部方面で訴願運動を計畫してゐた柴崎村(大類村柴崎)高井喜三郎、中居村(高崎市佐野)佐藤三喜造の兩名と意氣投合し、よし身を捨てゝも苛政に喘ぐ一萬五千農民のために一肌ぬがうではないかと云ふことになつた。

この年九月二日上中居村(高崎市佐野)正觀寺に四十五ヶ村の有志が最初の會合をした、今なほ語り傳へられる「五萬石騒動」の序幕である、減納貫徹を期して領内四十五ヶ村一丸となつて嘆願運動を起さうと衆議一決して大總代に選ばれたのが小島文次郎と佐藤三喜造、高井喜三郎の都合三名であつた、佐藤三喜造は五十一歳、身長六尺二寸體重二十四貫恰幅といひ、力量といひ、近隣に及ぶものなしといはれてゐた、職人十數名を使用して染物業を営みかたはら農業をやつてゐた、高井三喜郎も聞えた剛膽もので學識もあり、多少武藝の嗜みもあつた、このとき四十一歳、運動は先づ各村々の總代から三名の大總代に「頼み書」(委任状)が出され、村の總代は村々の小者(名主以下の百姓達)の調印を纏めた、こゝから傘連判状が生れたのである、連判状は初筆といつて初めの方に署名すると後で主謀者と睨まれる危険があるので、どこからはじまりどこで終つたかわからないやうに圓環狀に書き連ねようといふことになつて、この珍連判状が出来た、小島文次郎の發案であつ

たと傳へられてゐるが眞偽のほどはわからない。

十月十七日箕笠姿の農民四千人が高崎城下へ押寄せ門訴したのを最高潮としてこの減納嘆願運動は一年だけの減納(高崎藩の減收十六萬兩)には成功したが農民塗炭の苦しみは依然として續けられ明治四年七月廢藩置縣が斷行され、地方行政が名實ともに中央政府の手に歸するまでは絶えなかつた、この間に最初捕へられた大總代佐藤、高井の兩名が騒動の翌年二月四日高崎無縁堂で打首になり、次いで小島文次郎も九月七日同じところで斬首になつたことは痛憤遣る方ないものがあるが身を賭して五萬石領一萬五千農民を壓制下から解放しようとした犠牲的精神は七十一年の今日われわれの深く欣慕するところであり、義民の誇りは讃へられなければならない。

(附記) 思ひ出の傘連判を所藏してゐる伊之吉老は義民文次郎の孫、なほ健在である、心なき獄吏の刃に斃れた小島文次郎の墓は上小墻大森院の境内にある、

辭世 人のため草葉の露と消ゆれども名を後の世に残すうれしさ

佐藤三喜造の墓は高崎市佐野普門寺にあり、同市赤坂町寺田家具店の老母とくさん(七三)がその孫にあたる。

辭世 望なき身は今日を限り散りぬるも七度生れかなへてやみむ

大類村柴崎の高井福重さん(五〇)の家から南へ一町たらずの光明寺墓地に福重さんの祖父、義民喜三郎の墓はある。

辭世 吾人の爲めともなれと身を捨てて今いけにえになりし嬉しさ

儒者 林 鶴 梁

村上喜劍碑文に面目躍る

昭和十四年六月のこと、東京芝高輪の泉岳寺境内へ豊島區堀之内町四五中西豪興(ハ)といふ人が赤穂義士でお馴染みの村上喜劍の碑を建てた。碑は臺石とも高さ九尺四寸、幅三尺七寸の立派な仙臺石で喜劍の義烈を讃へて最後に「江戸林長儒撰」とある、これが後の林鶴梁で、幕末の有名な儒者、しかも群馬郡京ヶ島村の出身である。

鶴梁は文化三年八月京ヶ島村萩原(昔は萩原村)の佐川力藏といふ小農の家に生れた、子供の頃から學問が好きで玉村町の井田芹坪といふ人について勉強した。百姓の子が玉村まで學問のために通ふなどといふことは其の頃では並大抵のものではなかつたのであるが、師匠の芹坪が「見どころがある」と惚れ込んでゐたし、父親もまた好きな道をやる方がよからうとわが子を理解してゐたのであつた。一説にはまた箸にも棒にもかゝらないきかん坊で家でも持て餘してゐたのを芹坪先生が見どころがあると引取つて面倒をみてくれたのだともいはれる。家計は豊かな方ではなかつたので芹坪先生の方でいろ／＼物質的にも世話をしてくれたらしく、後に鶴梁が江戸へ出てからも隨分と郷里の師匠に厄介をかけてゐる。

萩原村の升藏といふ人が江戸へ出てきて鶴梁を訪ね

「國を出るとき太織一疋かついで来たんだが江戸でどこか買つてくれるとこはなかんべえか」と持込んだときなど一つ返事で「よし俺がみんな買つてやる」と買取つてはくれたものゝ金は今手許にない。

「金は玉村の芹坪先生からもらつてくれ」

と手紙を持たせて玉村へ廻してやつた、すると師匠も別段悪い顔もせずにく／＼しながらわが子の不始末でも片づけるやうに拂つてくれたといふ話なども残つてゐるくらゐだから二人の關係は師弟以上の美ましい間柄であつた。

二十五、六歳の頃、鶴梁は江戸へ出て塾を開いた。暮し向きは樂ではなかつたらしい。村上喜劍の碑を建てた中西豪興の亡父伯基が烈士の世人に顧みられないのを痛惜して碑を建てようと鶴梁の文才を見込んで依頼したのもこの頃で、面白い話がある。

「費金若干をもたらし來りて文を余に徴す、余時に年方きに廿七、八、未だかつて金石文字を作らず、固く辭すと撰文にこのときのことを書いてゐる。ところが伯基といふ人もなかなか變つてゐた人でいひ出したらきかない、それぢやアいつでもいゝ、あんたが書けるやうになつたら書いて貰ひませう、と金を置いて歸つてしまつた。

「時に余貧甚だし、伯基すなはちその金を留めて余をして自ら救はしむ」

と當時を感謝してゐる。撰文はその後二十年も経つてから漸く約束を果したもので碑の建設は更に伯基歿後六十九年目で實現したわけである。

三十歳のころ鶴梁は「林」といふ御家人の株を買つて林鐵藏と名乗つた。

徳川時代には目附以下のものを御家人といつた、これに譜代と抱席の二種があつて賣買の出来るもの、つまり金さへ出せば誰でも武士の家を買へたのは抱席の方であつた。

江戸幕府も末になるとこんな馬鹿げたことも公然と行はれてゐた、林家を買つて(勿論このときも

二九六
芹坪先生が金を出した。林鐵藏となつたが學問のあるのと磊落な氣性が見込まれて嘉永六年には静岡縣中泉の代官になつた。

中泉在勤中安政元年に例の大地震と海嘯があつた。この頃は多少家計方面にも餘裕があつたらしく「私金百三十兩」を投げ出したといはれてゐるから恐らく全財産であつたらう。そのほか地方の富豪から義捐金を募つて罹災民の救済に奔走する一方麥や稗などの買出しに自ら飛び歩いたといはれてゐる。だから同地方では今でもこのときの鶴梁の業績を讃へその徳を慕つてゐる。中泉の代官から後に羽前の國幸生の銅の鑛山へ奉行として轉じ、こゝでも廢坑を復活させたりして相當功績を樹てた。

明治維新の頃官を捨て前橋へ來たことがあつた、前橋藩の松平直克侯が幾度となく使者を立て、藩に招聘しようとしたが逃げ廻つて斷り、東京へ出て麻布で塾を開いて庭内に百餘本の梅樹を植ゑ、花香月影のなかに悠々餘生を終り明治十一年一月十六日歿した、享年七十三、赤坂溜池の澄泉寺墓地に眠る。

遺著に藤田東湖が題字を書いてゐる「鶴梁文鈔」十卷とその「續篇」上下二卷がある、これ等は使用印や遺愛の書畫などともに境町郵便局長中島昌次郎氏が所藏してゐる。

追記 鶴梁の長男國太郎は若くして歿したがその子奎太が後を繼ぎ、その孫だとかいふ人が四、五年前まで前橋市石川町のあたりに居住してゐたが最近消息を聞かない（前橋、豊國覺堂老談、なほ鶴梁の二男剛三郎（幸三郎だといふ人もある）は羽倉簡堂の養子となつたが慶應四年五月、雲井龍雄等と戸倉口の戦（利根郡片品村戸倉）に官軍と戦つて死んだ。

佐々木愚山のこと

久留馬村の奇人漢學者

明治初年、澁川の堀口藍園（文政元年生れ、明治二十四年歿、七十四歳）高崎の市川左近（文化十年生れ、明治二十三年歿、七十八歳）と並び稱せられた一人に群馬郡久留馬村本郷の佐々木愚山がある、當時群馬郡西部から碓氷、北甘樂郡にかけて名聲を馳せてゐたといふが、どういふものか近年は殆ど忘れられてしまつてゐる、肝心の久留馬村の人達ですら二、三の老人を除いては

「なんでも愚山先生はえらい變り者だつたさうだ」

といふ程度しか愚山については知つてゐないのである。

佐々木愚山が當時いかに有名であつたかは、明治五年佐波郡島村の養蠶長者田島彌平翁が刊行した「養蠶新論」に跋文を寄せてゐる一事でもわかる、この「養蠶新論」にはそのころ東京で一流の名家といはれた。

大槻盤溪、川田甕江、小野湖山、阪谷朗庵、信夫恕軒、西郷隆盛、横山正邵

などといふ人達が題、序、跋の筆をとつてゐるが上州の人では金井烏洲の弟研香（毛山）が畫と小詩を題し、愚山が「利根河上の隠士、愚山佐々木溥撰」と漢文の跋を寄せてゐるだけである、このことだけでも愚山の眞價がたゞに西上州のみにとゞまらず、かなり遠隔の地にまで聞えてゐたこと

が想像されるのである。

ではこの愚山とはどんな人であつたか、まづ順序として出身地のことであるが、生前その郷里や閱歴については絶対に誰にも語つたことがないといふので門下生だつた人ですら未だに知らない、ただ奥州の出だといふこと、野州足利學校にゐたことがある、といふことだけは機嫌のいゝとき、それも一、二度話したのを聞いた者があつたといふ程度で詳かでない、今、同村本郷地内の村社本郷神社の境内にある明治四十年八月、文部大臣牧野伸顯題額、貴族院議員男爵揖取素彦（明治七



愚山翁の墓

〇年から同十七年三月までの群馬縣令）撰とある愚山翁の碑（實際の建碑は大正十二年四月）には
「翁諱は博（愚山自身）の書いたものを見ると博と稱してゐる）字は子淵、族は佐々木氏、愚山と號す、別に十二峰小隱の號あり、考諱

は謙、談齋と號す、經史及び和歌を以て徒に授く、石巻の人なり（原漢文）と宮城縣石巻に決めてしまつてゐる、ところがまたなかには仙臺の人であつたといふ者もある、何れが眞ともいつはりとも「生前絶対に語らなかつた」といふのだから詳細を知つてゐる人のある筈がないのである。

明治二十九年九月十四日七十四歳で歿したといふから文政六年の生れであつた、久留馬村本郷の東といふところに居を（今は跡方もない）決めるやうになつたのはいつの頃からかわからないが、こゝから安中、七日市を往復して兩藩の士に經書、兵書を講義してゐた、大體これが明治二、三年の頃までであつた。

愚山の薰陶を受けた一人で今は故人となつたが碓氷郡岩野谷村出身中島信虎氏（慶應二年生れ、昭和十二年十二月歿、七十二歳、東京高師、文理大の教授であつた）が昭和五年の一月「上毛及上毛人」に寄せた一文「佐々木愚山先生」には

「先生の談論に徴するに先生は漢學の造詣深きのみならず國典にも精通し兼ねて佛典に及びたるやに想はる、先生と經學は朱子派とか陽明とか古學とか折衷派といふものに拘泥せず自家独自の見解ありしが如し、先生の國體説及び祭政一致論は山崎闇齋の流を汲みたるものに似たり、さればにや先生は漢學者なるに（小生の記憶するところにては）教導職として權少講義に甘んじ神道の講義をなされたり、先生は西洋のことにつきては漢文または和文にて書きたるものは大抵讀破せられたるが如し、近世の政法につきては西洋の風俗につきては理解を有せられたるが如し」

と博學識見の一面を傳へてゐる。晩年の愚山は縣神道事務局分局講師擔任、權少講義といふ肩書で同村にあつた同郡相馬村廣馬場の黒髮神社分社に奉仕してゐた、中島氏もまた

「先生は狷介不羈の人、俗物と相容れざること論ずるを待たず、因て偏に奇人をもつて遇さる」といつてゐる。

どういふところが奇人であつたかといふと門人の一人であつた同村本郷の島田倉吉老（七）が話をしてくれた。

「先生はどんなものでも絶対に絹もの以外は着なかつた、體軀堂々としてなかく立派な風采だつた、私はよく先生のお供を仰せつかつて、あちらこちらと歩き廻りましたが決して先生はお供なしでは外出しなかつた、門人の家など訪問しても玄關で聲をかけることはなくエヘンと咳拂ひして、なかから戸を開けるのを待つて入り、上ると案内も待たず奥へ行つて床の間を背に坐つたものです、どんなときでもどんなに時間が長びかると膝を崩すやうなことはなく行儀作法のやかましい人だつた、買ひものをしても財布ぐるみそこへ投げ出して自分でお金の勘定をすることはなく、私達は今でも先生は錢勘定を知らなかつたのではないかと思つてゐる、或は知つてゐても知らぬ風をしてゐたのかもしれない、私は十四、五歳の頃から四、五年も先生のお供をして歩いたが一度も先生から講義を受けない、素讀ばかりさせといて先生は隣の部屋に寝轉んでゐるのだがそれで歩いて私達がちよつとでも間違ふと叱られた、しまひには私も一體いつになつたら講義してくれるのかわからないので逃げて來ちまひました、こんな風であつたから先生には深く師事したといふものが無い、そんな點で先生は随分損をしてをり歿後すつかり埋もれた人になつてしまつたのでせう。」

これだけのことでは奇人とはいへないが、純朴な村民にはこんなことも風變りとして映じたことであらう。

同村高濱のお百姓さん須藤萬平さん(六〇)は

「私が九つの頃でしたが私の父が和歌など好きだつたし先生もよく私どもへ遊びに來たものでした、お出になると二、三時間は話し込んでゐたが、よく頼まれて私は先生の使ひ走りをさせられました、お使ひをするといふ子だなといつて五厘錢を紙に包んでくれた、先生は金勘定を知らなかつたといふが、お使ひの駄賃には五厘と決めてゐて五厘くれたところを見ると全然金勘定も出來なかつた人とは思はれない、たゞその五厘を貰ふにも、お行儀よく姿勢もちゃんとしてゐないといふことがなかつた。」

と語つてゐた、著書もいくつあつたらしいといふ者もあるが今はなにも残つてゐないのでどんなものであつたか不明、遺墨としての詩書、短冊の類もどういふものか村内でも所藏してゐる家は無い、故中島信虎氏はやはり「佐々木愚山先生」の稿で書についてかう書いてゐる。

「先生の書は儒者として一種の風格を具ふ、但氣分のよき時と然らざる時により成績雲泥の差あり、その佳なるものに至つては飄逸遒勁毫も俗氣を留めず」

と、こゝにも愚山の風格が偲ばれる。

愚山の夫人ツルさん(明治十七年二月一日歿、五十五歳)は土地の人ではなかつたといふが、島田倉吉老の話によると、先生の立派な風采に似合はず不器量な人で、お百姓のおかみさんといふ感じの人であつたといふ、二男、四女あり、長男穀堂は醫師になり、澁川町に居住したが醫師になることに父の愚山は大反對で親子大喧嘩の末別れてしまつたといふ、穀堂の孫に當る一夫氏が今では澁川町川原に小兒科醫を開業してゐる、二男の左原太は父に劣らぬ漢學者であつたといふが、感ずるところあつてか吾妻郡嬬戀村に移住してお百姓になつてしまひ、同地で歿し、今は同村今井に未亡人つまさん(六)がその子とゐる、長女サダは久留馬村高濱の農廣木某に嫁した、同地方の文藝雜誌「山と川」を主宰してゐる同村の外所芳得君(三)外所はサダの娘くこの嫁に來た家はその孫、つまり愚山の曾孫に當り同村に現住してゐるただ一人の系類である。四女トヨ子は男まさりの娘で學問も出來、薙刀の達人であつたといふが二十一歳で明治十五年に早逝したが「なか／＼しつかり者であつた」と老人達は今でも思ひ出話のなかで惜しんでゐる。眞ん中の二人の娘さんについては「どこか東京の方へ嫁に行つたといふが」とその後の消息については誰も知らない、愚山と夫人ツル、長女サダ、四女トヨ子の墓は同村本郷の俗にシギアゲと呼んでゐる小高い畑地の端にある。

本郷神社の「愚山翁碑」は門人の故先代木暮武太夫(木暮代議士の嚴父)や前記島田倉吉老など三十六名が師の高風を慕つて建てたもので僅かに愚山をしのぶ唯一の資料となつてゐる。

愚山の子左原太

蠶種改良の先覺者

佐々木左原太は群馬郡久留馬村の漢學者佐々木愚山の二男で安政五年に生れた。幼少から父について學び、後に北甘樂郡の國學者新井守村翁に師事した、愚山は長男の穀堂が父の意に背いて學者にならず醫者になつてしまひ勘當騒ぎまでした擧句、澁川で醫院を開業してしまつたので、あとはもう左原太一人にのぞみをかけてゐた、左原太もまた「父に劣らず」といはれただけに守村門下の逸材だつた。詩書の揮毫など愚山の書以上に評價され、あるときなど愚山自身「これほどのものを書くやうになつたか」と老眼に涙をたゝへて喜んだこともあつたといふ。

明治十五、六年頃であつたらう、左原太は父のもとを離れて北甘樂郡富岡町の曾木に私塾都文館を開いた、父も大變喜んでくれたし、青年左原太の希望と抱負もまた非常なものであつた。熱意溢れる左原太の講義は、皇國道を説いて烈々、聴くものを感動させずには措かなかつたが、困つたことに時代は洋風心酔、國粹破壊の思潮狂亂の時代であつた、徒らに新らしきを求めて古きを顧みず、眞を捨て、虚を追ひ、滔々として疫病のやうに地方へ押し寄せてきて青少年を蝕んだ、さすがに左原太も喰ひ止める術がなかつた。

今どきこんな古臭い講義が聴いてゐられるかと講義の妨害をする悪戯者のある間はまだしも、しまひには一人減り、二人減りして都文館は淋れてしまつ

て、たうとう閉鎖しなければならなくなつた。

時代の過渡期に、慘めに打ちのめされた左原太は、一時は茫然としてゐたがやがて受難を乗り越えて起つた、彼はしきりと農業書を涉獵した、左原太の新抱負は、農業開拓者の養成であつた。荒野を開墾しつゝ晴耕雨讀する精神的な人物を鍊成し、新日本の海外飛躍に備へようといふのである、今なら誰も怪しむ者のない鉄の戦士、開拓民の訓練所も當時はまだ一笑に附され

「彼奴のやること

は時勢遅れだ」

と誰も相手にして

くれなかつた。協

力者を得られず、

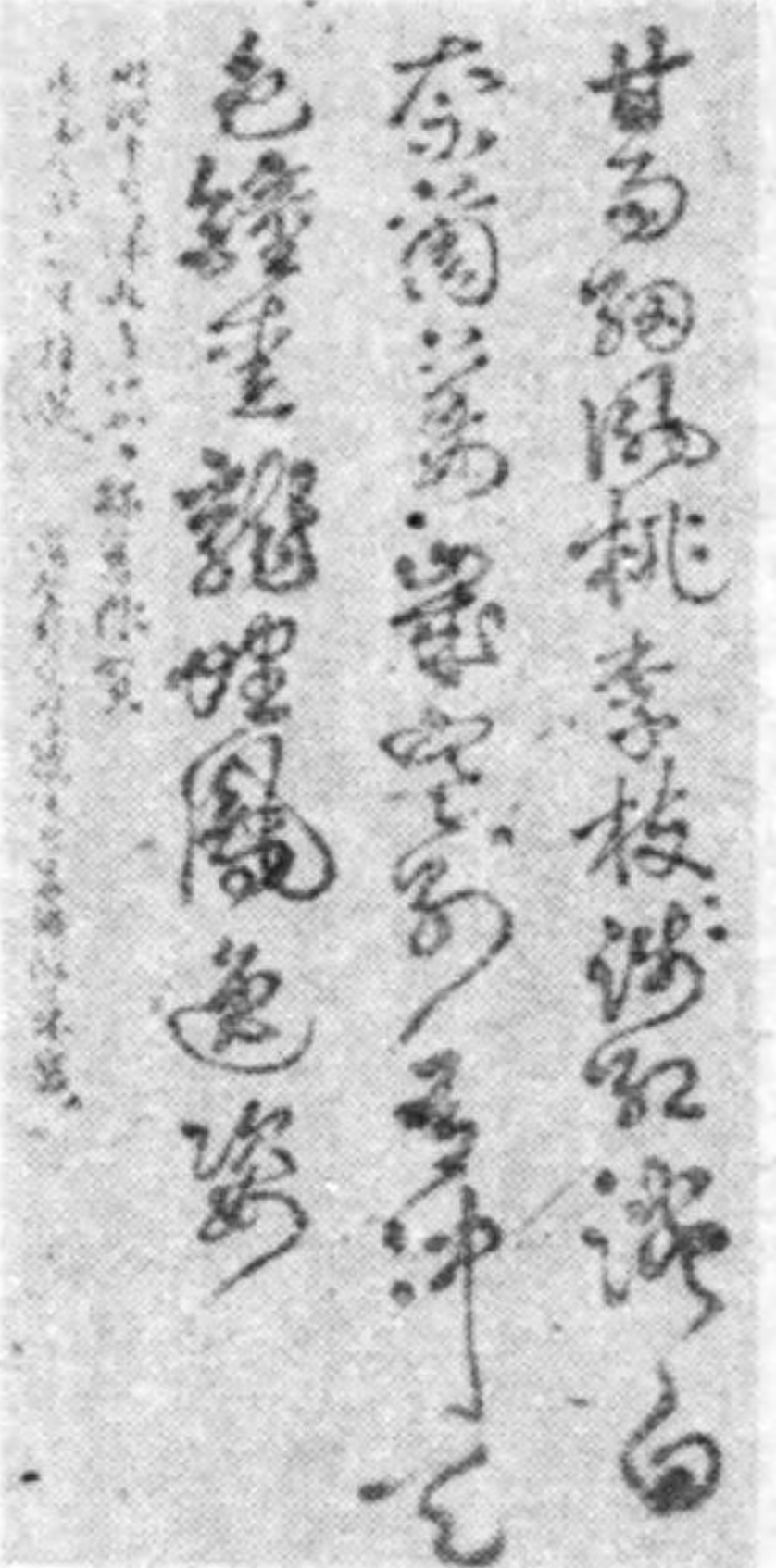
さればといつて獨

力でやるには金が

なかつた、事實。

小學校へ訓導として奉職していつた。

しかし、左原太は決して失望してはゐなかつた、先ごろ農業經營の研究に没頭してゐたとき彼は一つの疑問を持つた、それは當時既に養蠶國として喧傳されてゐた本縣が蠶種方面では春蠶種の製造はかなりいゝものが出来てゐながら、秋蠶種の製造が出来ないといふ事實であつた、製造出来ないのでなくて製造しても春蠶種のやうに良種のもので得られないため、やがてはこれを製造しよう



左原太の遺墨 (高崎吉永得藏氏藏)

◎ そのころの左原太には一錢の蓄へもなく、その日の糧に追はれてゐる有様だつた、間もなく夜逃げ同様に富岡町を去つて吾妻郡嬭戀村の三原

といふものがなくなつてしまつたのである、従つて飼育方面も他縣から生種を購入して來たごく一部の者が掃立をする程度であつた、この事實を眼の前にした左原太はこれをこのまゝにして置くことは惜しいと思つた、開港以來生種はどん／＼海外に輸出されてゐるし、蠶絲業は今後日本産業界に重要な部面を占めようとしてゐるのだ。蠶絲國と謳はれる本縣で秋蠶種の製造が出来ないことは蠶種業者の恥辱だ、よし俺がやる、かうして左原太はまた新しい希望に胸躍らせたのである。

當時はまだ蠶業に關する書物や研究書がふんだんにあつたわけではない、何から何まで目で見て足で歩いて調べなければならなかつた、教職の餘暇を見てはひたすら左原太はこのことに没頭した、さうして苦心の結果氣候風土の關係が最も重大であることを知つた。その後は赤城、榛名の山々から多野、甘樂、碓氷、利根郡下の高原地帯を歩いて適地を探し廻つたが、桑樹に適してをれば氣温が高過ぎたし、氣温が低ければ湿度が高かつたりしてなか／＼恰好な土地が見當らなかつた。ところがあるときふとしたことから、直ぐ目と鼻の先の白根山麓に好適地があつた、仙入と呼ばれてゐたところで、やはり孀戀村字今井の小字である。仙入といふ名の如く、その頃の仙入は同じ村のなかでも誰一人足を踏み入れた者もないといふ千古未開の荒野だつたのである。左原太は狂喜してこれこそ原蠶種製造の適地だと、その日のうちに學校へ辭表を出して山へ飛込んでいつた、明治二十五年四月、當時三十六歳。

先づ最初に寝起きするだけの掘立小屋が建てられ、次いで開墾がはじまつた、村では氣狂扱ひして誰も相手にしなかつた。開墾が終つて植附が済むと、いよいよ蠶種製造にとりかゝつた、幾度か失敗した、しかし左原太はへこたれなかつた、失敗を足場としてまた續けた。かうして辛酸数年の後、たうとう秋蠶種の製造に成功したのである。縣農事試験場(當時はまだ蠶業試験場はなかつた)で試験した結果は當時良種といはれてゐた長

野縣や山梨縣のものより遙かに優秀だと折紙がつけられ、左原太の吾妻産秋蠶種は一躍有名になり、左原太を笑つてゐた人達は、今は教へを受けに來た。こゝで自信を得た左原太は次々に蠶種の改良を發表して蠶業界に貢献した。冷蔵庫のない當時に風穴蠶種貯藏所を設置して貯藏法を講じたのもこの頃であつた。

風穴貯藏所は三階建てで、二階が地下に没してゐて遠く離れた谷川のほとりから隧道が掘つて來てあり、谷の冷い空氣がこの隧道を通過してこの一、二階を通り抜けて外へ出る仕掛けになつてゐた。縣農試でもこの工夫を激稱して「孀戀風穴」と呼んだくらゐだつた。

一人の有名人が出ると悪評を捏造して何かとケチをつけようとする人達の現れるのは今も昔も變りない、左原太の名聲がたかまると共に身邊には常に中傷が絶えなかつた、このためどのくらゐ悩まされたかしのれない。が左原太は富岡時代から、もうさうしたことはない慣れてゐるので、眞正面から青筋たてこの中傷に抗ふ氣はなかつた、しかし四十三年四月二十二日夜暴漢に火をつけられて住宅は勿論、風穴蠶種貯藏所などが灰燼に歸したときには全く痛手だつた。しかもその後復興間もなくの家が再び放火に遭つて焼失したといふに至つては同情にたへない、富岡時代の苦難を経て更に吾妻で災禍を蒙つてゐるのである、まことに左原太の生涯こそ荆の一生であつた、踏み越え乗り切つてもまた襲つてくる災厄は人間一生の試鍊といふにはあまりにも執拗であつた、とはいへ躓きつゝも立上つて苦難と戦ひながら縣下の蠶種業發展に礎石となつた數々の功績を残して來た左原太の姿には眞に貴いものがあるではないか。

大正十五年九月二十一日夜の八時、左原太は戦ひ疲れて六十八歳を一期に病歿した。今井の字石津、萬座温泉への登り口、觀音堂のある墓地に葬つた、今仙入には未亡人となつたつまさん(大)と四男の武夫君がをり、長男孝麿氏(三九)は中之條農林を出たが美術方面に轉換して畫工となり、高崎

市末廣町二番地にゐる、今事變の勃發當初には一等兵で應召した。次男の忠夫君もまた上等兵で聖戦に矢ヶ崎部隊で参加戦地で病んで今東京府下清瀬村の傷痍軍人療養所で再起の日を待ち侘びつゝ療養を続けながら病床のつれづれに「父左原太の想ひ出」を執筆してゐる。この外三男勇君(三)五男文夫君(五)があり、女三人のうちとよ子さん(三)は高崎市龍見町九四吉永得藏氏に嫁し次のまさ子さん(九)は嬬戀村廬生田の下谷民治氏に嫁した。

つまさんは後妻だった、先妻との間に出来た女の子はるのさんは吾妻郡高山村尻高山田増次郎氏に嫁したが一昨年五十六で病歿、なほつまさんの長女さとさん(四六)は仙入の千島義昌氏に嫁してゐる。

佛畫の神宮守満

並榎八景の繪卷物に偲ぶ

高崎市外上並榎、信越線烏川鐵橋に面したところに天台宗新比叡山護國寺がある、この寺は天台宗總本山比叡山の直末であるところから、本山の近江八景にならつて並榎八景を作り、新比叡山の名にふさはしい風致を作つたものである、即ち筏場の夕照、唐崎の夜雨、新比叡山の晚鐘、愛宕の晴嵐、片岡の秋月、烏川の漁舟、稻荷山の暮雪、雁田の落雁がこれである。文化元年十一月のこと護國寺の住僧一元上人慈縁和尚は高崎城下を初め近在の風雅人を同寺に集めて並榎八景に因む詩歌の

會を催し、その一景づゝに得意とする詩歌各一首を寄せて繪卷物一軸を作つた、この繪卷物は現在同寺の寺寶となつてゐるがこの繪卷物に彩管を揮つた畫人が群馬郡久留馬村本郷の農家の二つた、群馬郡久留馬村本郷曹洞宗満行山景忠寺の所藏になる涅槃圖と灌佛會の二大幅を見た人であれば「あの佛畫を描いた人が神宮守満といふ人か」と想ひ出すことであらう、實際神宮守満なる佛畫の名人は群馬郡久留馬村の收入役であつた故福田吉平氏と高崎の本多夏彦氏とがその身元調査をはじめるまでは知る人が少なかつたのである。

神宮守満は明和六年群。

は「神宮照信主寫之」と書いてあるといふことであるから、二十五歳頃の守満は照信の畫號をも用ひたらしい、また守満を守光と書いたこともある、この畫號と模寫の地點から想像すれば、二十五歳前後の守満は、す



守満の並榎八景の一晩鐘

馬郡久留馬村本郷の農家の二男に生れた人だが、いまのところ父の名は判然としない、兄は太右衛門といつたやうである、通稱乙五郎ともいひ友五郎ともいつた、太郎右衛門と名乗つたこともあるがこれはよほど後のことであつたらしい、通稱の乙五郎をひねつて「乙吳」の畫號を用ひた時代もある。

また信州小縣郡根津村長命寺で寛政五年七月上旬(この時二十五歳)模寫したといふ信玄、勝頼兩公の寄進に成る「庚申、宇賀神、愛染」の三幅對の斷片に

でに旅繪師であつたやうに想像される。

では二十五歳くらゐの若さで旅繪師に出られるやうになつた守満は、一體誰について繪を學んだのであらうか、いまは故人となつた前記の福田氏が生前語るところによると、北甘樂郡野上村（今の額部村）の人佐藤探雲に師事したとのことであるがその關係を語る福田氏所藏の資料が現在紛失してしまつたのは惜しいことである、佐藤探雲は上野人物志や北甘樂郡史にも見えてゐる通り、狩野家の門人で、晩年には上野法眼の官までも賜はつたほどの名手であるが、守満遺品（註）の中に法橋探雲六十八歳筆の大黒天があるのを見れば探雲と守満の師弟關係を想像出來ないことはない、即ち探雲が法眼になつて八十八歳で歿したのは、文化九年五月であるから、六十八歳は寛政四年に當り、守満にすれば二十四歳である、この大黒天が師弟關係の證據となれば探雲を師としたのは案外早かつたと想像出來る、また晝號照信から守光に改め、更に守満に改めた徑路を見ると、探雲の名の守照といふ二字から出てゐることも想像に難くない、まづこれ等の點から見ても、守満は探雲の門人であると斷定して差支へなからうかと思ふ。

探雲を師としたと斷定すれば、守満は江戸に出て修行したのであるが、守満遺品によれば、彼は西は京大阪、東は日光あたりの神社佛閣を巡禮し、珍藏の名畫を模寫して名匠の傑作を手本とし、大いに腕を磨いて故郷へ歸つたと想像されるが、彼がいつ頃故郷へ歸つたかは明かでない、前に述べた並榎八景の繪卷は三十六歳の時の筆に成るものであるから、この頃は既に一家の域に達して故郷に歸つてゐたと想像される、これを立證するものとしては、前に述べた景忠寺所藏の二大佛畫の外に、同村白岩觀音天井の天女の圖、群馬郡六郷村太守院本堂天井の天龍の圖、同郡車郷村瀧澤寺

本堂天井の天龍の圖、箕輪町金龍寺及び龍門寺天井の天龍の圖等の傑作が遺つてをり、いづれも晩年の作でないことは明かである。

これ等の傑作を所藏してゐる前記の寺院は全部曹洞宗であるが、いづれもこの筆者を知らぬ有様だから、高崎附近の他宗の寺院や神社には、また彼の傑作が遺つてゐるではなからうか、彼を佐藤探雲門下の佛畫師とは知らず、名もない旅繪師神宮守満の作として埋もれさせてしまつてゐるのではなからうか、郷土の生んだ佛畫の名匠神宮守満の名を世に出すと共に、埋もれてゐる彼の名作も世に出したいものである。

また彼は俳名を紫鳳亭朝鳥と號し、當時高崎における一流の俳人に伍して名句も遺してゐる。

信濃路やいづれ男の綿帽子

朝鳥

これは平花庵雨仕が上木した句集の中の一旬だが、旅繪師として旅に實感したものの一つであらう、古くから群馬郡久留馬村本郷は俳諧の盛んな土地だといふが、その草分が畫工守満こと紫鳳亭朝鳥でもあつたとすれば面白いことと思ふ。

彼は晩年だけは確に本郷で送り、天保十五年二月二十日、七十六歳で歿してゐる、いま室田縣道に沿つた本郷神社裏の藪蔭に

「喚翁徹心居士 神宮太郎右衛門林雄齋守満」

と刻んだ墓石を残してゐる、これが後世に遺した守満の面影である。本郷神社の西に當る桑畑が守満の屋敷跡だと傳へられ、古井戸が残つてゐるが、その子多治郎、孫壽爾まで血統が絶えたのは惜しい。

（註）守満遺品は現在群馬郡久留馬村本郷景忠寺裏福田家の所藏となつてゐる、守満の子多治郎は音に聞えた酒飲みで、當時酒屋をしてゐた福田家へ守満の遺品を持込んで酒代として飲んでゐたものだが、福田家でも

その後置き場に困り大部分焼却してしまった、現存するものは守満修行時代の寫生及び模寫の小品に過ぎない、惜しいことをしたものである。

傳説に残る淀君

敷島公園の艶ヶ岩由来

大坂落城を飾る悲劇の主人公、淀君の墓がところもあらうに上州の利根河畔、群馬郡總社町にある——といつたら誰でもほろろと好奇心にかられて機會あらば一度は訪ねてみたいと思ふに違ひない、淀君といへば元和元年五月八日、城内の穀倉へ追ひつめられて、こゝで秀頼と一緒に自刃した事になつてゐるのだが、總社町の傳説ではこの史實を覆して、本當は落城と共に城を逃れ、總社城主秋元長朝（寛永五年八月歿年八十三）の陣に救はれ、戦後長朝が總社へ歸るについて一緒に連れて來た、以來十五年、城内に世を忍んでゐたが寛永七年四月二日歿した、同町植野の曹洞宗元景寺に、秋元家初代景朝公の墓地と隣合つて

心窓院殿華月芳永大姉

とある一基の墓石が、つまりその淀君の墓だといふのである。

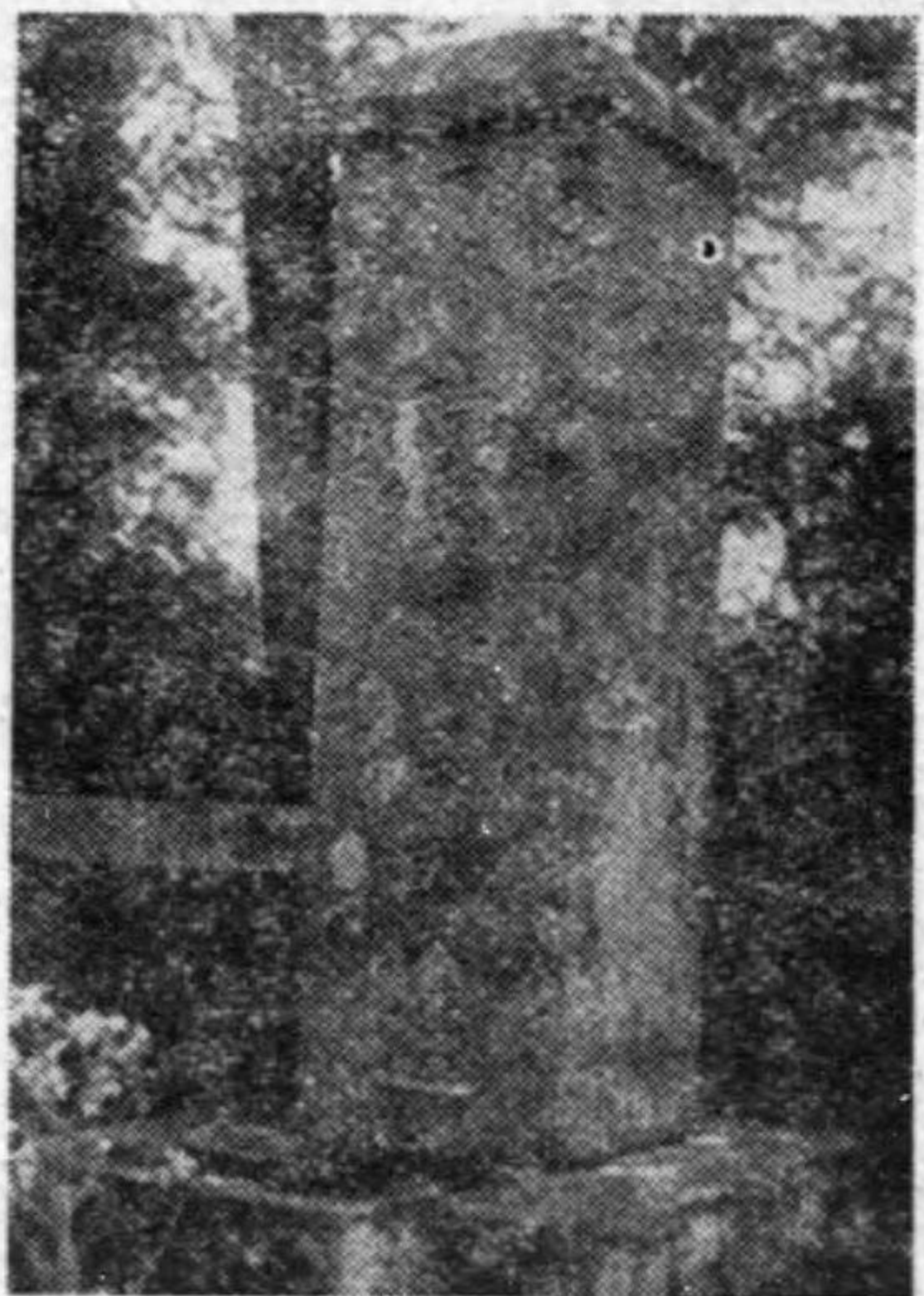
墓は高さ六尺程のなか／＼立派なもので、墓銘によると心窓院殿は秋元但馬守泰朝（泰朝は長朝の子、寛永十九年十月歿、年六十三）の母である、傳は詳かでないが葬送に用

ひた乗輿の扉の一片がこの寺に在る、桐と菊の紋のついてゐるのがそれである。

といふ意味のことが刻んである、この墓はその歿後七十三年後の正徳五年九月、泰朝の曾孫武州川越城主（その頃秋元は川越城主であつた）伊賀守喬房が建てたものである、ところで墓銘に泰朝の母だとなる心窓院殿が、元景寺の過去帳には「秋元但馬守泰朝御乳母也」とあり、秋元家で印刷して舊藩士や、同家の關係者に配つてゐる秋元家墓地表によると「二代長朝公側室」とある、いつたいどれが本當なのか誰も知らないまゝに今日まで來てゐる。

頗る興味とした

存在の心窓院殿を
それではなんの根
據があつて淀君だ
と傳へて來たかと
いふと、これこそ
何一つ記録もない
のである、たゞ元
景寺に今でも残つ
てゐる葬送に使



淀君の墓

●用したといふ乗輿の扉一枚、それも朽ちて漆は剥げ古色蒼然として見る影もない物だが、それには秋元家の定紋に似た瓜に桔梗を中央にして桐と菊の紋章があしらつてあるのが見られる、この桐が豊臣家の紋で、菊が淀君の生家淺井家の紋だといふところから淀君だといふことに、いつの間にかいひ傳へられてくるやうになつたらしいのである、總社町收入役福島博氏（五〇）は

秀頼でさへ大坂落城のとき逃れて九州へ落ちたといふ説もありますから淀君が上州路へ落ちて來たといふことも考へられなくはないと思ひます、淀君は大變紅梅が好きだつたさうです、大坂から總社へ來る途中信州の梅

の名所を通りながら梅を持つて来て元景寺の附近へ植ゑたさうです、それまではあの邊を上野原とか上野村とかいつてゐたのですがそれ以來は「植野」といふやうになつたと申します。

傳説の淀君は總社へ来てからは大橋の局おえん殿と呼ばれてゐた、京都の女だといふことゝ、大坂の役が終つて長朝が歸城して以來このおえんといふ女が總社に出現したことは事實で、やつぱり「側室」といふところではなかつたかと思れるのである、元景寺の現任職大瀧定雄氏(三八)はこのおえん殿を飽くまでも淀君として次のやうに語つてゐた。

淀君を總社へ連れ歸つてからお妾にしようとしたらしいのですが、淀君の方で承知しないので大變虐待したんだといひます、石牢でもないがまあ座敷牢のやうなところへ幽閉して實に酷い扱ひをしたらしいので、おえんは死後いろ／＼と秋元家に崇りをするやうになり、それ以來代々秋元家では供養するやうになりました、今でも私どもへのつけ届けなどもこれは心窓院殿様の方へと別にしてお届け下さいます。

秋元家がどんなにこの心窓院殿の菩提を弔つてゐるかの一例は、文政九年、當時山形城主だつた但馬守久朝(のち館林城主となつた志朝の養父)が追善供養に建てた石燈籠に刻んだ一文によつても推察される、これによると正徳五年に墓標を建て、から三十二年後の延享三年に祭田を置き、更に五十四年後の寛政十一年には玉垣を造り、次いで四年後の享和三年に寶篋印塔を、二十六年後の文政九年八月にこの石燈籠一基を供へると明記してある、福島收入役も

余程崇りをして代々秋元家に障りがあつたものと見えます、東京の大震災の前年の夏でしたかな、秋元家の記録係の高橋といふ方が古文書の調査に見えられたとき一體どんな崇りがあるのかと訊ねましたが、そのことだけは聞かないでくれ、秋元家へ来てそのことだけはいひ出さないで下さいと何も話してくれませんでした。といつてゐる、そのとき元景寺から二十一通の古文書を持つて歸京したが、これは震災で焼けてしまつた。

おえん殿と呼ばれた心窓院殿がおそらく醜い最後を遂げて秋元家に崇つたことは最早動かせない事實であるが、おえん殿が淀君であつたかどうかは遂に確證がない、しかし「泰朝の母也」とか「泰朝の乳母也」といふことだけは嘘だ、元和元年の頃には泰朝はもう三十六歳の壯年だつたので大坂落城後の淀君は母にも乳母にもなりつこないものである、ところでこの傳説の怪奇はまだ／＼續くのである、前橋の敷島公園に「お艶ヶ岩」といふのが在るのを御存知だらう、こゝへ結びつくのである、昔、まだ利根川の流れが變形しないころの總社町は今よりぐつと利根川の上へ出つ張つてゐてお艶ヶ岩の邊りはお城の下になつてゐた、こゝへおえん殿が沈められ怨靈が今のあの巨巖と化し夜な夜な巖上に鬼火をチラ／＼させながら總社城に妖氣を漂はせた——その遺蹟だといふのである、ともかく傳説は傳説として話題の主、心窓院殿華月芳永大姉の墓前には、今朝も誰か訪ふ人のあつてか霜に打たれて弱々しく咲いた遅咲きの野菊が手向けてあるのもいぢらしい。

(附記) 前橋商工会議所發行「前橋觀光案内」によると、お艶ヶ岩の傳説は川の西の美少女が對岸の青年と戀に陥ちたが、青年に欺かれたと知つて利根の激流に投身自殺した、その身を投げた岩が今お艶ヶ岩と呼ばれてゐるのである。

櫻田門外の羽鳥類三

井伊大老の首級をあげる

「叔父の類三は、おかもちを小脇に抱へて、やつと水道橋まで迎りつきました、しかし晝間の騒動で幕吏の警戒は嚴重ですし、参加した浪士に水戸藩の者が多かつたせゐり水戸藩邸近くは殊に危くて近寄れません、目指す藩邸を目前にしながら地團駄踏んでみてもはじまりません、例のおかもちは是非とも老公の目に入れて首尾を報じなくてはなりません、とに角、うろついてゐたのでは危険ですからおかもちを抱いた儘一先づ水道橋の下に身を潜めました、寒中三日の水は相當徹へたらうと思はれます、叔父は水に浮いた塵と芥の間から首だけ出して日の暮れるのを待った相です、暮六つの鐘は鳴つたが人通りは中々絶えませんが、さうかうする中にいよいよ夜も更けて警戒の眼も幾らか緩んできました、それかと言つてどうして表門から藩邸へ入りこめるものではない、お公のお喜びは一通りではなく叔父がおかもちから首級を差上げますと、老公は「紋章は」と仰せられたさうです、當時は武士の習はしとして敵の首級を挙げたときは敵の片袖つまり片袖についた紋章なのですが、それで首級を包むことが武士の情けとなつてゐたさうです、しかし、何しろ急場のことですんな暇もなかつたのでせうその旨申上げると老公は「それは惜しいことをした」と非常に残念がられたとのことです」

と語る高崎在の大類村字宿大類の米穀商羽鳥友太郎翁(七)の眸は青年のやうに輝いてきた、これこそ明治維新史の第一頁を飾る「櫻田門外の變」に絡る一場の秘話なのである、今も人は井伊大老の首級を挙げたのは薩の脱藩者有村治左衛門なりとするが友太郎翁が語るやうに實際は高崎在大類宿の郷士で友太郎翁には叔父に當る羽鳥類三親義の所爲なのであつた。

「叔父は老公から感状と盃を拜領して面目をほどこし御前を退いてから数日間、藩邸に休養してゐましたが、どうも幕吏が感附いた様子なので老公から「暫く世を忍べよ」と扇子を下されました、老公に迷惑が及んでは大變ですから叔父は直ちに支度して夜に紛れて江戸を逃れ出ました、その時の扇子、感状、盃等は今も長男の悦翁(静岡縣富士郡富士根村居住)が大切に保存してゐます、扇子にはたしか水戸公の定紋が入つてゐたと思ひます、この話は叔母類三親義の妻が存命中、諄いくりお聞かされたものです」

類三親義は江戸を逃れ出ると一度高崎の實家(友太郎翁の父幸藏氏宅)に身を潜めたが結局こゝにも安心してゐることは出来なかつた、幕命を受けた高崎藩の探索の眼がおひくくと繁くなつてきたので類三の實兄幸藏、政藏が相談の上一家が日ごろ昵懇にしてゐた瀧の慈眼寺(瀧川村大字大瀧)住職仙祐に頼んで長野の善光寺宛の添書を貰ひこゝに類三は佛門に志す一信徒として善光寺に逃れ、更に善光寺の添書を貰つて遠く高野山大乗院に逃れたのである、では高崎在の一郷士の伴がどうして水戸浪士の仲間に入つたのか、いま暫く友太郎翁の話をお聴かう。

「變だぜ類の野郎、衆と甲の野郎が手傳つて米を賣つたといふ話だが物置を調べてみる」と私の父がえらい権幕なので、物置の中を調べてみると成ほど奥の方の一山十俵が跡方もなく消えてゐます、物置のすぐ手前の方の米山に手をつければすゞばれてしまふので、奥の米十俵を持出したのに違ひありません、叔父は當時十七歳だつたと申しますが、身の丈六尺二寸、兩手に米一俵づつぶら下げて幅一間ぐらゐの用水ならひよいと飛びこしたといふ相撲取りにしてもいゝ大男でした、先刻も出た甲と衆の野郎といふのは矢張り同村者で新井甲太郎、羽鳥衆三郎といふ者ですが、この衆三郎も六尺豊かの非常な力自慢の男でしたから米十俵ぐらゐ持出すのは屁でもなかつたんです、丁度その頃、叔父はこの物置の二階を居間とし、平常そこに居たさうですが米を賣つたことがいよ／＼確實になると日頃温厚な父もさすがに腹を立て、物置の階段の上り口で「類、何しとんだ」と大きな聲で怒鳴りました、すると、不意から一風變つた叔父でしたが父もこの時ばかりはびつくりしたさうです——いきなり双渡り二尺五寸の刀をふり廻しながら足音荒くとび降りてきたさうです、咄嗟の事ではありますし、殊に相手は血氣盛りの向ふみずときてゐますから父は有合せた天秤棒を手にはしたものの、思

はずひるんで二、三步後に下りました、その隙に叔父はどん／＼往來へ逃出してしまった、そこで元氣を取戻した父が「この野郎」と後を追ひかけますと、もう大丈夫だと思つた叔父はふり返りざま、「この刀は欲しけりや、やり申す」とその刀を道傍に置き捨てて一目散に駆け去つて終ひました、賣つた米の代金を旅費としたことは申すまでもありません。話はわき道にそれますが、大體叔父は十三の時も家出し二年ばかりして十五の時に歸つてきました、この時はどういふ様子だつたのか私も知りません、とにかく一風變つた叔父のことです。それからその中に歸つて来るだらうと家の者も別に氣にも留めずにゐました、案に違はず數年後叔父は歸つて参りましたがそれからといふものは、どこに出掛けるのか一向家に留まつてゐたことはありません、後から考へると父も大體諒解済みでそれとなく相當の小遣を與へてゐたやうです。

後年櫻田門外に井伊大老の首級を擧げた快漢羽鳥類三親義はかうして弱冠十七歳の折に水戸の城下へ出奔してしまつた、類三の水戸藩にあること約十年、その間漢學を研究し、水戸流の書風を習つてゐる、實に雄渾な筆致でその書風は、水藩の天狗黨が好んで用ひたもので、同志が一見すれば一眼でそれとわかる特徴があるさうだ、その間或は水藩の攘夷黨と往復し、或は諸藩の志士と交渉しながらいよ／＼尊皇倒幕の鐵石心を養ふ中に井伊大老の餘りの彈壓に耐へかねた水戸藩士が井伊の首さへ擧げれば、尊皇攘夷は立ちどころになるとの信念を抱きはじめ江戸表へ向け脱藩する者が續出してきた、類三親義はこの一行と共に東上したのである。

話は前に戻るが羽鳥家は信濃源氏桂尾城主村上家の枝城狐落城（大類村に遺跡がある）主羽鳥長門守の後胤で

村上家が武田信玄のために没落後上野國群馬郡瀧の郷に寓し代々羽鳥玄蕃と名乗つたが後大類里に移つた、類三親義は藤藏國親の三男として天保元庚寅年四月十七日に生れた、幼少の時から至極の變り者で瀧の慈眼寺の和尚仙祐は字も上手だし漢學も達者だつたから村童はみんなこの和尚の元へ學問に通つたものだが、類三だけはお寺でまともなことを聞いたのでは面白くない、彼處へ行って變つた事を學ばうと近くに住んでゐた小園

井田宮といふ修験者（山伏）の許に出入りをはじめた

この小園井田宮といふ人は非常に氣風の強い人でまた人格者でもあつた、素性を洗ふともとは水戸藩の立派な武士だつたがある時武士道の意氣地から止むなく家中の某といふのを殺害し永の御暇となつた人物であつた、この人がまた非常に勤皇心の強い人だつたのでその教化薰陶をうけるに隨つて水戸藩にあこがれるやうになつたことが、類三家出の大きな動機になつたと思はれる。

さて、話は遡つて櫻田門に大事を決行する前夜、つまり萬延元年三月二日に同志一同は品川のさる料亭で最後の打合せをした。

さあ、その料亭の名前は失念しましたが（恐らく品川の貸座敷土藏相模を指してゐるものと思はれる）兎に角その二日前に父の許へ類三叔父から使ひが來ました、なんでも夜徹し走り續けて飛んできたといふ話でしたが誰か使と一緒に來てくれといふのです、父の従弟、關新兵衛翁が出かけました、英産を着て笠をかぶり草鞋ばきで使と一緒に品川迄行つたさうです、そして打合せて置いた通り同志の人が落した風呂敷包みを何氣なへ通りすがりに拾つた恰好にして持つて歸りました、これが實は同志の血盟書だつたのです、それは私の家に暫く匿つてあつたのですが、そのうちいよ／＼井伊大老が殺されるとともに高崎藩の岡つ引が始終私共の家へ眼をつけて仕様がありません、これでは家に置いても危険でしょうがない、關新兵衛さんなら苗字も違ふことだから安全だらうといふので、そつちで預かつて貰ひました、關の家では土藏の地棟の上に置いたのでしたが月日が経つうちに鼠の奴が噛つて綴目が脱ればら／＼になつてしまつたらしいです、ある時父が關家へ行きますと、枕屏風にどこかで見えたやうな書物が張つてある、どうもをかしいわいとよく／＼見ると何とそれが血盟書中の辭世二首だつたんですよ、それを聞くと關の方でも吃驚りしましてネ、その中に、はがしてとどけますといふてゐる中に父が死んでしまひ、その後十年前の火事であうとらすつかり焼いちまひました、全く惜しいことをしたもんです。

前に述べたやうに類三親義は身をもつて高野山大乘院に逃れたが、こゝで全く世間から遠ざかり

佛學を研究すること七年に及んだ、その頃には餘燼も冷めてきたし、九州の方ではだんく倒幕運動が表面化してきた、とても辛抱し切れない、もう外界に飛出してもいい頃だらうと、類三は再び勤皇運動の本場九州へ西下したのである、そのときの模様を友太郎翁はかう語つてゐる。

何しろ九州へ行かうにも錢がないで色々と思案した揚句、昨日までの高野山生活に別れを告げ、今度は日蓮宗の信徒になりすまして出掛けたさうです、南無妙法蓮華經と書いた信徒羽織を着用し、どんつくく太鼓を叩いて出發したといふから大變な俄信者もあつたものです、その時の話にこんなこともありましたが、夏のことだらうと思ひますが腹は空いてくる、日は暮れてきたどうにも金はないし困つたことになつたわいと思ひながら、さる宿場の縁台に腰掛けて疲れを休めておりました、すると「お若衆は日蓮信者のやうだが、今晚はどこまで行つて泊りなさる」「どこへ行くあてといつてありません」「ぢや私の家へ泊りなさい」といふことになつて同宗の信者某といふ者の奥の間に泊つた、何しろ同宗の信者だといふんで御馳走は腹一杯喰はせてくれるし、お宗旨の話は何か相槌を打つてごまかし、まんまと寝に就いた、所がたらふく食つた故で夜中に水が呑みたくなつて仕様がな、さりとて奥の間で家の勝手は皆目判らない、仕方がないので料理屋にでも泊つた調子でぞんざいに「おい姐さん」と手を叩いて女中を呼んで見た、そしたら信者はそんな無作法はしない筈だと忽ち化の皮がはげてたうとう追出され、一夜の野宿を余儀なくさせられたさうです、もつともこれに懲りて、その後は十分氣をつけたので行く先々の信者の家で接待されつゝ無事南下、そして鹿兒島で南洲翁と會見、尊皇倒幕に花を咲かせ西郷との關係はこの時に出來たさうです。

類三の妻ははるといつた、類三よりは二十も年下だつたが後年西郷と識り合ふやうになつてから軍資金稼ぎのつもりで婿入りしたものらしい、何んでもさる藩の家老の娘とか類三はそのため後年田中姓を名乗つてゐる、ところが婿に行つた筈の類三はなか／＼その養家に寄りつかない、たゞ運動資金がなくなつてくると西郷と一緒によく金を借りて養家へ歸つてきたものださうだ、後年はるは群馬郡大類村の友太郎翁の近所に一軒小さな家を構へた、類三はこゝへ時々歸つてきたがこの時は同志も連れずたゞ一人で高崎在に故郷や妻子のあることは全然秘し、ほんたうのかくれ家としてゐた、藩名も西郷と同藩といふことにし、色々變名も使つたらしいが、結局は先年の櫻田門外以來の苦しい隠遁生活がかれをさうさせたものだらう、かやうに、はるとの間に子までありながらも更に類三は關西の富裕なざる穀屋に婿入りしてゐる。

「丁度西郷さんが流刑中、島の娘と結婚したのと同じことです、今から考へると變な語ですがとに角叔父は非常に磊落だつたんですな」と友太郎翁はいつてゐる。

「叔父は西郷さん等と國事に奔走中攝津界の穀屋に再度の婿入りをしてゐます、この家は西郷さんが非常に懇意にしてゐた家でその婿入りも結局は資金調達が目的だつたらしいです、それでいゝ鹽梅に賣上金が溜つた頃には持出して行つて資金に費ひなくなる頃にはまた西郷さんと二人で戻つてきたさうです、さうしたある朝のこと叔父がまだ蒲團を被つて寝てゐた時、米買ひにきた人がありました、家附の娘（實は友太郎さんの義理の叔母になる譯だが）は起きて榎とりをしてゐたが買ひに來た人は日頃貧乏だつたらしく「あなたの家は先月も先々月も拂つてくれないから支拂が濟んだあとでないとお上げする譯に行きません」と叔母に斷られ、すぐにごと歸りだしました、すると今まで寝てゐた筈の叔父がむつくり起き上つて「なあーに誰が困るのも同じことだ、入用だけお上げしろ」とたうとう米を持たせて歸してやつたさうです、叔父にはその穀屋で出來た子供があるさうですが何でも男の子で後に兵庫の柿本人麿神社の神官になつたといふことです」

やがて王政復古が成つて政府に辯官府がおかれると類三親義は多年國策に盡した功により辯官に任ぜられたが、いよ／＼明治維新政府の基礎が固まるとともに彼は退官を決意した

「日本は神國だから武力で世界を斬り従へるのでなく神の力で日本を世界の中心勢力とするのでなければならぬ」

といふ信念の下に辭職届けを出したがこの辭職届けの下書きと西郷の留任勸告書といふのが今なほ

多くの品々と共に類三の長男悦翁氏方に保存されてゐる、類三の辭意固しとみるや西郷は「辭任後は何をする積りだ」と問ふたところ類三は「せめて官幣社の神官になりたい」といふのでこの願ひは早速きくとゞけられ札幌神社へ行くことになつたがこれは氣が向かず結局宇佐八幡に赴任した、その赴任後間もなく有名な征韓論が起り、類三は西郷との個人的な書面のやりとりで災されて宇佐神宮を退いた。

「間もなく叔父は天照教といふ神道を創始しまして徳田寛豊と名乗り、布教を始めました、本部を静岡縣富士郡富士根村四季見ヶ岡(舊名万能ヶ原と稱され現在も天照教本部がある)におき信徒は追々と殖えて廿万にも達しました、叔父が死んだのは、さうです明治廿五年下總に布教中腦溢血で倒れましたが五月廿五日六十三歳を一期に波瀾の多き一生を終りました」

なほ類三は妻はるとの間に一男三女があり長男悦翁は父の遺志をつぎ、類三を教祖とする天照教を司祭し静岡縣富士郡の四季見ヶ岡に現住し長女おまんは群馬郡元總社村の小鮎家に嫁ぎ次女ちかは佐波郡玉村町の正稔寺に嫁してゐる。

郷土開發の松本勘十郎

新島襄と肝膽相照す

實驗心理學の泰斗、文學博士松本亦太郎氏が、群馬郡倉賀野町の出身であることは御存じの通りだが、博士の養父に松本勘十郎といふ偉い人のゐたことはあまり御存じではないやうだ、しからば勘十郎翁とはどんな人物だつたのかそれを語る前に、明治二十五年、翁が幼稚園を倉賀野に設立する際縣廳へ提出した履歷書の寫しを紹介した方がはるかに手取り早く翁を識ることが出来るだらう。

履歷書(寫)

- 一、天保七年八月倉賀野ニ生ル
- 一、天保十四年九月倉賀野田口近江ノ門ニ入り漢學習字ヲ修ム
- 一、嘉永元年四月江戸三井本店吳服部へ出勤、桐生支店ニ在勤スルコト十七年、明治二年四月本店支配人トナリ東京在勤
- 一、明治五年三井組轉勤
- 一、明治六年宮城、水澤兩縣爲換出納長トナリ支店六ヶ所ノ事務ヲ監督ス
- 一、明治七年一月本店在勤
- 一、明治八年福島縣爲換出納長
- 一、明治八年十月小倉及長崎大藏省出張所爲替方御雇

- 一、明治十年二月東京本店在勤
- 一、明治十一年六月名古屋支店支配人トナル
- 一、明治十一年十一月名古屋博物館取締役ヲ命ゼラル
- 一、明治十四年二月病ヲ以テ三井家ヲ辭ス、在勤スルコト卅五年
- 一、明治十四年七月倉賀野驛戸長ヲ命ゼラル
- 一、明治十五年病ヲ以テ辭ス
- 一、明治十七年日本鐵道會社理事員ニ當選ス
- 一、明治廿一年一月製糸所設置
- 一、明治廿四年九月倉賀野町長ニ就任
- 一、明治廿五年一月辭任、同年八月再任ス

この履歷書で明かな通り翁は十三歳の時三井本店に入り桐生支店の小僧から叩き上げて相當の地位に進んだが明治十四年退職後は郷土の開發に努め、明治三十一年七月十一日六十三歳で歿した人である。ところで三井本店退社後のこの十八年間といふものは翁が郷土のために命を磨り減らした時代でその功績はまことに大きかつた。

翁には嗣子がなかつたので、高崎市宮元町舊藩士飯野翼氏の二男坊つまり現在の松本亦太郎博士を養嗣子に迎へたのであるが、この亦太郎少年を學者とするのには面白いいきさつがある。亦太郎博士が勘十郎翁の養嗣子となつたのは、十六歳の時であつたが向學心に燃えてゐた博士は、その當時どうしても中等學校へ入學する希望であつた、ところが養父勘十郎翁に見れば中等學校入學は反對で、出来ることならそのまゝ落着かせて家を守つてもらひたかつたのである、だが亦太郎少年は向學の志を捨ててゐるならぬならぬ死んだ方がましだつた、そこで翁も結局、根まけしてそれ

なら塾へでも通はせてやらうかと或る日亦太郎少年を呼んで

「安中に「エイジマ」といふ偉い人の塾があるさうだ、こゝへお前を通はせようと思ふ」と申渡した夢ではないかと喜んだ亦太郎少年は早速安中の「エイジマ」なる人を同地の友人湯淺治郎氏を通じて調査して見た、ところが、それは「エイジマ」先生ではなく「ニイジマ」先生で、安中出身の新島襄先生が京都で同志社といふ塾を開いてゐることがだんくわかつてきた、しかし、今となつては塾が京都だらうが安中だらうがそんなことはどうでもよかつた

「鮑くまでも養父が言明した約束ではないか、その約束を假りにも父が反古にしたとしたら、武士の風上にも置けぬ事か、しかも況んや問題は息子の向學心があり過ぎるといふ結構な事ではないか、親としては喜んで亦太郎を京都へ遊學させるべきである。」



松本勘十郎翁

とまで思ひ詰めてゐる向學心だつた、それは一寸でも反對したら忽ちブツンと切れて了ひさうな位ひたむきな向學心だつた。

「折角迎へた養子でないか、そんな事で豫想外な結果を招いては詰らんではないか、親としては喜んで亦太郎を京

と翁を忠告する友人、縁者もあり流石の翁も「それもさうだな」と折れて亦太郎少年の京都遊學は實現して了つたのである。

京都へ出て、新島襄先生の門に入つた亦太郎少年は、間もなくその才能を認められ周圍からも敬

愛せられた、ところがその頃同志社にはまだ徴兵猶豫の特典がなかつた、丁度新島先生の勤めもあつたので亦太郎少年は京都府立一申に轉じ、更に一高から帝大へと進み勘十郎翁などが豫想もしなかつた心理學者となつて、翁が歿する年には恰度ドイツへ留學中だつた、これは後日の話だが亦太郎少年のこの勉學が契機となつて翁と新島先生は肝膽相照す間柄となり、同志社を専門學校に昇格する時などは莫大な資金の應援を續けたといふことだがこの新島先生援助の事實などは全く世に現れてゐない。

翁が三井本店を辭めた理由は病氣といふことになつてゐるがその病氣といふのはどうも酒の飲み過ぎらしい、亦太郎博士も「教育」(昭和十年十月號)に

「私の養父は銀行生活で宴會に出る機會が多かつたため前から胃腸を損し、著しく健康を失したので醫師櫻井郁二郎氏の忠告で三井銀行を辭し東京の宅を引拂ひ郷里に歸り、禁酒して養生をして、町村のために力を致すことになつた」

と書いてゐるが、酒で病氣を作つたことには間違ひないやうだ、倉賀野へ歸つてからの翁は、熱烈なクリスチャンと禁酒家で有名であつたが、これは禁酒するためクリスチャンになつたと見られるべき節がある、勿論新島襄先生の感化もあつたことだらうが、信仰によつて禁酒を決行しようとした形跡が見られるのである。

當時倉賀野地方では基督教を排斥し、その信者を異端視して迫害したものであつた、翁も迫害を受けた一人で、時々屋敷内へ石ころを投げ込まれたものであつた、しかし翁はこれ等の迫害に屈せず、信仰によつて地方民を教化しようといふ一念から高崎教會の設立に奔走することになつた。高崎教會(高崎市宮元町)の設立は、明治十七年五月一日のことであるが、翁は三井本店を辭めて倉

賀野へ歸ると間もなく、高崎へ基督教會設立の必要を痛感し、天野宗忠等の同志四人と教會の設立運動を起したのである。

當時同地方には牧師と名のつくものは一人もなかつたが、前企畫院總裁星野直樹氏の實父星野光多氏が熱烈な信仰から傳道に當つてゐた、光多氏は翁とも交際があり、信者も増加して來たので、これを基礎に教會を設立することになつたのだが設立に要した資金は大部分翁から支出されてゐるやうである。

また縣の認可についても翁の盡力に負ふところ多く、明治十七年五月二日には縣の認可があり、同月十七日には教會設立式を舉行する運びとなつた。

翁はこの教會の中から人材を育成しようといふ計畫をたてた、この資金は勿論翁一人の出資ではなかつたが大部分は翁の手元から出てゐた、この育英制度により信者の子弟中優秀な者を選んで遊學させたのであるが、この中には財界の大物となつた深井英五氏などもゐる、翁はまた倉賀野町に中學校を設立する運動を起し、縣へ陳情したこともあつたが、これは實現しなかつた、そこで中學へ入學出來ぬ子弟のために自宅を開放して義塾を開き倉賀野講義所と名づけた。(明治二十年頃)

講義には翁自らも當つたが、英語、數學、漢文の講師は他から招聘し、高い俸給を出して教授させてゐたが授業料のやうなものゝは總一文とるでなく、常に十五人乃至二十人の生徒を收容してゐた。

當時の講師には、後に前橋中學の教頭になつた伊庭菊次郎氏、巢鴨家庭學校の副長を永らく勤めた小鹽高恒氏等があり、向學心に燃える地方の青少年にとつては、唯一の勉學所であつた。

この講義所の出身者は現在地方では何れも六十歳を超え、先覺者として重きをなしてゐるが、東京へ出て働いてゐる人としては元大審院部長判事、現専修大學法學部長須賀喜三郎氏等がある。

町政に關與するやうになつてからは、小學校教育に意を用ひ、翁の町長時代には、他町村に率

先して尋常科の授業料を廢止し、高等科の設置に成功してゐる。

當時隣村にはまだ高等科がなかつたので、隣村の子弟で入學するもの多く、今もつて翁の徳を讃へるものが多

更に前橋共愛女學校の設立にも盡力し、名譽校長の地位にあつた。こゝに特筆すべきことは、新島襄先生を援けて、中等學校であつた京都の同志社英學校を専門學校に昇格させたことである、勿論翁一人の援助によつて昇格したわけではないが、國家的人材養成の立場から専門學校昇格の必要を建言し、率先して資金を提供したことは新島先生との往復文書によつて明かなところでこの建言と資金提供に對しては先生も非常に喜ばれた。

以上は翁の教化事業、教育事業等に對する貢獻の概略であるが、次に交通、産業、水利方面を一瞥してみよう、翁は履歷書にもある通り日本鐵道會社の理事員に選ばれてゐた、待望の鐵道も東京—高崎間がいよいよ開通する運びとなつたが、利根の支流烏川の最終の船着場であつた倉賀野地方では、鐵道の開通には反對であつた、理由は船の便があれば、鐵道は不要じゃあないかといふのだが、先見の明ある翁は反對を押し切つて鐵道の開通に努力し、明治廿五年には現在の倉賀野驛の敷地を日本鐵道會社に寄附して倉賀野驛を設けた、倉賀野驛が今日如何に役立つてゐるかは御覽の通りである。

翁はまた産業方面にも力を盡し、明治十九年には二百臺の機械を据附けた製絲工場を作り、光鹽社と名づけて自ら經營に當つた、

その他植林事業を奨励したり東山道の兩側にアカシヤを植ゑて「倉賀野並木」を作つたりしたのもみな翁の事業であつた。

最後に翁の水利事業に對する功績を述べよう、明治の末期頃までの倉賀野地方は、まことに水に恵まれず農民は困り抜いたものであつた、この苦しみを見ては翁としてもジツとしてはをられず、

群馬郡長野村から烏川の水を引つばる計畫（現在の長野堰）をたて、一日も早く實現したい一念から、舊知の間柄である三井本店の技師澁谷吉藏氏を招聘して、長野村から六郷村を経て倉賀野に至る水路を測量し、設計書から工事費まで書き出したが、機が熟せないといふのはかういふ場合をいふのか翁の存命中には實現せず計畫のみに終つた、しかし後に縣で計畫した際には、翁の残しておいたこの設計が非常に役立つ、縣當局から感謝されたものである、この計畫と同時に吾妻川から長野堰に引水する設計と榛名湖の水を長野堰へ落す設計も作つたが、前者は實現せず後者は翁の設計通りに實現、今日倉賀野地方一帯に及ぼす恩恵は極めて大きい。

養嗣子亦太郎博士は、翁が最初希望したやうに松本家の財産を守る平凡人として世を送ることをせず學者として一家を成し、停年まで東京帝國大學教授を勤め、昭和十六年喜壽を迎へたが、博士の長男忍氏は父の博士とは反對に家に在つて祖父の業を繼ぎ、現に倉賀野町長として自治行政に敏腕を振つてゐる。

伊奈備前守忠次

代官堀生の親

群馬郡の京ヶ島村から瀧川村を経て佐波郡玉村町、芝根村等の沃野を貫く一條の水路、代官堀はこれを中心として三百三十年來農耕を續けて來た農村民にとつては命の綱であつたし、今はまた食糧増産へ固き決意の一畝々々を打込む農業報國下に重大な使命を果してゐるのである、にもかゝは

らずこの代官堀の開鑿功勞者伊奈備前守忠次の名は全く忘れられ、そのみか彼が近世本縣交通史上の重要點玉村宿（玉村町）の創設者であり、國寶建造物として今に残る縣社玉村八幡宮の修造者であつたなどといふことについては誰も考へてみやうともしない。

備前守忠次は初代の關東郡代（後の代官）であつた「大日本人名辭典」によると

清和源氏、源滿仲の後裔で信州伊奈に住み伊奈氏を名乗り祖父常基のとき三河に移り、以來徳川氏に仕へた、忠次は幼名を熊藏と呼び、天正十四年家康の近習となり、次第にその才を認められ、小田原征伐には道路橋梁の普請、食糧輸送で大いに勳功を樹て、秀吉は「未だわが麾下にかくの如き人あるを知らず、もし我に仕へれば即ち萬石に昇すべし」

と稱讚したといふ、その後關ヶ原の役にも戦功があり武州小室（埼玉縣南埼玉郡）鴻巣（同縣鴻巣町）等に一萬石の地を賜はり從五位下、備前守に叙任され、關八州の貢税を掌つた。

だから忠次の足跡は關東各地に及んでゐる、玉村へ来たのは慶長十年の頃で勿論まだ玉村宿もなく、見渡す限りの草つ原であつた、たま原とか玉の横野などと呼ばれてゐたらしい、すつと以前には萬壽姫もこの淋しい原を通つて鎌倉へ行つたといふ話も傳つてゐる（岩波文庫「お伽草子」中の唐糸草子）忠次はこの渺茫たる草原を一望するや少しも躊躇するところなく「よしこれを開發して民益を増さう」と水利墾田の大計畫をたてまづ用水堀の開鑿に着手することになり、事業の成功を建久六年頼朝が勸請したと傳へられる角淵八幡宮（玉村町角淵）に祈願した。

「我今荒原を以て熟田となさんと欲す、伏して請願す、神靈焉を祐けよ、若し其功成らば則ち謝するに神社の造立を以てせん」（玉村八幡宮本紀）と、かくして忠次の玉村開發の大事業が始められた。

これは容易な業ではなかつた、八幡宮の縁起類をみると「野原忽ち熟田となる」とか「日ならずして其の功なりぬ」とか書いてあるがこれは神徳を讃へた言葉であつて實際は想像以上の苦心が拂はれたと思はれる、一體にこの地方は利根川と烏川に挟まれた地域でありながら兩川とも岸が高く川は低いので簡単に水を引き入れるわけにいかない、まづ最初利根川の上流群馬郡京ヶ島村萩原下河原からの引水計畫が失敗、次いで更に同郡東村字下新田からの引水計畫も途中で拋棄してゐる、東村の未完成堀は現在「備前堀」と呼ばれて同村殿田堰の排水路として利用されてはゐるがかうした二つの失敗は一つに。



國寶玉村八幡宮

利根川の水面があまりに低いと當時の測量術が進歩してゐなかつたことに原因するといへやう。しかし、當時はすでに新しい水利事業はあちらこちらに起りかけてゐたのであつた、すぐ上流の總社（總社町）には領主秋元長朝（館林藩主秋元氏の祖、寛永五年八十三歳で歿）がゐて慶長七年から三年がかりでかの有名な天狗岩堰を完成してゐた、忠次は自分の失敗を恥ぢ長朝に相談した、長朝もまた自分がなめた開發者の苦心を知りつくしてゐるので同情し、早速天狗岩堰を擴張して水量を増しこれを延長して當時細流であつた瀧川に連結して遠く玉村地方を灌漑しようといふことになり忠次の第三回目の難工事ははじまり苦心に苦心を重ねたこの大事業も

漸く完成し、今これを代官堀と呼んでゐる、この結果天狗岩堰の水量も増し長朝の初期の計畫以上に一層廣く利用され、失敗の相談を持ちかけた忠次によつて却つて名實共に立派な天狗岩堰が完成されたわけで本縣の水利史上長朝のみ高く評價され忠次が全然没却されてゐるのは遺憾である。

貞享三年前橋藩備古市剛の書いた「前橋風土記」によると當時すでに忠次の開發した新田が七千石に上つてゐたと記してあるのを見てもいかに地方民がこの恩恵に浴してゐたかわかる、それは扱て措き代官堀の開發に成功した忠次はこの用水を利用して一日も早くこの地方を開發しようとする中央へ村の中心を置くことにして極力移住を奨励した、これが上新田村、下新田村で例幣使街道の主要驛として發展、今の玉村町の中心となつてゐるところである、さきに紹介した林鶴梁の師井田芹平(當主井田金七氏や本陣木島(當主木島寛治氏)問屋加賀美(當主加賀美正氏)の先祖もこのとき武州金久保(賀美村の字)から移住して來たといはれてゐる。

かうして忠次の計畫はほぼ完成されたので、いよいよ祈請に基づき神恩に報いるため八幡宮を修造することになつた、久しい戰國の争亂が漸く治まつた頃で角淵の八幡宮は見る影もなく壞れ朽ちてゐた、そこで忠次は新しい開拓地の新田へ社殿を移し殆ど新しいといつていゝほどに造營した、前代のもので使用出来るものはこれを活用した、かくて墓股の如き側面が桃山時代式のものであるのに背面が室町時代式のものとなり、これが現代に至り建築様式上の至寶として國寶に指定された所以でもある、慶長十五年六月十三日五十七歳で永眠した、埼玉縣鴻巣勝願寺に葬る。

玉村國民校の西北隅に字御殿と呼ばれてゐるところがあり、忠次の邸跡と傳へられてゐる、こゝに御殿稻荷といふ小社があつたが、これは忠次邸の氏神だつたといはれ今は玉村八幡宮の境内に移されて養蠶神としてこの地方の信仰が厚い、忠次の子孫もまた代々關東郡代に任ぜられ後には岩鼻に住んでゐた。

附記 富山房發行「國史辭典」に曰く(伊奈忠次の條)「關東郡代は彼を以て初任とし、在任中關八州を檢地し製鹽、炭焼、桑麻、楮、櫨の栽培、金銀銅の採掘を奨め水利の便を開く等國利民福に盡したが殊に河川改修、灌溉開墾に關する貢獻は著し、關八州は彼によつて富むといはれ徳川氏の收入を倍加した」

甘雨亭叢書祕話

名君板倉勝明侯と老臣

安中藩主板倉勝明(註一)が天保五年大阪城番を仰付けられ、大阪に急ぎ到着した時の話である。勝明はその夜早速親交のあつた篠崎小竹(註二)野田笛甫(註三)後藤松陰(註四)上田公長(註五)等と呼んで無事大阪到着の祝宴を張つた、宴酣になつて愈々勝明の劍舞が始められる番になり傍らの屏風が邪魔だといふので、これを取りのけさせて見ると其處に一人の老人が平伏してゐた、不審に思つた篠崎が「あれは何者ですか」と勝明に問ふと

「あれか、あれは余の家來で藩の財政を司つてゐる小林克正といふ者だ、余が御三家と對等に附合へるのも、また甘雨亭叢書の如き大著述にとりかゝつて居られるのも實はといへば皆なあの老臣のお蔭なのだよ」

と答へると、直ちに傍らの畫工上田公長を省みてあそこを描けと命じた、公長は早速得意の筆を揮つて老臣常に君側に在るの畫を描いた、老臣の誠忠に感激した篠崎以下並ゐる儒者が皆んな贊をしてこの畫を老人に贈つたことは勿論である。

勝明が篠崎小竹に向つて答へたなかに出てくる甘雨亭叢書といふのは水戸の大日本史に洩れ山陽の日本外史にも説かれなかつた多くの史實を集めた外史の復外史とも稱すべきもので、正に大日本史や日本外史にも比肩すべき國史の一大集成なのだが、この大刊行のために勝明をして後顧の憂ひなからしめた財政上の功勞者小林友七克正の家は安中藩で代々郡奉行を勤める家柄だつた、この克正の曾孫に當る小林喜三郎翁(七六)は嘗て碓氷郡細野村の小學校長を勤めてゐたが現在は安中町の舊屋敷で悠々老後を自適してゐる。以下は喜三郎翁の話

私共の祖先は武田家に仕へました、武田家没落の天目山の戦に出てくる例の小林美濃守などは私共直接の先祖に當ります、天目山に敗れると美濃守の子供六人は吾妻郡の大戸に隠れました、これが後に板倉家に仕へるやうになつたのですが、甘雨公には初代友七、二代友七(克正)その子達三郎(註六)まで三代に亘つてお仕へしました。

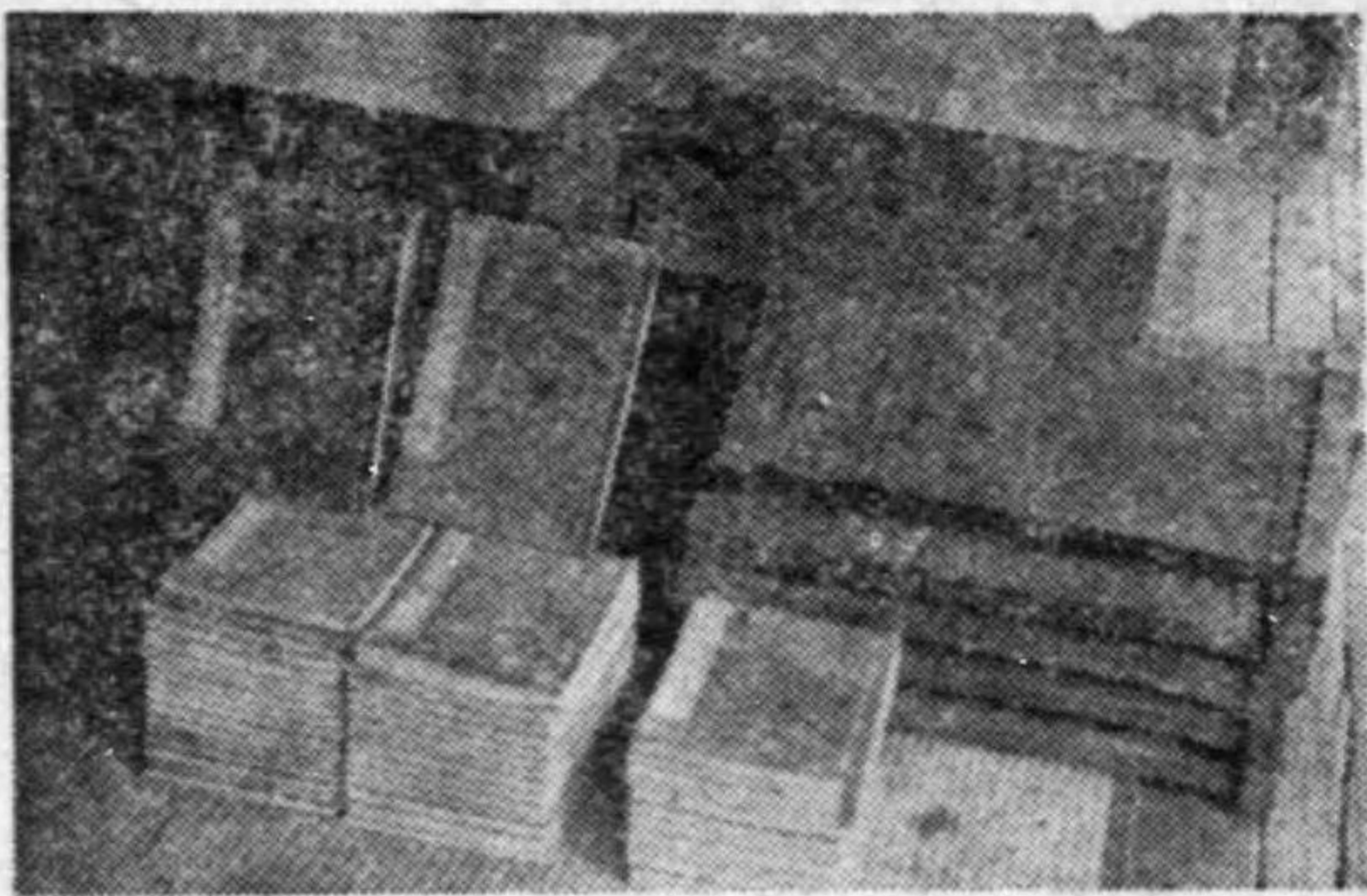
甘雨亭叢書と最も關係の深かつた友七克正は私の曾祖父に當りますが、克正が大阪で施した面目話の後日談とも云ふべきものがあります、父の大吉から聞いた話ですが、甘雨公は安中へ歸ると早速友七を呼んでお汝の誠忠に賞で、描かせた彼の繪に余が由緒書を認めてやると仰有つて由緒書を下されました、その書は畫幅の裏面に貼つてありました、つまり篠崎以下の人達は公が師の禮をとられてゐた人達だからといふので、裏に貼られたものらしい、これは父の代になつてから別々に表装して今も家寶として保存してゐます。

いかなる大事業でも然うであるやうにこの甘雨亭叢書の蔭にも斯うした隠れたる人物の苦心があつてこそ始めて完成されたのであつた。

それは夫れとして、甘雨亭叢書編纂の立役者板倉勝明の横顔を覗いて見よう、喜三郎翁の話

この殿様は勝向公のお子さんです、勝向公は練山と號し「練山吟草」等といふ著書もあるくらゐでしたがそのお方の後を繼がれただけあつて勝明公は書も立派だし文章もなか／＼お上手だつた、その上に當時評判の儒者が側近にゐて勝明公を助けたからあれ丈の大仕事(甘雨亭叢書)が完成出来たのでせう。

書がなか／＼お上手だといふので各諸侯からも依頼されたやうですが、餘り筆は執られなかつたやうです、此の藩にも幾らか現存してゐるやうですが大部分は偽筆らしいです、いよ／＼御病氣になられてからは仰向けになつたまま、お傍の侍女などにも書いてやられた様です、ですから、どうしても年月日があつたり字配りが悪かつたりするのは當然です、何しろ殿様の病中の書ですから形見になるのでは縁起が悪いと重役が次の間で大低は焼き捨てました、それでも幾らかは近臣に賜はつたのださうです、私の所にも年月日の曲つたのが一幅あります、處が後に忍藩の人で武藤といふ書家がこれを見て「御病氣中でもこれほどにお書きになつたか」と感嘆の餘り泣出して了つたといふ話です。昔はどこの藩にも御作事奉行といふのがあり、そこには大工が集まつてお城の戸障子を直したり、おもなく引退つたといふ話です。



(藏氏林小中安) 書叢亭雨甘

士分の者の戸障子を作つたりしてゐたもので、公は部屋住の頃よくこゝに遊びに來られては大工の名前をちやんと空で憶えてをられ、大工達の毎日の仕事ぶりにも通じてをられた、そのころ大工達には他でいふボーナスみたいなものがありましてな、藩の御作事奉行から殿様に書類として提出されることになつてゐたが、どうかするとこの書類に公の手がはいり或る大工のボーナスが減らしてあつたりすることがある、奉行はどうして減らされたものだらうと當惑してお伺ひすると、公はあの大工はいつも他の人達が仕事を始める頃になると鑿を研いたり鉋を叩いたりしてちつとも仕事をしない、大體鑿とか鉋は武士の刀と同じもので常にお役に立つやうにしておくべきものだと仰せられたのでこれには奉行も一言

勝明公は非常な讀書家でいつも讀書に便利なやうに「歩學机」といふのを首からかけて、其處、

此處を歩き廻りながらも讀書をされた、この「歩學机」は水戸の烈公にも贈られました、このやうに讀書好きの殿様もよく讀書にお飽きなされた時は藩の重役室にみえられた、こゝは大廣間になつてゐて重役が交代で詰めてゐたもので、こゝでは碁と手習が許されてゐました、私の父は手習が好きでよく習字ばかりしてゐたらしい、すると公は

「汝は何時きても手習ひしてゐるが、そんなに手習ひばかりしてゐると今に手が上つてお城の天井まで延びて了ふぞ」

と冷かされたものださうで、父（註七）はよく後年笑話にして私達に聞かせました。

（註一）安中藩主、勝尙の子、文化六年十一月十一日生る、性、學を好み藩治の傍ら經史を究め、慶長、元和以來先哲著述の湮滅するを惜しみ、諸方に搜索校訂して甘雨亭叢書を編す、安政四年四月十日歿、歳四十九。

（註二）天明元年四月十四日大阪に生る、篠崎三島の養嗣となる、二十八歳の時、江戸に出て古賀精里の門に入り、昌平齋に寓した、居ること半歳にして大阪に歸り養父に代つて子弟に教授し名聲大に擧がる、嘉永四年五月八日歿、歳七十一。

（註三）寛政十一年生、丹後田邊の人、古賀精里の門に遊ぶ、後、藩主牧野侯の知遇を得、執政となる、安政六年七月歿、歳六十一。

（註四）寛政九年美濃に生る、文化十二年以來頼山陽に師事し學業大いに進む、文政三年大阪に塾を開き、八年山陽の媒妁で篠崎小竹の女町子を娶つた、當時大阪で文は松陰、詩は旭莊（廣瀬）と稱せられた、元治元年十月十九日歿、歳六十八。

（註五）徳川末期の畫家、嘉永頃の人、「公長畫譜」「水雲畫譜」の著がある。

（註六）喜三郎翁曰達三郎は二代友七の末子で、公の命により安政二年七月九日附で三ヶ年江戶表で蘭學修業を仰せつかり三人扶持を下されました、これは新島襄先生が公から蘭學修行を仰せつかつたのより數年も早かつた、惜しいことに達三郎は十四で修行に出かけ、十八で死にました、その墓は今でも東京麻布法雲寺の星野三太夫（安中藩家老）の墓地中にあります、達三郎が學んだといふ書物は、英語のリーダー、英文法

典、數學の原書等があるか、先年中島信虎氏（故人、元文理大教授）が見えた時今は絶版になつた稀覯本だと仰つてゐました。

（註七）喜三郎翁談

父の大吉は勝明公の若様熊若君（明治二年死す）のお守役をしてゐました、父の歿年は明治二十二年五十八歳でした、公の逸話等も大部分は父から傳へ聞いたものです。

甘雨亭叢書とは各藩に保存されてゐる史實で正史にのらないものが後年散佚してしまふのを恐れ集められたものです、通常世に出たのは四十八冊と傳へられてゐますが、實際私共の手許には五十四冊あります、なぜかうした事が起つたかといふと、世にいはれる叢書四十八冊は世間に公にされたもので、あとの餘計な六冊は勤皇を鼓吹する危険があると云ふので幕府が公刊を許さなかつたものらしい、但し家に藏するは可なりと云ふところから密かに同好の士だけが持つてゐたものらしいのだが、いろ／＼調べて見ると結末のついてゐない様な處もあるから實際はまだ他にも有るのかも知れません、この版は大阪で作り安中へ持つてきて出版したものらしいです。

甘雨亭叢書とはどんな物か、中に書いてある事を一ツ二ツ紹介して見ませう。

山崎闇齋の學問は其の弟子三宅尙齋（註）に至つて完成されたといふ位、この尙齋といふ人は大儒者だつた、この尙齋は武州忍藩の阿部侯に仕へてゐたが、次の代の殿様が少し愚物だつたので尙齋は再三再四致仕を願出た、それで最後にはたうとうこの殿様の忌諱に觸れ、入牢申しつけられ、行田の牢に三年間も過ごすことになりました、ところが尙齋はこの入牢中に釘と板をみつめて「狼寔録」を著したといふから偉いものですな、どういふ風にして書いたかといふと、釘で手に穴をあけ滴る血潮で一滴々々血の文字を綴つて行つたのです、三年経つて尙齋は許されて京都に歸り塾を開きました、その後暴君も初めて目覺め、今度は尙齋に容しを乞ふと共に招きの使者を走らせました、この際三年間も血の滲むやうな苦痛を嘗めさせた暴君のことだからおいそれと歸るお人好しもない所だが、其處が尙齋先生です、それこそるものもとあへず驅けつけ

て「我君お目覚めになりましたか」と君臣相抱いて慟哭したと申します。

甘雨亭叢書にはこの狼彙録が上下二冊になつて入つてをり、この間の史實も詳細に記してあつてその最後に「今の人果してこの心があるだらうか」と公の評をもつて結んでゐます。

また短いものとしてはさうですネ、光圀公が建てられた「嗚呼忠臣楠氏墓」といふ碑文のあの嗚呼といふ二字の出典なども記してございます、これはかの有名な靈巖和尚が光圀公に上げた手紙の中にも詳しく記されてゐるのでありますが、それをみると昔支那に「嗚呼子胥墓」とある、そこから引いてきたことがすぐわかります、も一つ一寸した面白い例を引きますと、伊藤仁齋の子供のことを評した文句に「仁齋の五藏首尾最も可なり」といふのがあります、これ等は仁齋の五人の子供は、皆んな藏の字がつく名前を持つてゐたので、五藏といひ、この五人の子供の中で長男と末子とが優れてゐたことを表してゐるのでありますが、面白い形容の仕方ではありませんか。

(註) 播州明石の人、寛文二年正月四日生、歳十九で山崎闇齋の門に入り學業大いに進んだ、世に佐藤一齋、淺見綱齋と共に崎門の三傑といはれた、寛保元年正月二十九日歿歳八十、妻の田代氏は賢婦、尙齋の獄にあるや夏は蚊帳を廢し、冬は綿衣を止めて夫の苦を想つたといふ話は有名である。

新島襄の逸話

先覺者の行く道

上州が生んだ偉材、新島襄先生といへば、國民學校の一年生でも「あゝ、あの同志社を創めた先生だらう」といふほどに有名だが、こゝには未だ餘り世間に知られてゐない二、三のことを紹介し若き日の新島襄を偲ぶことにしよう。

新島襄(幼名七五三太)は安中藩士新島民治の長男として天保十四年(皇紀二五〇三年)正月十四日、江戸一つ橋の藩邸に呱呱の聲を擧げた。當時藩主は英邁の譽れ高い板倉勝明(甘雨公)であつた。

新島襄が如何にしてその天稟の資性を伸ばして行つたか郷土史研究家塚越朋治郎氏(前安中國民校長)の話をきいてみよう。

ともすると上州の片田舎から新島先生のやうな俊傑を出したことは偶然のやうにいはいはれがちですが、全く甘雨公のこの下地が大いに與つて力あつたものと考へます、新島先生は早くから藩公(甘雨公)の命で、江戸幕府の海軍傳習所に派遣せられてゐましたが、これがかの有名な先生の國外脱出に大きな影響を與へたものと思はれます。あるひは咸臨丸で渡米した勝海舟のことを聴きました浦賀の黒船を見たりしてこれに負けないやうなものを作らうと深く心に期したわけなのです。特に安中藩には海舟の弟子が多く、高弟で星野潤四郎といふやうな人もゐました、この人は大砲を抱へて狙撃をしたと傳へられてゐるくらゐ非常に力もあつたさうですが、こんな勝一派に負けないものにならうといふ氣分も随分強かつたことせう。

今は故人になりましたが、小さい時先生と良く遊んだといふ老人から聞いたところですが、先生は相當腕白で向う氣が強かつた、先生は御座間住で御殿詰時代の話にも御座間住といふのは元來殿様の用のあるなしかゝはらず常に次の間で待機してをらねはならなかつた役目勤めの暇を見ては勉強され、終には大々的に勉學の時間とされたので、藩公から強く御叱りを受けたといつたやうに、自分が正しいと思へば武家の杓子定規的なみずまひにはがまん出来ないといふ創造的な性格が多分にありました。

それについて藩の記録(諸士御控帳)で先生のこの時の脱出に觸れたなか／＼面白いくだりがある。

慶應二寅年十二月二十五日その方伴七五三太儀西洋學科修業追々願望に依り修業仰せ附けられ、牧野備前守様御家來菅沼清一郎と申す方へ入塾仕り居り候所、航海練習の爲、西洋人方へ度々罷り越し、近海の内、折々乗試測量に罷りあり候。



新島襄

◎ 所、當二月中また／＼魯西亞人乗組にて測量罷り出で折節俄かに大風雨中の所その後歸還これなく候間、諸々せんさく仕り候得共、更に様子相解り申さず、漂流せしものに相違候間敷段、同塾松前伊豆守様御家來尾熊男と申す者より通知有之候に就き歸還これなきものと認められ候。

てゐる、なほその時の新島家の様子をきくと、父親民治は伴の七五三太はもうこの世にないものと思ひ込み佛壇に裏の位牌を拵へ朝な夕なに冥福を祈る一方同藩植粟庄藏の二男公義を養子に迎へた、この人は新島公義として後年先生の警咳に接する様になつてから牧師となつたが今なほ存命中である。

とその間の様子を詳さに記録し

先生が明治七年十一月歸朝の時は色々積る話で安中一帶を興がらせたものだったといふ、その中で面白い話を二、三拾つてみよう、先生は歸朝後間もなく安中巽(安中小學校の前身で藩校を改造したもの)で同地方の戸長や子供を集めて色々珍しい話をした。當時その話をきいたことのある美濃部龜太郎氏(七)はかう語つてゐる。

先生は背廣姿でして當時としては大變珍しいものでした、いろ／＼話もされたのでせうが、いまだにはつきり記憶してゐるのは「地球といふものは圓い」といふ話でした、何んといつたつて當時の連中は今から考へると實に幼稚なものだったのですから、殆ど全部が地球は平らなもの考へておりました。平だからこそかうやつて立つてをられるのに圓いなら滑り落ちる筈ぢやあないか、どうしたもんだいとえらい騒ぎでしたが、それも先生の話ですつかり納得がゆき、なるほどなアと感心したものです。それからもう一つ今から考へて不思議なのはその當座、先生は一般の人に基督のことはぶつたりとも話をされませんでした、先生が基督教の眞摯なる信者であつたところから、人々はすぐにも先生と言へば基督と考へ勝ちですが滅多矢鱈に基督を振廻されなかつた所に先生の偉さがあつたんでないかと思はれます。もつとも先生の近親知己には基督の話も熱心にされたので、現在でも村の有力者達は殆ど基督教徒です、先生がこの町に教會をたてられるときは反對したり邪魔したりするものはただの一人もゐませんでした。それで先生は大體この郷土に近い所に現在の同志社を建てられる積りだつたらしいです、ところが郷土各宗の九十九ヶ寺が擧つて猛烈な反對をしました、先生にしてみればこの位の反對を押切る位は何でもなかつたのでせうが、同じ反對を受けるならこんなけちな所より全國一の佛都京都で敢然基督教の地盤を築かうといふ意氣で京都に出掛けられたといふことです。

先生は歸朝後毎日のやうに碓氷川の川原で何やらごそ／＼やつてゐられるので子供心になんだらうと思つて覗いてみると埧塙を一心にひねつてをられました。今考へてみればきつと鑽石などの地下資源開發といふ見地から實驗してをられたのでないでせうか、先生はまた歸朝早々で坐るのがおつくだつたらしく腰かけるためにいろ／＼と苦心されたらしい、しかし明治初年の安中のことですから椅子などといふものはなく仕方がないの

つて歸られました。その頃は始めて見る人ばかりで方々で引張り風だつたさうです。しかし、それを見たといふ小林でるさんも二十餘年前に死んでしまつたので今はその寫眞がどれだつたか調べるよしもありません。最後に先生の親孝行だつた話を致しませう、先生のお父さん民治氏は大分左黨の方で相當いける方でしたが、これでは體に良くないと思はれた先生は何とかして酒の分量だけでも減じたいと思はれました。こゝで普通の人なら「お父さん量を過しては體に悪いですから、少しづつ減じたら如何ですか」といふところだが、先生は面と向つてそんな言ひ方はいたされなかつた、お父さんが晩酌をされると先生は飲まないまでも傍で話の相手をされながら「お父さん、今日はこの豆を一つ徳利の中に入れてませうよ、一つ入れれば一つだけお酒の分量が減りますよ」といつた按配で笑話の中に豆一つをぼとりと入れられる、翌日はまた一つ増して二つ三日目には三つ、四日目は四つ、といふ具合に根氣よくしかも眞心こめた豆を一つづつ増加していつた、お父さんも先生のこの眞情には笑ひながら到頭酒を止められたといふことです。

この先生の眞心こめた一粒一粒の豆は、同志社で生徒を教へるにも常に失はれなかつた所で、一度先生の薫陶を受けた生徒は一生先生から離れなかつたのは當然なのである。

末尾に先生の詩で未だ世に知られないもの五つを掲げて先生を偲ぼう。

△秋 郊 開 笛

一抹郊烟欲夕陽、霜林風戰轉淒涼、忽吹橫笛知何處、跨犢童歸野水傍

△同

吟杖秋郊路、寂寥斜日、忽起穿雲曲、余音不耐聞

△初 冬 寄 人

分手連開日、爾來三月余、思君心若燃、早寄一封書

△初 冬 夜 坐

月照紗窗夜氣清、幽心獨對讀書檠、四隣寥々無人語、只聽草虫床下鳴

△書 懷

皇天本仁愛、何不懲吾生、默坐蓮階裏、無由見日光

藤 左 衛 門 悲 史

増 田 川 畔 に 散 つ た 義 人

義士は赤穂浪士、義民は磯茂左衛門、まことに沼田在の月夜野が生んだ杉木茂左衛門は昔から唯一人の義民であるかの如く考へられてきたが、その茂左衛門に勝るとも劣らぬ義人が享保年間に碓氷郡九十九村に現れ、安中藩の悪政下（註一）三十一ヶ村民のため痛ましい犠牲となつて同村中央を流れる増田川畔に斬首されてゐる事實がある、九十九村名主潮藤左衛門（註二）がそれだ。

今からざつと二百餘年前の享保年間、徳川八代吉宗の治世下、世は擧げて「享保の治」を讃へ上下ともに善政に満腹してゐた頃であるしかし地方はお眼こぼしの御他聞に洩れず、所々に悪政も行はれたらしい、こゝ板倉伊豫守勝清が知行する三萬石の安中藩にも虐政が訪れて来た、この虐政振りを具體的に申上げると明けたての戸障子にまで課税するといふ徹底した苛斂誅求振りで、この結果が百姓達はやむなく山野に放浪して木の實、草の根を喰ひ、果ては飢餓のため同胞相はむといふ鬼畜道にまで墮ちていつた、平和な山村は忽ちにしてこれ等の餓死體で蔽はれ、今でもこの地方に澤山残る無縁佛は當時の惨状を如實に傳へてゐるものなのださうだ。

この惨状を眼の前にしては誰だつて蹶然立つて藩侯の前に一應の抗辯をせざるを得まい、況や強きを挫き弱きを扶ける熱血の見本みたいな上毛人なるに於てをや、潮藤左衛門は慨然として三十一

ヶ村民のため立つた、そして百方苦慮を巡らした結果が事志と違ひ、悪政絶つて百姓鼓腹する善政を見もしないで哀れ増田川原の夏草を血で染めたまゝ、空しく死んでいつた、しかも後世藤左衛門を徳とし、氣の毒に思つたりする者が「藤左衛門様は偉い人だ」「藤左衛門様は惜しいことをした」などと、一言でも彼を稱め讃へるやうないひ方を仕様ものなら誰彼の用捨なく直ちに引捕へて打首にした(註三)くらゐなので藤左衛門の義舉に關する記録は皆焼き捨てられ文献などといふものは、残念ながらたゞの一つも残つてゐない、たゞこの地方の人々は子供のときから「藤左衛門」を寝物語に聞かされ、いろはと同じやうに藤左衛門のことを覚えてゐる、こゝではその口碑をたよりに藤左衛門物語の概略を記してみよう、これが完成は同好の後進を俟つて他日を期するほかあるまい。

大名華やかなりし頃お駕籠や馬で賑はつた中仙道を乗合にゆられながら安中、原市と過ぎ九十九村に入れば、黙々として田畑に働くお百姓の姿にもなにか知ら胸を衝くものがある、増田川の袂で乗合を捨て橋を渡り右手の河原へ下がると義人潮藤左衛門處刑之跡(註四)と記した棒杭が一本立つてゐる、此處が享保十三年眞夏の六月二十九日人々慟哭のうちに義民藤左衛門が斬首された跡なのである。

享保年間、安中領主板倉伊豫守の財政は極度に行詰まり、その結果、税金は日増しに重く遂に種粃や戸障子にまで課税するやうになつた、この地方に今でも残る古い家屋の絲屋がみんな申合はせたやうに格子戸つくりとなつてゐるのは當時開けたての出来る障子だと課税されるので、それを逃れるため苦しまぎれに不便な格子戸つくりにかへたものなのである、かやうなわけで領内の村々は年々淋れる一方、あげくの果は山野に流離して餓死するものまで出た。

この時九十九村の名主をしてゐたのが潮藤左衛門であつた、勿論これより先、藤左衛門は村人の窮狀を見かねて幾度か減租を安中城主に嘆願したのであつた、しかし百姓の窮狀など聞き届けられない様な御時世ではなかつた、その度に藤左衛門は無念の涙にくれるばかりであつた、かくては最早非常の手段に出るより策なしと悲壯にも直訴決行の肚をきめた藤左衛門は安中領三十一ヶ村の名主に相談を持ちかけたのが享保十二年の春であつた、

其頃大江戸では一代の名奉行と謳はれた大岡越前守が徳川の天下を窺齎する天一坊なる者を檢擧、退屈で仕方ない江戸市民はこの時とばかり。

ためなら儂がやるべえ」と名乗つて出る者も無いほどに壓政のため心身共に疲れ切つてゐた、それではと、こゝに藤左衛門はいよゝ副名主、中島庄三郎と謀り、直訴を決行することになつたのである。



義民藤右衛門の墓

。やんやの拍手喝采を惜しまなかつたくらゐ江戸市中は飽食暖衣してゐたといふのは二年後の享保十四年頃の話、ところどころでこゝ西上州の安中領はこれとは全く反對に火の消えた有様、相談を持ちかけられても後難を恐れた名主共には「村の衆の

直訴のため江戸へ上つた藤左衛門と庄三郎は今か／＼と機会を狙つてゐたが心はせくばかりでなか／＼好機は廻つて來なかつた、そのうち懐中のものもだん／＼乏しくなつてきたので庄三郎は藤左衛門を江戸の客舎に残し、自分は一先づ運動資金の調達に遙々國元へ歸ることになつた。

その時、懐しい國元で庄三郎が見たものは何であつたか、安中領主は既に藤左衛門の計畫を探知し事起つては面倒と、躍起になつて藤左衛門の行方探索の眞最中で村々の辻々には高々と「潮藤左衛門を捕へし者または隠れ家を密告候者には米二十俵金五十貫を取らせるもの也」の制札が立てられ、藤左衛門は懸賞金付きの立派なお尋ね者となつてゐた、安中領のきびしい探索の眼を恐れられたか懸賞金に眼が眩んだか庄三郎は江戸の宿舎で首を長くしながら今日は歸るかあすは戻るかと首を長くして自分を待つてゐる藤左衛門の隠れ家を密告してしまつたのである(註五)追手は直ちに出勤とうとう藤左衛門は江戸の隠れ家で無念にも捕へられ九十九村へ護送される身となつた。

荒れ果てた彼の生れ故郷九十九村の田畑を軍鶏籠の中から藤左衛門はどんな氣持で眺めたらう、何んとかして村々領内の人達を樂にして上げやうとしたのにみんな水の泡になつてしまつた、それもこれも庄三郎の奴が密告したばかりにこんなことになつてしまつたのだ、ハツ裂きにしても飽き足りない奴だと唇をぎり／＼と噛んだ時に野づらを渡る風が横髪を掠めて吹くと可愛い妻子の面影が藤左衛門の腦裡を過ぎた、村の衆のために處刑される己は本懐だが、妻子はその後どうしてゐることだらう不惑な者達、思はず瞑目した時に軍鶏はゆらりと動いて坂を下る鹽梅、ハツとして眼を明ければ見渡す限りの増田川原、けふも上天氣で蟬しぐれが河原にしみるやう「憎い奴は庄三郎、あの世から祟つて／＼祟り抜ききつと黒土にして見せる」裏切者庄三郎を呪ひつゝ藤左衛門が處刑されたのは前にも記したやうに享保十三年六月二十九日と傳へられてゐる。

藤左衛門は事成らずして庄三郎を呪ひつゝ遂に曝首となつた、しかし安中城主板倉勝清は第二、第三の藤左衛門の出現を怖れるのあまり結局、減租を斷行せざるを得なくなり間もなく安中領にも

善政を謳歌する百姓の盆歌が各所で景氣よく聞かれた。

これは後日物語となるが彼の怨靈が祟つたのか裏切つた庄三郎一家にはその後奇怪な變事が次々と續いて到頭みんな死に絶えてしまつた、藤左衛門の處刑後幾年でもなかつたといふことである、まことに因果應報、惡因惡果とは宗門のざれ言では無いのである。

その後二百餘年、昭和二年の六月二十九日、藤左衛門の命日に初めて藤左衛門の血をひく九十九村の潮豊次郎さん(註五)や勘龜さん(註六)等十一名の親戚縁者が刑場跡へ松を植ゑ埋もれたこの義人の靈を慰めた、しかしこの記念の松も、なんたることぞ、その年秋の大水で跡かたもなく流されてしまつた。

(註一) 一説には家老某の惡政とも傳ふ。

(註二) 潮家の先祖は六條判官源爲義の九男櫻井越中九郎源義成で伊豆國潮郷に住みそれより十一代潮長門守包元が上州に來つて九十九村に土着、藤左衛門はその子孫といひ傳へられてゐる。

(註三) そんなわけでこの義人のお墓も公然と建てることが出来ず纔かに親戚の人がきびしい探索の眼をぬすんで九十九村の國衛の屋敷そばの竹藪の奥深くこつそりと粗末な自然石で墓をつくり藤左衛門の靈をなぐさめてゐた、その正面には智劍道清信士、裏面に享保十三年六月二十九日と刻まれてゐる、その傍らにも一つ、唯園妙意信女、明和七寅六月三日と刻んであり、小さい粗末な自然石の墓石が立つてゐる、藤左衛門の妻女某の墓である、この地方ではつい最近まで毎月十六日(藤左衛門の處刑の日)は二十九日だが、十六日は捕つた日と傳へられる)を命日と定め近所隣りで寄合ひひそかにお念佛を唱へて冥福を祈つてた。

(註四) 刑場下の橋は藤左衛門橋と呼ばれてゐたが昭和十年の大水で流失その後改築されて姥堂橋と改名されてしまつた。

(註五) 藤左衛門が捕へられたのは一説によると將軍へ直訴したためともいはれるが、庄三郎の密告で事前に捕へられたといふ説が有力である。

〔追記〕 九十九村小日向山王の郷名井だつた小板橋園治氏方の古い書類の中に「直訴事件の連累者は當村には

一人も無之候也」と當時安中城主へ提出した書類の控へがある、當時安中藩が藤左衛門の連累者を如何に嚴
探してゐたかがこれでも判る。

奇僧風外和尚

「八犬傳」にも登場する

雨こんく降つて来た、天神堂の坊さんに、養笠もつてゆかう

これは神奈川縣足柄下郡真鶴町地方で昔から唄はれてゐる子守歌の一つである、昔風外といふ坊
さんが町の天神堂にゐて雨がふつてくると簑笠代用に百貫匁もあらうといふ庭の根府川石（註）を
頭にのせて、平氣な顔で町を歩いてゐたので、いつしかこんな子守歌に唄はれ、今なほその徳が慕
はれてゐるのだといふ、かうして遠く真鶴の子供達の間にまで有名な奇僧風外も、出身地の上州へ
くると案外馴染みが浅く、知らない人の方が多い。

（註）根府川石は薄い平なそげ石で熱海線根府川驛附近がその産地である。

風外は碓氷郡土鹽村（今は細野村の字）の生れで

名は慧薫、禪僧、幼にして穎悟人に絶す、長ずるに及びて剃髮佛に歸す、智徳廣大にして貴賤尊信す、資性畫
を好む、かつて達磨の像を畫く、筆氣清逸

と「大日本人名辭書」にある、今から三百七十餘年前の永祿十一年土鹽の奥千ヶ瀧下で生れた、末

裔だといふ同村農原田靜策氏（六八）は

私から十一、二代前の人らしいです、私の家は數代前に火事で焼けるまではずっと瀧へ寄つた方にあつたんだ
といひますから風外の生まれた家は今のこの私の家のところではありません。

といつてゐる、何歳頃であつたかとにかく風外は同村の曹洞宗乾窓寺（現住足利一雄氏）へ弟子入
りした、こゝで暫く修行した後、乾窓寺の本寺に當る同郡後閑村の長源寺へ移つた、長源寺に残つ
てゐる記録によると第十七世名國宗譽大和尚（慶安三年四月十七日遷化）に四人の弟子があり。

三州巖龍、長源寺十八世となる。

機弁祖眞、同寺十九世となる。

機外典逸、同寺二十世となる。

風外慧薫、行脚に出づ。

と、風外が行脚に出たことがはつきりしてゐる。

行脚に出た風外は飄々として諸國を遍歴、六十一歳の寛永七年の頃、相州足柄下郡成田（今の豊
川村）の成願寺住職として現れた、ところが、この成願寺住職はほんの僅かの間で、フラーリとそこ
を飛び出すと、國府津町在田島村の山中にある洞窟に隠れてしまつた、この洞窟は今でも風外窟と
呼ばれて残つてゐる。

西に箱根山脈とその上に富士の高峰を望み前は洋々たる海を控へて眞鶴岬の鬱蒼たる森林の見える景色のいゝ
ところ、蜜柑畑の上の高い芝山に穴が八つ横に並んでをります、これが風外窟と呼ばれてゐる洞窟です、
達磨さんの繪が非常に上手だつたさうで食べる米がなくなると達磨の繪を描いて洞窟の前に懸けて置いたさう
です、すると繪の欲しいものが何程かのお米を持つて行つて繪と交換して來たといふことです。

と風外和尚の遺跡を訪ねたことのある原田氏は語つてゐた。

この洞窟生活時代の逸話としてこんなことが傳へられてゐる、或るとき若い修行僧が道を求めて風外を訪ねて来た、風外も喜んで歡待し翌朝は自ら飯をたいてもてなさうとしたのであつたが、椀が一つきりない。

「あなたは椀をお持ちかな」

と若い修行僧にたづねたが、持ちませんといふので「では少しお待ち」と穴から出て行つたがやがて歸つて来た風外は、手には何處で拾つて来たのか髑髏を下げてゐた、修行僧が變な顔で見ると風外は平氣なものでその髑髏へたきたての飯を盛つて「さあおあがり」と出した、修行僧の若い心はあまりのことに口も利けずにブルブルした。

「さあおあがり」

風外がもう一度さういつて髑髏の椀を突きつけたが若い僧の手はどうしても出ない

「これが穢いとも思ひますか」

と風外は靜かに髑髏を下に置くと傍らの杖を取るが早いか

「そんなことで出家の修行が出来ると思ふかッ」

と若い修行僧の肩先をびしりと打つた、續いてまたびしり、びしりッ、修行僧は耐へかねてたうとう洞窟から逃げ出してしまつた。

こんなことがだん／＼傳はり傳はつて風外の洞窟生活は有名になつていつた。

「生佛様が穴の中に住んでゐる」

といふ評判がたつて、近郷近在から一目でいゝ生佛様を拜んで來ようといふ熱心な人達が毎日この

山を訪れて、風外窟は押すな／＼の賑はひとなつた、さあかうなると今度は風外が洞窟のなかにゐられなくなつて逃げ出した、さうして眞鶴の町へ下りて來たのである、山から海岸へ下りて來た風外は天神堂を開基してこゝに住んだ、風外の刻んだといふ小さな石宮が今でも残つてをり、風外の居た跡へは昭和十年、當時眞鶴町長で熱心な風外研究者であつた松本尠氏が篤志家の喜捨によつて「風外庵」といふお堂を建てた。

風外の歿年は未だに判然とせんが眞鶴には二十年の餘ゐたことは遺墨や記録類によつて想像出来る、百貫目もある根府川石を頭にのせて簀。



風外和尚像

笠代りに雨中を歩いてゐたのはこの時代、小田原城主稻葉正則が高風を慕つて自ら駕をまげ、天神堂に風外を訪ねたり、小田原長興山紹太寺開祖の鐵牛和尚(註)が風外に教へを乞ふたのもこの時代であつた。

(註) 鐵牛は石州(島根縣)の人で寛永五年に生れ元祿十三年七十三歳で歿した、黄檗の鐵牛として高名を謳はれた、小田原紹太寺、江戸本所弘福寺を開山した。

小田原の城主稻葉正則が祖母春日局追悼のために寛文九年城下へ創建した長興山の開祖に鐵牛を迎へたのは風外の推舉によるものであつた、大日本人名辭書によると長興山は正則が風外のために

建てたのであつたが風外が固辭して受けないうで鐵牛を推薦してきたやうになつてゐるが、寛文九年長興山開基の年は鐵牛が四十二歳、風外は百二歳になるわけで、いかに長命でも風外が百二歳まで生きたとは信じられないから「風外のため」云々とは嘘だらうと最近眞鶴の元町長松本尠氏などはこの誤りを指摘してゐる、正則侯と風外とは時々會つては話し合つてゐたので、そんな折に風外が「鐵牛といふ奴は將來頼もしい男だぞ」

と正則侯に話してゐたことから、正則侯が鐵牛と識るやうになり、後に長興山開基として鐵牛を迎へたものだらう。

眞鶴に貴船神社といふのがあつた、この神社に「貴船神社縁起」といふ風外の寫本が現存してゐる、その寫本の最後に

于時慶安三庚刀季、風外八十三歳時寫焉

と書いてあるところからすると風外は慶安三年の八十三歳の時まではまだ眞鶴にゐたことが立證されるのだがその後の記録はない、とにかく眞鶴生活は二十餘年の長い間であつたが、風外はこゝもまたわが終焉の地とすることが出来ず、八十四歳のころ再び飄然と旅に出たらしい。

旅に出た風外は東海道を下つて濱名湖の北、金指町(靜岡縣引佐郡)の町外れで庵を結んだ、こゝに何年ゐたかこれもまた不明だ、ある日村人に青銅錢三百文をやつて庵の前に穴を掘らせ、掘り終ると穴のなかへ入つて坐禪の姿勢をとり

どうかこのまゝ埋めて下さい

といつた、いはれる儘に村人は土をかけ始めたが、これはをかきなことだと氣がつくと恐ろしくな

つて逃げ出して了つた、さうして村の人達に「大變だ〜」と報せて歩いた、みんなが驚いて庵へ駆けつけて来たときは風外はもうその時の儘の姿勢で息絶えてゐたといふのである、金指町から氣賀町へ通ずる道の傍らに「石佛畑」と呼ばれる畑があり、その眞ん中に二尺四方の石が一つポツンと置いてあるこれが風外の墓地だと傳へられてゐる。今は周圍に粗末なものではあるが柵がめぐらされてゐる。

奇僧風外は若いときから諸國を遍歴してゐたがそれでなか〜孝心の深い坊さんだつた、旅に出てゐても時折りは細野村土鹽の老父母への便りだけは忘れなかつた、眞鶴生活時代には亡き父母を追慕してその石像を刻み朝夕香花を手向けてゐた、石像は八十歳位の老夫婦の面影を寫したもので線の柔かさはいかにもやさしい翁と媪を思はせるものがある、この石像は風外の歿後、稻葉侯が越後高田へ國替へるとき、これも鐵牛の開基になる東京本所の弘福寺に納め、風外に代つてその冥福を祈つた、今でも弘福寺にある、石像は百日咳に靈驗があるといふので昔から「咳の爺婆」といつて參詣者が絶えない、風外といふ名から風を外にするといふ迷信をかついだのにはじまつたらしい。

風外の有名だつたことは馬琴の八犬傳にも登場してゐるのである、その第五百五十四回に

穴の内に菰莖わづかに敷きて、端然と結跏趺坐したるひとりの衰法師居り形貌はやせて千歳の松の如く、手脚は細りて蟠まる竹根に似たり

と、風外道人といふ自由に風を御す法師のことが出てくるのだが、これは明かに我等の風外をモデルにしたものに違ひないと先年物故した碓氷郡安中町安中教會の牧師柏木義圓氏がいひ出した、しからば馬琴はどうして風外を知つたかといふと柏木牧師の説はかうだ。

文政七、八年の頃、江戸の文人墨客が毎月會合して耽奇會と名付けて所藏の珍品、奇物を持寄つて展覽批評し合つた時のことを馬琴が収録した「耽奇漫録」に風外の自畫像と稱するものが載せてあり、また享保年間に編纂された「日本洞上聯燈錄」といふ本にも風外慧薫傳といふのがあるので博學の馬琴がそれを讀んだり見たりして風外の奇行に興味を持ち八犬傳中に登場させたものに違ひない、決して架空の法師ではない。

とかう柏木牧師は斷定するのである、とに角「八犬傳」に上州生れの坊さんが登場してくるなど、いかにも面白いではないか、しかもこの説の主唱者柏木牧師は明治初年細野村の小學校長をしてゐたとき風外が少年時代を送つた乾窓寺に一年程下宿したことがあつたといふのである、當時は柏木牧師も風外のことなど知らなかつたわけ

そんな偉い坊さんがゐた寺に下宿してゐたとは知らなかつた
と生前よく會ふ人ごとにその奇縁を感慨深く話してゐた。

▼附記 風外といふ名は外に風外本高といふ人もゐる、上州の風外は慧薫で、本高の方は伊勢の國出身の禪僧だ、三河香積院に一大叢林をなし、香積院の風外といつて高名を謳はれた人、弘化四年六月、六十九歳で入寂、前橋龍海院の第二十八世で後に曹洞宗大本山永平寺管長となつた奕堂、「藏雲和尚と良寛」の藏雲など、この風外本高に教へを受けた人達である。

藤岡の武井泰郎

天狗黨の同情者

明治維新のころ、多野郡藤岡町で文武兩道の師と仰がれ、地方青年の人望を一身にあつめてゐた武井泰郎翁は文政八年藤岡の絹問屋兵左衛門の一人息子に生れたが、絹問屋とはいへ蘆田五十騎の一人武井民部の後裔で武門のほまれ高い家だつた。蘆田五十騎といふのは信州の蘆田えもんのかみ(註一)の遺臣達のこと、元和年間に藤岡へ來て蘆田城に據つたが、徳川の世となつてから廢城し勧められて徳川氏に仕官したり、或ひは土着歸農したりして四散してしまつた。現在藤岡町に残つてゐる五十騎の後裔といへば武井泰郎翁の子孫(養子)と本庄辰之助氏の二家ぐらゐのものであらう。

祖先の血をうけ繼いでか泰郎翁は幼年のころから算盤いぢりが大嫌ひで、當時この地方で有名だつた劍客秩父の中西忠兵衛(一刀流)に劍を學び、江戸へ出ては中澤雪城に書を學んだのであつた。文武兩道を修め若くして近隣に武井泰郎の名は喧傳されたが、感ずるところあつて二十七八歳のとき飄然として家を出て關西方面に遊び、更に諸國を遍歴した、いはゆる武者修行である。堂々たる體軀に兩刀をたばさみふくべ笠(註二)を被つて潤歩してゐた若き日の翁の姿はたしかに異彩を放つたものらしい、時代は安政萬延といふ物情騒然たるときである、澎湃としてわき起る尊皇攘夷の

熱風のなかに、新日本建設のため身命を捧げて奔走する憂國の志士達を目のあたり見ては、翁もまた何をか感ぜざらんやである、翻然悟るところあつて藤岡へ歸ると、直ちに成道寺のなかに塾を開く一方、道場も建て、この地方の青少年に尊皇の大義を説いたのである。藤岡町は安永四年以來水上美濃守の知行所であり、直ぐ近くには將軍家直支配の岩鼻郡代もゐたにかゝはらず、當局の干渉も及ばなかつたところをみると、翁の盛名がいかに高く、嚴としてその威風あたりを壓してゐたかわかる。

元治元年三月、水戸の藤田小四郎等の筑波舉兵の報が傳はつたが、五月には、



(藏氏司暉井武) 墨遺郎泰井武

● 早くも天狗黨(註三)軍資金調達係として猿田忠夫、藤田芳之助(註四)が上州路へ入つて來た。

かれ等は先づ桐生方面で五千余兩を徴發、次いで藤田小四郎とは知友であつた武井泰郎を頼つて藤岡へ乗込んて來た。翁は欣然としてかれ等を迎へ勞を犒ひ資金調達のことを引受け、同町の舊家大戸甚太郎(當主俊雄氏)新井喜平(絶家)を説得して百兩をとゝのへてやり、その後武田耕雲齋藤田小四郎の一行が西上の途中藤岡町を通過したときにも食糧醫藥などに至れりつくせりの便宜をはかつてゐる。

泰郎翁は明治新政となつてからは學制發布とともに藤岡小學校校長となり、次いで万場校長とな

つたが中風を病んでからは家塾にあつて靜かに餘生を送り、明治三十一年一月十五日七十四歳で歿した。死に先立つ二年明治二十九年十一月翁の徳を慕ふ門弟達が同所諏訪神社境内に壽碑を建て、その業績を顯彰した、翁の門弟生残りとしては同町の淺見作兵衛さん(七八)だけとなつてしまつた。子供の一人もなかつた翁(註五)のところへ十七歳で親類筋から養女に來た、きよさん(六八)は翁の思ひ出を次のやうに語つてゐる。

「實に立派な體格でした、晩年中風にかゝつてからあまりやらないやうにしてゐましたが、お酒は若い頃相當に頂いたやうで御座いました、そばなども一升ぶちといはれたほどでしたから體格がよう御座りましただけに食もよかつたので御座いますネ、朝起きるとかならずお伊勢様と天朝様に向つて遙拜を怠らなかつたものです。父の若いときは勿論存じませんが私共の知つてゐる父はものにこだはらないおとなしい好々爺といふ感じの人で御座いました。劍道と書はなか／＼有名なものでしたが詩文のことになりますと何も残つてをりませんし、恐らくこの方面のことはあまり得意ではなかつたのではないかと思はれます。」

當時の屋敷跡(同町三丁目)は今も白石藏三郎氏の所有となつてゐる。

(註一) えもんのかみは衛門督か衛門守か或は衛門頭か、土地ではえもんのかみといふだけで如何なる文字が當てはまるか現今は不明である、御示教下さる方があれば幸甚である。

(註二) 大きな瓢箪をくりぬいて笠にしたもの、藤岡町の星野與四郎氏所藏

(註三) 此頃天狗黨の本據は野州太平山にあつた。

(註四) 猿田忠夫の一行はその後更に下仁田で千六百兩を調達したが同年末碓氷郡から高崎へ入る途中豊岡村で捕へられ、藤田芳之助は放還されたが忠夫は翌年二月四日高崎藩の刑場で斬罪に處せられた、享年廿一。

(註五) 當主暉司氏(五〇)も養子で鬼石の校長をしてゐる。

孝女 徳江 茂世

父の減刑を嘆願して自害

佐波郡三郷村薬師山鑛泉を訪れる人は、鑛泉宿と並ぶ薬師さまの境内に建つてゐる碑をいやでも見ないわけにゆかない、この碑の表面には「孝女茂世の碑」と刻まれ、その下に建立者、京都和絲絹問屋島屋佐右衛門組中の名が記してある、鑛泉宿にかこまれた孝女の碑、この奇異な對照感に時々碑の前で呆然佇立してゐる浴客もある、ところでこの碑といふのは不慮の災難から獄舎に繋がれた父を救ふため、艱難辛苦の果てあたら二十二年の生涯をこゝで淋しく散つていつた孝女徳江茂世女を記念したものだ、が同女の事績についてはどういふものか資料が餘り存してゐない。

徳江茂世女の研究家多野郡新町鐘紡女子青年學校囑託松田鑽氏の話

茂世女は文化九年多野郡藤岡町幕府定飛脚問屋島屋支店の幸領（支配人のやうな役）をしてゐた島屋藤兵衛といふ者の一人娘として呱呱の聲を擧げました、茂世女の祖先はこの欄ですでお馴染みのいはゆる「蘆田五十騎」の一人日向藤兵衛榮清といふ人物で、天正十年天目山の戦で武田氏が滅亡すると同時に主君蘆田うゑもんのかみやすかつと藤岡城に據りましてひそかに自家再興をはかつたのが亂離を極めた戦國時代の世相に無常を感じたものでせう、武士道を捨て、藤岡の近傍に土着してしまひましたが、茂世の父島屋藤兵衛の代には飛脚屋として何不自由なく暮してゐました、島屋といふのは表向きは飛脚問屋でしたが主として同郡地方で産出する日野絹、藤山絹を本店に當る京都の織物問屋島屋へ送る現在の運送店のやうなこともしてゐたし、また絹を織つて生活してゐた地方農民の金融機關でもあつたから島屋の勢力はこの地方でなかなかのものだつたらしい。

天保三年も全く押し詰まつた十二月、幕府へ絹の納税を行ふため藤兵衛は供を随へて中山道から江戸へ出發した、途中桶川の宿で一行はある料亭に駒を止めて休息したその日は非常に寒かつたので藤兵衛は寒さしのぎに一杯はじめたが生來の酒豪家だから、呑むうちにすつかりいゝ氣持ちになつて、いつか馬子



茂世の碑

さア、大變なことになつた！
酒の酔ひも一時にさめはてた藤兵衛をはじめ供の者は、桶川の宿は勿論近郊一帯を血眼で探しまはつたがすでに後の祭で納税金の行方は杳として知れなかつた、悄然として藤岡町に歸つた一行に何が待

つてゐたか？

この始末は本店の京都島屋へ詫びを入れる位ではすまなかつた、といふのはこの騒ぎが遂に幕府の耳に入り

「納税の大金を預る身で公儀も憚らず白晝飲酒に耽るばかりか、見張りの者もつけずに納税金を盗まれたとは

とばかりに幕府はカンカンに怒つてしまつた、そして藤兵衛は事件の責任者として無期限入牢を言渡されたのである。

藤兵衛入牢と決まつて、その頃群馬郡の徳江某のもとに嫁してゐた茂世女の心痛は一方でなかつた、悲嘆にくれる實家へ立戻つた茂世女は

この上は八百萬の神に願つて大金の所在を突き止めよう……

と悲壯な決意を固めると如何に父のためとはいへ霜さへ凍る天保四年の正月から二月にかけて藤岡町の浅間神社へ斷食祈願に籠つたがどうしたものか茂世の心を罩めた切なる斷食祈願もさつぱり効果目がなく大金の所在は依然わからなかつた。

だがこんなことくらゐでは茂世の決意は挫けぬばかりか斷食祈願の不成功ではじめて

坐つて探し出さうとしたのが誤り、所詮神や人頼みで願ひといふものは叶ふものではない

と氣がつき納税金の行方を求めてある夜更け家人にも告げずにこつそりと旅に出て了つた。

手掛りとなるやうな話でもありはせぬか

と中仙道から東海道まで足を延ばし宿屋の隣客の一語にも耳欝てる茂世の苦勞も知らぬ顔に懐中の多くもあらぬ路銀は少なくなるばかり、天保四年五月探しあぐねて故郷へ戻る途すがらたどりつたのが佐波郡三郷村の薬師山鑛泉だつた、茂世女はこの時根も力も盡き果て、着物はボロボロに破れ軀は鶴のやうに瘦せ細り見るかげもない哀れな姿となつてしまつてゐた、すべてに見放された茂世女はこゝを最後の土地と定めて父の減刑を願ふ歎願書を懐中になし遂に自害を遂げたのである、

享年二十二であつた。

茂世の遺骸取片附けに當り、現はれた嘆願書は一讀人の胸を強く打つた、嘆願書は同村名主某から奉行所を通じて幕府へ提出され、死してもなほ父の減刑を願ふ茂世の孝心は到頭、報いられて藤兵衛はその後間もなく破格の赦免に浴した、それより二十五年後の安政二年五月九日京都和絲絹問屋島屋佐右衛門は不愍な最期を遂げた茂世女のために自害の土地薬師山鑛泉に同女の孝心を永久に傳へる碑を建立したのである。

釋放後の藤兵衛およびその屋敷跡などは何一つ明らかでなく孝女茂世を偲ぶには前記の碑と菩提寺である藤岡町一行寺にある島屋家の墓地と藤兵衛の子孫といはれる東京市江戸川區牛井小林廣吉さんが昭和四年五月に奉納した藤兵衛の道中差し一口などが僅かに残つてゐる位のもの、藤兵衛父娘のためにはまことに惜しい、以下菩提寺一行寺住職水上堯山師の談

島屋藤兵衛さんの菩提寺にはなつてゐますが、それが初代藤兵衛の墓だかたしかの記録もありません、二、三年前まで年に一回ぐらゐる子孫だと名乗る小林廣吉さんが墓参などに見えましたが近頃さつぱり音沙汰がありません、すでに他界されたのでないでせうか。

吉井藩主 松平信のぶ潑をき

安政大獄秘聞「水戸家上使」

世にいふ「安政の大獄」は安政五年の秋京都にはじまつてから江戸へ移り、翌六年にかけて続き、その間橋本左内、吉田松陰、頼三樹三郎、梅田雲濱等幾多忠誠憂國の志士が次々と獄に投ぜられていつた。人心は恐怖にをのゝき、幕府を呪咀する聲は巷に充ち満ちたのである。この時、この事件の最初の判決ともいふべき處断が、先づ幕府糾弾の急先鋒であつた前の水戸中納言齊昭と當主慶篤、一橋慶喜をはじめ水戸藩の鶴飼吉左衛門親子、安島帶刀等の上に下つた。安政六年八月二十七日である。

大老井伊掃部頭直弼の専断とはいへ上意には相違ない。上意は上意としていゝが相手が水戸家となるとこの上使、生半可な者では勤まらないのである、一體誰をやつたらいいか。この日の朝の間題となり、老中でもあれこれ頭をひねつた擧句、上野國多胡郡矢田（吉井町）の藩主松平左兵衛督信潑なら家格といひ、人物といひ適任であらうといふことになり、水戸殿へ「御達の儀有之に付上使仰付候」と押しつけて來た。信潑の始祖は藤原信平で吉田東伍著「大日本地名辭書」によると

信平は鷹司太閤信房の第四子で家光夫人滿媛の弟、三代信清のときから上野矢田に一万石の所領を賜はり、諸侯に列し、大廊下詰を命ぜられたとあり「元治武鑑」にも吉井の松平家は紀州の次、水戸家の前に記載されてゐる。

ところから見ても家格は特異なものであつた。時が時であり役目が役目だから信潑も極力辭退して、大目附遠山隼人正を通じて再三お断りを申出たが「どうか枉げて」と拜み倒しに無理遣に押しつけられ、成瀬隼人正正肥を差添役として行くことになつた、信潑三十五歳。

上意によると前中納言齊昭が「永蟄居」當主慶篤が「差控」といふことになつた。上使心得御達書はさすがの老中も水戸の老公を憚つて駒込屋敷（老公）へは行くに及ばぬ、小石川屋敷（慶篤）だけでよいしかも二通一緒にそれも慶篤に面談せず家老の者に申渡してくればいゝといふのであつた。信潑は「ふふん」と腹のなかで嘲笑した、これほどの大事を一方だけに取次げばいゝ、代理のものでいゝとはなんたる腰抜け共だ、幕府の屋臺骨もぐらつき出したわいとをかしくもなつた。

信潑は成瀬と駕籠を連らねて威風堂々（？）小石川へ行つた、出掛けるときは夕頃だつたので、小石川へ着くころには提燈に火を入れなければならぬほどあたりは暗くなつてゐた。ところが水戸屋敷の門前にかゝるころから怪しい浪人風の者が行列の前後を徘徊しはじめた。夜のこと、その人数はわからないが、かなり多人数であるらしく門前へかゝつたときには行列を取圍んでしまつた。さうして口々に

「今日の上使はいかやうのお達しか、お聞かせ願ひたい」

と返事の如何によつては一步も門内に入れんぞ、といふ殺氣漲る氣配が駕籠のうちの信潑にも察せられた。浪人達は憂國の至情からやむに止まれず水戸を脱藩した志士達であつた。

「無禮があつてはならぬ上使だ、上使だぞ」

と水戸家のものも門内から走り出て來て一應は混亂を制止しようとしてゐるのだが殺氣立つてゐる

浪士達は耳にも入れない。なかには上使を罵倒する聲なども亂れ飛んで、一騒動なければ收まらない險悪さとなり、信澄の供頭須田修介など遂に抜刀して駕籠のうちの上使をかばった。ところが一方駒込屋敷の老公は折柄夕食の最中であつたが上使として信澄が小石川の屋敷へ行つたといふことを聞くとびつくりした。

「余人はともかく左兵衛督はさる者、粗暴の振舞があつてはならぬぞ」

と夕食を放り出して馬をひかせると老公自ら汗馬に鞭打つて小石川へ駆けつけた。来てみるとこの騒ぎだ

「静まれ、静まれ」

と制止した、さすがに老公の姿を見ては浪士達も手の出しやうがない、いつか闇のなかへ消えてしまつた。信澄も不思議に思つたがすつと後になつてからこのときのことを齊昭から聞いて「さてこそ」と笑ひ合つたことがある。これは餘談である、信澄は水戸家老興津藏人、杉浦羔次郎に上使の趣を傳へて歸つたが、門前のこの騒ぎはその夜のうちに老中の耳にも入り、重大問題化さうとしてゐた。

前夜遅くなつたので翌日になつて信澄は登城し、上使の滞ほりなく済んだことを報告したのである。

大老井伊直弼、老中間部詮勝、松平乗全、内藤信親、脇坂安宅以下がずらりと居並んでゐた。

信澄は一通り報告の後、門前の異變については

「この上、ことを荒立て禍亂を招かうより天下のお爲め、何卒寛大の御處置を」

と穩便の處置を願つたが間部詮勝がなか／＼聞き容れない。

「天下の大法は曲げられない、以後の見せしめにもきつく處断すべきだ」

と強硬に出た。

「ことは路傍の輕輩のしたこと、水戸家の知つたことではないではないか」

と信澄は身命を賭してもこの際大事を未然に防がうと昨晩から深く決意してゐたので詮勝にくひ下つた。

「禍亂の虞れあらば未萌に剪除することを天下の御ため」

と飽くまで詮勝は突つか／＼つてくる。しばらく押問答の末願ひが容れられないと知ると信澄も激して

「御貴殿は文學の譽れも高く、先般京都の御處置など天晴れな御手腕かなと感服してゐたが見ると聞くとは大きな相違、いさゝか國內の情勢にも疎いでは御座らんか」

と毒づき内憂外患、緊迫しつゝある國情を説いて大いに肉迫、時局收拾の上からもこの問題は聞き流しにすべきである、と辯明につとめた。

それでも分らないとなると

「問答無益だ、この上は刺違へて武道の意地を立て禍根を絶つまで」

と上着をはねて脇差の柄に手をかけた、眞つ白な帷子の左袖にはかねて覺悟の

國のためつくす誠の武士は家も惜まず身をもしまさず

右袖には

今こゝにのこす言葉をわするな上跡の眼はよしかけずとも

と辭世の二首が認めてあつた。

このとき大老井伊直弼がつと立つて兩人のなかを隔てた

「左兵衛督の申立、一々もつとも不肖なれど拙者大老として引受け申した」

とこれ以上この問題の追究はせんことゝなつて、事なく落着いたのである。

吉井藩主松平信濃の生涯を飾つた安政大獄余聞「水戸家上使」のあらましであるが、花も實もある處置、實際肚のすわつた人物でなければ出来ぬ男子一代の藝當なりと申すべきである、この信濃も明治廿三年九月東京で歿した、享年六十六、當主信康子爵は京都に現住してゐる。

八人力 大溪 孝順

天災に挑む小野村の豪僧

俎のやうな日和下駄をつゝかけた大入道が百貫もの大釣鐘を手玉にとつた……といへばなんだ、少年講談の三好清海入道ぢやないかと思ふかも知れないが、こんな怪僧が上州にもゐたのである。多野郡小野村大字森の畑中に竹と松の翠りに圍まれた少林山泉通寺といふ閑雅な古刹がある、現住職峰岸順應師の法の祖父でつまり同山第十七世の住職大溪孝順師がこの豪傑和尚なんである。餘ほどの門閥でない姓を許されなかつた頃なので、號を大溪、僧名を孝順と稱してゐたが、後姓を許されて號をそのままに姓に代へたものである、越後魚沼郡の人である。

最初は泉通寺の本寺群馬郡室田町長年寺の副住職として据り、間もなく末寺の同郡古巻村有馬泰叟寺住職に轉じて、泉通寺住職に納まつたのが嘉永七年正月（安政元年、八十八年前）それから更に轉じて、長年寺住職に榮進、同寺卅四世として明治廿二年八月十五日室田で病歿した、非常に火災に縁の深い人で、長年寺といふのが六十四年間に三度も炎上した、はじめは孝順和尚の副住職時代、次が正住職になつてからで、この二度目の建立に當つて和尚は槍ぞつきの豪壯華麗な縣下第一を誇る大伽藍を新築したが、明治卅七年またも劫火に見舞はれ、惜しくも車裡を余すのみで、丸焼けとなり、いまなほ本堂のない寺として残骸を暴してゐる。

泰叟寺も泉通寺も焼跡へ、焼跡へと和尚にお鉢が廻り、みんな自力で立派に再建したわけだがこの普請にからんで「八人力和尚」といふ面白い話があるのである。

長年寺二度目の建築の時材木を烏川の上流から筏で流したことがあつた、山から川岸まで運べない重い大きいのは人足が擔いだが、その中に一本どうにも手に負へない巨木があつた、人足どもも困却してゐると、和尚はやをら肌ぬぎとなり、先の軽い方を八人の人足に擔がせ、自分は根元の太い方を軽々と一人で抱へ「ホーラ、ホーラ」と掛聲で勵ましながら太鼓腹をゆすつてぐいぐい押すので、八人の人足どもは目に螢を飛ばして青息、吐息、和尚の怪力にすつかり恐れ入つて以來は「八人力和尚」と綽名を奉り、二目も三目も置いたといふことで事實だとすれば八人力以上あつたわけになる。

また泉通寺の普請の際にも建築材を人足が藤岡から運ぶ途中小野村中栗須の下り坂で神明神社の池に荷車ごとはまり込み、材木が數百貫もあるため引揚げられないとの報告を受けた和尚は「あす人足を増してからやれ……」と命じて置きその夜のちに一人で出掛けていつて荷車諸共引出し、寺へ運んで涼しい顔をしてゐたといふ、またこんな話もある、この普請には檀家も總出で手傳つた

が、ある日和尙は寺の庭に高さ五尺、口徑二尺四五寸、百貫近くもあらうかといふ大釣鐘（現在本堂の入口に假に釣つてある）を持出し、檀家の力自慢に三間位の棒に吊つて二人づゝで擔がせたが、大抵は歩くことも出来ずへたく、一番強いのでヨチ／＼數歩を歩く程度だったが、和尙は釣鐘の縁を両手で掴んで頭上たか／＼と差上げ、何回となく上下して見物の一同を顔色なからしめた。

和尙はまた時々檀家を見廻つたが決して座敷へはあがらず強ひてすすめられると「床でも踏み抜くと相濟まぬで喃」と恥かしさうに固辭して、特製の櫛の日和下駄を鳴らしながらダブ／＼と巨腹をゆすつて立去るのだつた。和尙の下駄は先年故人となつた同村の駕職で針谷某といふ人が長年寺に一足遣つてゐたのを家寶にともらひ受けたとがあつたが、いまはどうなつたか判らない、これを見たところのある現峰岸住職の話では「裏長屋で使ふ貧弱な粗位あつた」といふから筋骨隆々、相撲取りのやうな風貌が想像される、以上は豪傑としての和尙の半面を覗いただけだが、經世家としての他の半面こそ和尙の眞面目であらう。

その頃、百二十餘年間、村の農家は鑄川の水を引き中村堰、赤新田堰、立石堰の俗稱三堰によつて田畑を灌漑してゐたが、寛保年間大洪水に遭つて森新田、立石の兩堰は埋没、中村堰だけが厄を免れ以來この一本だけで用を足して來た、ところが、隣村美土里村上落合附近で鮎川と鑄川が交叉してゐる關係上霖雨や夕立がある都度、鮎川の水がどつと氾濫、鑄川と正面衝突して沿岸の泥土や石を浚ひ込んで鑄川の河床を塞いでしまふため、下流の小野村は水が出てあべこべに濁水に悩むといふ奇現象に數百の村人は總出で幾日も川浚ひをせねばならぬといふ有様で、米も蔬菜も思ふやうな收穫は到底望めなかつた、こんな状態を百餘年も繰返しながら徒らに天を仰いで拱手三嘆してゐる無智な農民たちに和尙は

「天災は人間の頭腦で克服出来る」

と説いて不精々々の百姓を狩出し美土里村上落合入口の大改修をはじめたものである。

和尙は鮎川と鑄川が平面交叉してゐるのに眼をつけ、これでは絶対に水禍は避けられないと先づ立體交叉を考案し交叉點を中心に鑄川の河敷をぐつと掘り下げ、鮎川の下を潜り抜けるやうにして幅約二間、高さ一間、分厚な栗板の埋樋をこゝに通すことにし、延長數百間の樋のトンネルを完成、更に居村まで約一里の護岸工事に着手した、孝順和尙の小野村在住は安政元年正月から同五年六月までと泉通寺の過去帳に明記されてゐるが恐らくこの丸五年半を寺の復興と灌漑工事に費したものだらう。

和尙は毎日里餘の道を工事場へ通ひ人夫や百姓を指揮監督し、力仕事には和尙自ら裸になつて例の怪力を發揮したものだつた。

用水堰は上落合北端から藪塚の北端で二本に分れ、一本は上栗須、中栗須、下栗須を經、神流村を通つて温井川に注ぎ、一本は小野村の心臟部中村から森、立石を通じて温井川に入るもので、兎に角幾多の困難を經てこの工事が完成するや水飢饉は嘘のやうにびつたりと解消し、村の田畑百五十町歩を潤してもなほ用水が使ひ切れず、下流の神流村西北部へ無料で送り、こゝでまた百町歩を灌漑更にその餘水を新町河岸町の水田にやるといふ打つて變つた豊かさとなつた、竣工式は岩鼻代官所で擧げ、孝順和尙は晴れの僧衣で出席、工事功勞者として代官から表彰され、大いに面目を施した。後年この栗板の埋樋は縣がコンクリートに改造したが、その他には一切手を加へず全部當時のままとなつてをり、近郷民は見事に實つた稻穂を眺め、たわ／＼に成つた農作物を見るたびに村の救世主として「八人力和尙」の遺徳を追慕してゐるのである。泉通寺現住職峰岸順應師の話

「孝順和尚は私の師匠の師匠、つまり法の祖父になるわけで血縁関係はないがあれほどの立派な仕事を遺した名物和尚を知る一つの文献も無く、唯口碑として傳へられてゐるのが残念です、それも私が死ねばあの大和尚も同時に口碑からさへ永久に消えるかと心淋しく思つてゐました……一度縣からも調査に來ましたが、そんな始末のものにならなかつたやうです」
(附記) この用水は三堰とも、中村堰とも呼び現在は中村堰で通つてゐる。

飛行機の元祖 坂本長十郎

紙張りの大翼で支那への夢想

「人間も鳥のやうに大空が自由に飛べたらなア」
と、まだ飛行機などの發明されなかつた昔、おそらく誰も一度はきつと、かうした憧れを持つたことであらう、その夢がやがて「どうしたら空を飛べるだらう」といふ人々によつて飛行機の考案が試みられて今日の發達を見た、昔の人達の考へた空飛ぶ方法は、幼稚極まるものであり、思はずブツと噴き出すやうなナンセンスを後世に傳へてはゐるが、なんとかして空を飛びたいと工夫を凝らしたその精神には感嘆すべきものがあり、まことに時代の先驅者たちであつたといへるのである、その先驅者の一人が明治初年、多野郡美九里村宇高山の栲山にもゐた、桶屋のてつつあんで通つてゐた哲三郎、本名を坂本長十郎といつた。

美九里村といへば藤岡町の隣村ではあるが栲山は人里離れた高い山の上にある部落だ、藤岡、鬼石間の縣道を通るバスを美九里村國民學校入口で降りてから栲山まで約八キロある、三名川の上流に沿つて西へ、山間を迂回しながら登ると高山の中組分教場へ出る、こゝから二キロの急坂を登りきつたところが栲山だが樹木の鬱蒼と繁つた細い山道は數歩行つては休みまた休まなければ堪へられない急勾配の曲りくねつた道である、山上に出るとホツとして俄に視界が明るくなつたやうな氣がする、桑畑を縫つて點々と人家が散在する。



家た居でん住が郎十長

見渡したところ七、八軒きりないやうだが、向ふの山かげこつちの森かげなどにそれでも三十戸の部落なのである、よくよくの用事でもなければ訪ねてくる人もないし、山を下る者もない、まつたく下界と没交渉だといつていゝ仙境である、この仙境に住んで桶屋のてつつあんは飛行機の考案に夢中だつたのである。

てつつあんの長十郎は最初から桶屋ではなかつた、代々の農業で、人間が器用だつた上に數へたらしく、評判が良かったのでだんくこれが本職になり、頼まれて藤岡町地方へ桶づくりに出

掛けることもあつた。

長十郎は數學を同郡平井村東平井の岸幸太郎(充豊と稱した、關流の算學者、明治廿八年五月病歿、歳五十三)に學んだといふ、點竄に通じてゐて明治九年の地租改正のときなど丈量や繪圖ひきに飛び歩いたといふから相當達者だつたに違ひない、この數學の知識があつたといふことが飛行機の考案をはじめさせたので、一介の桶屋さんがたゞの思ひつきから、空を飛びたいと考へ出したわけでは決してないのである。

長十郎の分家にあたる柗山の坂本榮十郎翁(七八)は

飛行機に凝つてゐたのは明治七、八年の頃ではなかつたかと思ひます、わし等の十二、三の時ですから一なんでも二間位もある大きな鳥の羽みたやうな團扇のやうなものを拵へたんですな、これを兩翼にして鳥の飛ぶやうに飛ぶつもりしかつたんです、俺は唐の國(支那)まで飛んで行つてみせるぞと口癖のやうにいつてましたがつたうとあれも夢に終りましたよ、算盤はなかなか上手だつたわし等もさんざ教はりに行つたもんでサ。

と追憶してゐる、長十郎の考へてゐた飛行機は今のグライダーのやうなもので、紙張りの翼をつくり漆を塗つて鳥の飛ぶやうに設計してこしらへ始めたものらしい、さうして高いところから飛び下りてその餘勢で翼を搏きながら、支那まで一気に飛んで行かうとしたのであつた、鳥を捕つてきては羽根と肉の目方をはかり、この重さでこのくらゐの羽が恰度いゝといふ風にいろ／＼と研究した。

骨が竹で、團扇のやうな翼を手を動かし足を踏んで飛び出す仕掛けであつたらしい、紙を張る糊のために小麦の粉を一呎も使つたといふ、二階で組立てゝさあ飛び出さうといふ段になつたら二階の柱が邪魔で飛び出せなかつた。

これは長十郎の隣家だつた坂本宇太郎翁(昭和十五年九月七日七十七歳で病歿)が生前よく語つてゐた話である、糊の話では高山の中組あたりでは

「飛行機に凝つて一反歩の小麥をみんな糊にしたさうだ」

といふ話も残つてゐる、とにかく長十郎の飛行機考案はその當時、村でも氣狂ひ扱ひにしてゐたもので「桶屋の哲は氣がどうかしたぞ」と誰も相手にしなかつた、だからどんなものを拵へたのかを實際に沁々と見たものはなかつたのである、チラツと覗き見た程度か、およその想像を語り傳へてゐるだけなので、まことに残念なことではあるが今となつてはどうにもならない。

村から相手にされなくなつても飛行機の研究に没頭してゐた長十郎はあれこれと試みた擧句、石油を使つて風船のやうなものを作らへたといふ、石油の煙を込めてふくらませ、揚力をつけようとしたのださうだが、どんな方法でやつたものか誰もしらない、そのころはまだこの邊は行燈の時代であつたし、人里離れた山のなかになつて石油を手に入れようといふことは容易なことではなかつたらう、そんなこんなですつかり貧乏してしまつて田畑、屋敷など人手に渡り榮十郎翁の話では

わしが十五のときにわしのこの家を新築し、その翌年長十郎が柗山を引拂つたのだから明治十一年でした。

すつからかになつて長女のたけが縁づいてゐる神田(美九里村役場のある附近)の冬木新四郎さんの家へ轉がり込んだのである、神田へ出てからはもう飛行機のことにはふつ／＼ともいはなかつた、元の桶屋職になつて家業に精勵し、やがて刻煙草屋を開業した、一時は機械を何臺も据ゑて人を使ひなか／＼大きくやつてゐたが煙草が専賣になるとこれも止めて高崎へ出た、それからのことはもう誰も知らない、七十幾つかでそこに歿したといはれてゐる、どつちにしても恵れた晩年ではなかつたらしい。

美九里村役場の古い戸籍簿によると

高山村柗山六十六番地、父多四郎、坂本長十郎、天保十二辛丑年九月十五日生

とあり、安政四年、十七歳のとき同村冬木常吉二女きのと結婚して

長男忠三郎、二男長次郎、三男惣作、四男喜三郎、長女たけ、二女とも

の六人の子供があつたことになつてゐるが、長女たけさんの嫁入先冬木新四郎さんの一家を除いては行方がわからなくなつてゐる、もつとも新四郎さんも今は亡く、その子豊作さん(五)の代になつてゐるが、豊作さん達も「坂本長十郎」については何も知つてゐない、戸籍面から指を折つてみると長十郎が飛行機に凝つたのは三十四、五歳の壯年時代であつたわけだ、世間から嘲笑の的になり、結局考案も大失敗に終つたのではあるが時代の先驅者たらうとしたその心意氣には敬服すべきでなからうか

長十郎の屋敷跡は今隣家だつた故宇太郎さん(當主重徳君)の所有となり當時の土蔵が物置になつて残つてゐるだけであとは畑になつてゐる、母屋の方は同村小坂磯吉さんが買ひ自分のところへ建直して現に住んでゐる、大體長十郎の住んでゐたときと同じ家の恰好ですと榮十郎翁はいつてゐた(以上高崎市本多夏彦氏に負ふところ多し)

五郎兵衛の偽千兩箱

徳川に屈せぬその氣魄

お隣の信州北佐久郡に五郎兵衛新田村といふ、いやに長ツたらしい名前の村がある、この邊一帯

は大昔、蓼科山の裾野に連なるそれこそ満目荒涼たる原ツばだつたが、今から丁度三百餘年前上州南牧の谷羽澤村(北甘樂郡尾澤村大字羽澤)から市川五郎兵衛といふ大分限者が出掛けていつて蓼科山の裾を流れる鹿曲、布施の兩川を堰止めて延長五里二十町に互る用水を引ッばることに成功、現在見るやうな七百町歩といふ美田を開發したのだつた、住民はこれを徳とし村の名前を五郎兵衛新田と呼んだが、それでも未だ五郎兵衛に對する感謝が足りないと眞親神社(長野縣北佐久郡五郎兵衛新田村)としてその靈を祀つてゐる、近くはその殖産興業に盡した功により大正五年二月五日墓前において贈從五位の傳達式さへ行はれた(尾澤國民學校三澤訓導談)

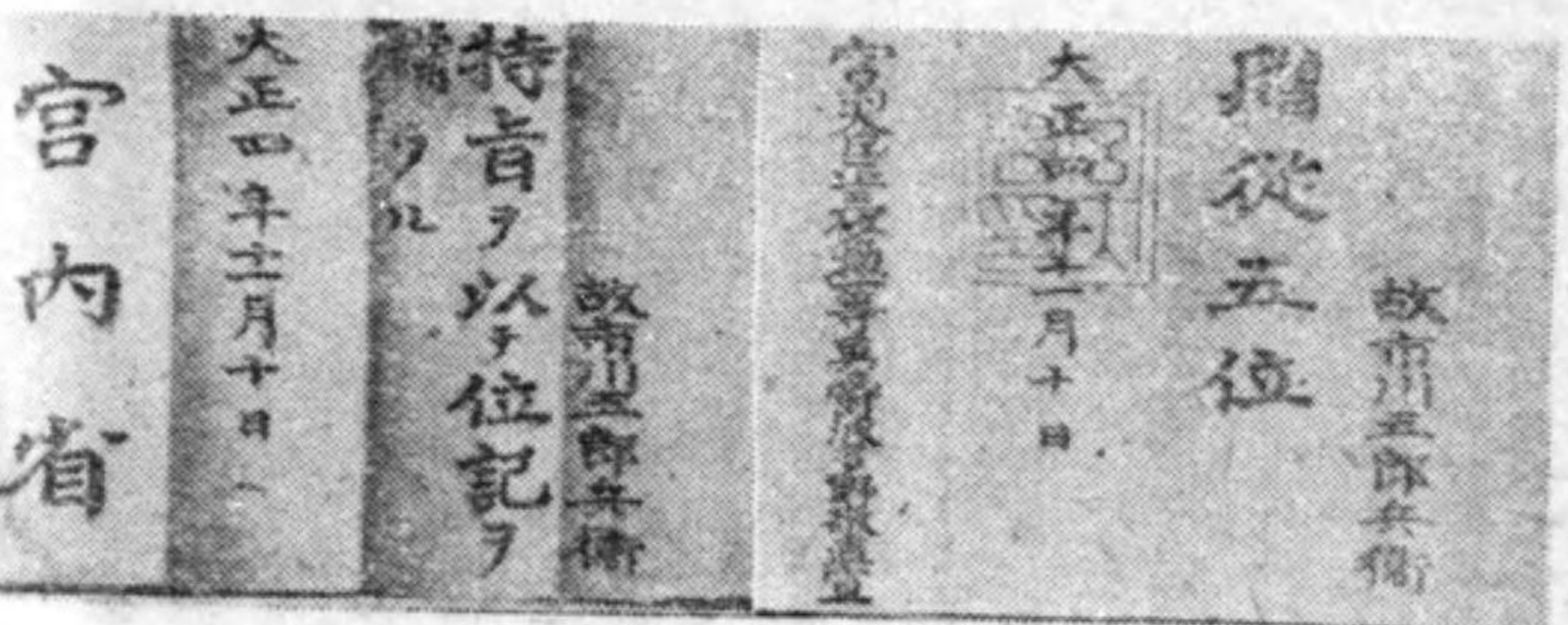
五郎兵衛、諱は眞親、元龜二年六月九日上野國甘樂郡南牧の郷士の家に生れ、幼名を市左衛門といつた、代々、四郎兵衛、五郎兵衛を代るく通稱とした。

大體が新羅三郎義光の出で、甲斐國市川庄に住したので市川氏を稱した累代尊皇の念あつく、一族みな節義を重んじた、義光十二代の孫市川五郎滿義は新田義貞に従つて延元三年七月越前藤島に討死し、その子市川五郎滿久も亦新田義興に従ひ、父滿義討死後廿一年目の正平十三年十月武藏國矢口渡に戦死してゐる。

このやうに滿義滿久父子二代の誠忠は天朝のために粉骨したが、滿久の子右馬之介眞重の代になると家臣とともに上州南牧に潜居した、その後は舊交の故をもつて武田信玄に隨身し特に右馬之介眞治(五郎兵衛翁の玄祖父)などは甲信の野に戦つて功があり、信玄の恩賞に預り新田村に近い蓬田、桑山、小田切、瀬戸、高野町等を貰つてゐる、佐久の地と市川氏との關係はかうして出来たもので後日五郎兵衛翁がこの地を開拓したのも決して偶然ではない。

天目山の決戦で五郎兵衛翁の主筋に當る武田勝頼公の首は家康の手に入つたものゝ武田の遺臣は恐しかったに違ひありません、家康はあらゆる手段を用ひて、武田氏遺臣の懐柔買収に努めたものと見えます、この懐柔の

手は當時南牧谷羽澤村に住し、隠れたる勢力を持つてゐた市川氏の上にも伸びてきたとは當然でした、かうして深淵の臥龍市川五郎兵衛と家康との対面といふこととなるのです、家康は何とかして市川氏を手狎づけ上信の備へを軽くしたかつたのでせう、關東を平定するや先づ禮を厚うして市川四郎眞久（五郎兵衛翁の父）を招聘しました、しかし眞久も立派な武士でしたから、おいそれとこれに應ずるわけがありません、さりとて今は眞正面から突ツ張ねるほどの力もないので病と稱して遂に出府しませんでした。



◎家康の名代として乗りこんで参りました、かうまでされてはいかな市川眞久でも病とのみ稱してゐるわけには参りません、深く考へた末、彼はその子を出府させる決心を致しました、この子が五郎兵衛眞親翁なのです、時に文録二年、弱冠廿三歳の眞親は一族の興亡を一身に擔つて家康に見参しました、家康はその遠路の勞を謝し言葉やさしく徳川に臣事せんと懇々と勧めました、すなはち市川家の家系（徳川氏と同族）から考へても一介の郷士として終るべきではない、祿は厚くするから仕へて見る氣はないかといふのでした、これに對して翁はきつぱりと志はすでに武士にありません、殖産興業に専心したき旨を答へ開墾許可の御朱印状をもらつて歸りました、こゝにいよいよ翁の一生を懸けた七百町歩の開田事業が始まつたのです（尾澤國民學校曾根訓導談）

「千兩箱がきたから皆で手傳つておろしてくれ」

十幾頭かの馬に積んだ何十個かの千兩箱の山、これを見て人夫達は大喜びだ、これだけの金がありさへすれば工事がいかにむづかしく、長引かうともびくともすることはない、ましてや食ふに困る心配はないし文句をいふことはない人夫達は重い千兩箱をどん／＼降して積重ねた、人夫達の面に漂ふ安堵の色と喜びをみてとつた五郎兵衛翁はさらに語を續けて嚙んで含めるやうに人夫達に説き聽かせるのだつた。

「俺はこの工事がすつかり出来上るまではこの千兩箱に手をつけぬつもりだ、その代り工事一段落の晩にはみんなでこの金を山分けにさせてやるヨ」

五里二十町の用水はその間に十二の隧道を持つてゐるが、三百年前にかうした工事にとりかゝつたといふことは全く驚嘆のほかない、就中そのうちの片倉隧道の如きは長さ百二十間これを開通するまでに二百二十日の日子と三千九百六十人の人夫、加ふるに山なす黄金を費してゐる、しかもかうした大工事を終始一貫私費で賄つたのだからいかに分限者市川家といへどもそろ／＼苦しくならざるを得ません、間もなく工事も完成しようといふ頃、人夫に支給する賃銀に事缺くやうになつてきた、人夫の中には不平をいふ者も段々多くなり中には見限りをつけて引揚げる者も出てきた。

「これは何とか金策を考へねばならぬわい」

といふので五郎兵衛翁は故郷の上州砥澤（群馬縣北甘樂郡尾澤村砥澤）に飛脚を走らせ前述した多數の千兩箱を運ぶことに成功したのである。

ところでこの千兩箱こそは翁が一世一代の腹藝だつたのだ。

何しろ事露見すれば工事もそれまでの運命だつたのですから翁の苦心もさこそと察せられます、實はかうして

運ばれた千兩箱の中味は砥石だったんですよ、當時市川家は上州砥澤の砥石山を持つておました「元和九年砥山御請負被仰付」といふ徳川直轄の御用砥として大分限者市川の名前はきこえたものでしたのです、この砥石を千兩箱にぎつしり詰めて宛も現金のピカ／＼した奴が一杯はいつてゐるやうに見せかけ菰包みにしたのを馬に積んで上信境の峠を越えて佐久に運んだものです、平常嘘をいつたことのない翁がのるかそるかかかしの瀬戸際に打ったそれこそ悲壯な腹藝だったのです、だから重いのをずつしりと肩に擔いだ時に、人夫共が大判、小判だと思つたのは當然でせう、工事に絶対確信がなくてははいへぬ、これこそまことのそら言とでもいふのでせう、單に一時の嘘といつて片づけるには余りにも嚴肅なものだったと思ひます（五郎兵衛翁の後裔、尾澤村の市川虎一郎氏談）

市村、三川田、五郎兵衛の三用水を掘鑿し六百八十餘町歩に灌漑したのだが、三百餘年前の幼稚な腕前ではなか／＼の大工事だった、或は岩壁をこつ／＼穿つて隧道を造つたり、または山の周圍に木樋を架けて水を導いた、漏水の甚だしいときは随分研究した擧句石綿と粘土で今日の混凝土のやうなものを造つて水漏れを塞いだりしたと傳へられてゐる、何分測量技術も、完備した機械もない時代だからこれには一番苦心した、例へば山間溪谷を測量する場合などは夜間兩方の谷に點燈してその高低を測定したといはれてをります（尾澤國民學校三澤訓導談）

翁がこの事業を成就したかげの力として夫人の内助の功を見逃すことは出来ない。

夫人は下仁田村大字吉崎の郷士高橋榮十郎の娘だが、夫の事業を大成させるために並々ならぬ苦心をしてゐるある日のこと、翁はいつもとちがつて暗い面持で歸つてきた。

あゝ今日はお仕事か順調に進まなかつたな

と思つた夫人はそれとなく翁に問うた。

何か工事に失敗でも起つたのではありませんか

翁は嘆息しながら

どうも困つたことになつた、折角土を盛り上げて堰堤を築き水を通してみると土が片つ端から崩れてしまふ、何とかいゝ考へはないものかなあ

丁度そのとき夫人は田樂豆腐を焼いてゐたが、暫くして思はず手を打つた。

田樂豆腐で急に思ひつきましたがこの豆腐を串に刺すやうに土くれを幾枚か重ねてそれを棧でさし止め、また幾枚か重ねては棧でさしとめていつたならどうでせうか

じつと耳を傾けてゐた翁は、ハタと膝をたゞき翌日はこの方法を早速實行して成功したのだつた、やがてこの方法は「田樂ざし」と呼んで工事中諸所に應用されてゐる、また工事が餘り長びくので、人夫共がその成功を危み中途で歸らうとすることもしばしばあつたが、こんなときは、それらの人夫を厚く勞つて、その上で諄々と説きかせ激勵したのもやはり翁の夫人だった。

工事が完成すると翁は飄然として上州羽澤村に歸つてしまつた、そして、出来上つた美田については自分は一かけらも所有しなかつたこの邊に翁の面目躍如たるものがあつた、寛永年間領主松平因幡守がその偉功を賞し除地高百五十石竝に屋敷を下賜したが翁はこれさへ全部村人に分ち與へ心靜かに佛門に歸依し光風霽月を友としつゝ、寛文五年九月九日逝いた、行年九十五、天壽を完うしたといふべきである。

五郎兵衛翁の墓は村外れの溪流に臨んだ叢の中にぽつんと置き忘れたものの様に立つてゐる、表面には正しく「歸元殿鐵圍山大徳靈位市川五郎兵衛眞親」と刻んであるが偉人が靜かに冥る永遠の憩ひ場としては少し寂しすぎる。

翁の生家は明治初年頃まで尾澤村砥澤にあり代々子孫が住んでゐたが當主市川四郎氏の父市川眞

英氏に至り長野縣北佐久郡五郎兵衛新田村に移住するに及んでそのあとは尾澤村避病院となつてしまつた、所が更に明治三十年尾澤小學校が建てられるに際し、残つてゐた遺跡等も心なき人に持ち去られてしまつたので今は往時を偲ぶ何物もなくなつてしまつた、長野縣に移つた眞英氏は眞親神社の神職をしてゐたが、十年前死亡、現在は四郎氏が代つて先祖五郎兵衛翁の靈を祀つてゐる。

(附記) 市川五郎兵衛翁は御關所守として住んでゐました、もともとこの邊一帶は(下仁田の奥上信國境尾澤村)中仙道碓氷峠の裏街道の關門に當り頗る要所として知られてゐたので嚴重な通行改めが必要だつたらしいです。(曾根訓導談)

劍士 鈴木政武

石の薬師様を袈裟斬り

今から百七、八十年前の明和、安永年間に上州七日市(富岡町)一萬石前田侯の領内、北甘樂郡岩平村岩崎に鈴木郡藏政武といふ劍士がゐた、馬庭念流で有名な樋口十郎左衛門定嵩(寛政八年四月十日歿、歳九十四)の高弟だつた、定嵩は樋口家二十三代を嗣ぎ

定嵩壯年より業に精達し教傳最も懇切なり、門人一家をなす者數十名、諸侯またその門に入る者少からず(岡部福藏著「上野人物志」)と後世に傳へられてゐるほど當時門人五千名を下らなかつたといふ馬庭道場の全盛時代を築いた人

である、鈴木政武はその數ある門弟中、指折りの一人であつた、しかも安永八年八月二十一日、三十八歳で歿してゐるところを見ると若くしてすでに念流の奥儀を極めてゐたらしい。

政武は岩平村岩崎の富岡から馬庭まで一キロの間を毎日道場へ通つてゐた、それは或る小雨の晩であつた、その夜はいつになく遅くなつて歸つて來た、馬庭から吉井町へ出て字池地先から鍋川の

橋(今の多胡橋よりすつと上流で舊高崎街道である)を渡つて富岡へ入ると、すぐそこは

薬師様の森になつてゐた、石像の薬師様を祀つてあるところだ鬱蒼として晝でも怖いや。女一人でよくまあこんなところを通れるものだ、と思ひながらすれ違ひにヒョイと政武が傘の下をのぞくと驚いた、大きな一ツ目がギョロリと光り耳まで裂けた口がだらしなくボカンと開いてゐた



政武の斬つた石切薬師

うな森であつた、毎日のことだし、勿論恐いなどといふことは考へたこともない政武だ、いつものやうに何んの氣なしに森を通り抜けようとして、フト前を見ると夜目にも美しい女が一人蛇の目の傘をさしてやつてくるのだ、ほ、う、今ごろ

ハツと思つた瞬間、政武はもう刀を抜いて一太刀サツと斬り下げてゐた、ガリツと双こぼれのする

やうな音とギヤツといふ異様な叫び聲がして妖怪は姿を消した。

「手應へがあつた」

政武は刀を鞘に納めると、何事もなかつたやうな顔で家へ歸つた。

ところが朝になると大變だ、薬師様の石像が右肩からなく、左へ袈裟がけに斬られて二つになつてゐる、臺石から轉げ落ちて割れたにしては見事な割れ方だし、噂に聞くと近頃時々化けて出るといふから、昨晚の雨に化けて出て、通りがかりの誰かに斬られたのではないか、斬つたにしてはまた鮮かなものではないか、一體石像がこんなに見事に斬れるものかしら、斬れる斬れないで薬師様の森はごつた返す賑はひだつたが、そのうち誰か一人が

「鈴木先生ならこのぐらゐ平氣だぞ」

といひ出すと、さうだ、鈴木先生だ、鈴木先生に違ひないと衆議一決、凄腕だなと皆んな二度びつくり、さうして

「政武の薬師様斬り」

は忽ちの間に喧傳され、おかげで富岡の石薬師様は毎日見物の人達で押すなくの賑はひ、掛茶屋も店を張る騒ぎだつた。

袈裟斬りにされた薬師様は、今でも薬師跡の雑草のなかへ、放り出されてあるが、同村國民學校長近藤穀藏氏(註)はこの「薬師斬り」について次のやうに語つてゐる。

「あれは實際斬つたものでせう落ちたかどうかして割れたものとしてもあんなに見事には割れないでせう、石を斬つた例は昔奥州の白河でもあつたし、燈籠斬り虎徹とか、石を刺してだんご刺しの名刀といはれた長船長

光など日本刀の話のなかにもいろ／＼傳へられてゐますから事實石は斬れたんですな、斬つた刀についてはつきりしたことはわかりませんが、話の様子では「天正の祐定」備前物ではなかつたかと想像されます、遺品とか資料のやうなものが何も残つてゐないのでまことに残念に思つてゐます」

資料のないといふことは政武は勿論、この鈴木家にとつても遺憾千万なことだ、鈴木は郷土の出で幕末の頃には岩崎の富岡では聞えた酒造家であつたらしい、屋敷だけでも

「二町八反雨がかゝらなかつた」

と今でもいひ傳へられてゐるほど宏壯なものだつた、鈴木の旦那様が七日市の藩へお出になるといふと駕籠に乗つて高張提燈を立て槍持や道具箱かつぎを供に揃へて行列することを許されてゐたといふから相當な名家であつたことが想像される。

鈴木の本當主喜作さん(註)は昔の屋敷跡だといふところから少し南へ寄つたところでお百姓をしてゐるが「昔の鈴木」について語つてゐる。

「鈴木は私で廿一代ださうです先祖はこの地方きつての分限者だつたといはれてゐますが、今はもうすつかり貧乏してしまつて御覽の通りの水呑百姓ですよ、薬師斬りの政武は私から何代前になりますかな、先祖のことでも、だらしない話ですが人様から聞いてゐる程度にしか知らんですよ、私の祖父にあたる人に久作といふ人がゐました、明治維新の頃ですな、この人が大變な道樂者で大身代を終らせました、なんでも屋敷など切り賣りましたといふから、かなり大きなものだつたと想像してゐます、それでもまだ私の子供の頃にはお駕籠とかか三間槍、刀劍、古文書の類が澤山ありましたが、十四のときでしたかな、九月の或る晩の火事ですつかり焼いてしまひました、私もその晩はゐなかつたし父の學一もまた生憎不在だつたのでそれこそ先祖の位牌一つ持ち出さずに綺麗に焼いてしまつたんです、まづたく泣いても泣ききれませんでしたよ」

話が餘談に入つたが郡藏政武の武勇傳をもう一つ御紹介しよう、或る年藩主前田侯が伊香保温泉